

【難波津梅の濱】 難波津の梅の稱へに因む。

【難波寺】 天王寺の古名。

【難波の大君】 仁徳天皇を指す。

【難波の京】 仁徳帝難波皇都のあつた因みから大阪を

稱する、但し此處のは、此戯曲が大阪と京とに跨つ

た脚色ゆへ、よしあしの難波と、京の物語と云つた

意味である。(女腹切の上)

【難波に咲くやこの花の】 俗に博士王仁の詠とか云ふ

「難波津に咲くやこの花冬籠、今を春べと咲くやこの

花」の歌から、この花は梅で、本編の梅川を利かせ

たもの。(冥途飛脚の上)

【難波の祖師の名號】 其頃有名なる法然上人の「難波

の名號」を云ふ、祖師法然上人が後白河法皇と共に、

天王寺の西、一心寺にて日想觀修の時、上人の筆

にて六字の名號を書いた。俗に之れを難波の名號と

稱す。

【浪華のよしあし】 浪華の葭芦と、善し悪しとにかけ

る。

【難波橋】 浪花橋とも書く、大川筋に架る、北濱と天

満との間の橋。

【浪花橋の辻】 難波橋筋の辻、本町は東西通り、大川

に架せる難波橋の橋筋は南北に本町を貫く。(今宮心

中の中)

【名にめでて】 遍昭の歌、古今「名にめでて云々」を

轉用した洒落、女郎花は松風になぞらへる。(松風村

雨の一)

【何やかや取らせて】 きまぐれの金品を與へてとの

義。

【名主】 郷とか町村とかの長、庄屋に同じ。

【なのりそ】 莫鳴菜、ほどはらのこと。

【那波かしゃくしか室が泊りか】 那波、佐古志、室、

いづれも播磨國の地名(松風村雨の五)

【苗代水に云々】 能因法師の「天の川苗代水にせき下

せ、天下ります神ならば神」から取る。(卯月の上)

【名は須彌山】 名は極めて重いとの義。

【名は體を呼ぶ】 「名は體をあらはす」名詮自稱の意。

【細障】 細で障をすること。

【細簾の裳裾云々】 小蛇の群がり纏はる形容。(松風村

雨の一)

【繩付】 犯罪人。

【繩にもかゝらず】 繩は、くちなはのもぢり、蛇の捨

にならずとの義。(今國性命の下)

【繩節】 繩の節をなした結び目のところ。

【鍋が茶屋】 河内牧方かなべ山の茶店。

【鍋釜の墨云々】 當時の奴は鍋釜などで書きひげをし

た慣習があつたから云ふ。(夕霧の中)

【鍋取公家】 武官の總稱、冠に着けた袴が、俗に鍋取

りに似た故、これを名とする、卑めて云ふのではな

い。

【鍋の月代石の鬚】 めつたに見た事もないとの喩、此

處は鉢叩きの節で歌ふて居る。(關八州繫馬の一)

【鍋の鉉】 鍋に取り付けた弓形の取り手。

【直さぬ額】 娘の時分の姿。

【なまいだ坊主】 墨の衣に袴、炮烙頭巾を着た坊主が、

鉉を鳴らし口から出まかせに、念佛にまぜて淨瑠璃

物真似小唄など歌ふて、金錢を貰ひ廻つたものであ

る。

【生魚】 生きてある魚、鮮魚。また、若い活き／し

た男のことを稱する。

【生壁の釘】 豆腐に釘と同様、反響のない喩。

【生臭き】 生魚の臭きが如く、鼻もちのならぬ義。

【糞談三曼多云々】 不動明王の根本咒。

【生心】 なまじひに物事を辯識する心。

【生媚】 生意氣。

【繪をかけ】 繪用の大根を細かくかけ。

【繪にたゞけ】 粉微塵に擲き潰せ。

【鯨尾作り】 刀の作り、鯨尾に似た故名付く。

【なまづ川】 本稱は鯨江川なり、片町と網島の間の小

川、昔時大阪から野崎詣りの船の順路は、此川を上り

寝屋川に出たと云ふこと。

【生爪を放す】 これも髮切同様、遊女の誓ひ、心中立

の一法。

【生面下げて】 何の面目あつて。

【生中】 生じひに同じ、成さず共よい事に拘はりての

意。

【生になり】 生酔になり。

【生抜つて】なまは接頭語、油断しての義。

【生温い姿】にやけた風。

【生箸】生臭箸のこと。

【生兵法大疵云々】生かぢりは大失敗の基と云ふ諺。

(國性爺後日の一)

【生ぶし】生節にかけて、なまくら武士を罵る語。

【生物】生々しい珍品。

【なまりちらし】國訛りと、刀の銀拵への胡散な鉛らしいと意にかける。(冥途飛脚の上)

【波がへし】雅樂「青海波」の曲にある太鼓の秘調。

【波舊苔の髭云々】舊苔は古い苔、朗詠の「水消浪洗二

舊苔鬚」から探る。(國性爺後日の二)

【波こゝもとや】源氏の「波たごゝもとに立ち来る

心地して」の句による。

【涙いとなき】涙の絶える暇のないこと、いとなきは

いとまなき、やすむまなき義。

【涙を添へよとや】これより相の山節になる、但し歌

は「夕べ朝の……驚く人もなし」野邊よりあなた：

…冥途の友となる」。(反魂香の中)

【涙川】涙の止めどない程流れ出るを、川に例へて云

ふた古語、伊勢「いづこまで送りはしつと人とはい

あかぬ別れの涙川まで」。

【涙貫く】涙珠を貫く。

【波に山王祭七所】江州阪本の日吉神社の祭禮を山王

祭と云ふ、神輿は湖上を唐崎に渡御する船祭ゆへ、

其模様を彫つたもの、七所とは祭神上中下各七社あ

る故名付ける。

【浪に花咲く櫻川】貫之の「常よりも春べになれば櫻

川、浪の花こそまなくよすらめ」常陸國筑波郡にあ

る川。

【波に揺らるゝ沖津船云々】祐經の屋形へ導く案内者

は此處にあるとの謎、「曾我物語」にもある通り。

【浪の緒すげて云々】古今「都までひびき通へる唐琴

は浪の緒すげて風ぞ弾きける」を探る、(浦島の四)

【波の白木綿青幣】白波青海を、木綿四手、幣に喩へ

て云ふ。(女護島の四)

【波の楯】波のやうに立て並べた楯。

【波の縮みの明石湯】波の縮みにかけて、播州明石の

名産明石縮をもぢる。(佐々木の三)

【浪の花雪】浪の白ふ泡立つを、花に雪に形容して云

ふ。

【波分】映(むながい)の中央の稱、馬の胸の邊を云ふ。

【南無幽靈即往南方無垢世界】女の靈に對し、即座に

無垢世界に往生し、菩提に入れと回向する經文であ

る。(兼好法師の中)

【なむきやらちよんのふとらやあ〜】阿彌陀如來の

根本陀羅尼の詞を撰つて唐音らしく聞かせたものと

云ふ、近時の流行歌「づぼらん坊主」の中にも「なむ

からかんのとらやあ〜」の文句が見える。(國性爺

の二)

【南無三寶爲なしたり】大變な事をなしたものかたと

驚愕の詞。

【南無三枚肩】南無三寶を三枚肩に言ひかけた、三枚

肩とは一挺の駕籠に三人身夫の付くもの。

【南無釋迦云々】以下唐音のお念佛。(今國性爺の下)

【南無諸佛分身と書いた六字】當時双六の骰子の目に

書いた字は一より六までの数字でなく、南無諸佛分

身の六字を書き一から六までの順位を示したもので

ある、淨土双六から轉生した前身を語つてゐる。

【南無と云つばは歸命】歸命の梵語を南無と云ふ。

【南無佛南無法南無僧】即ち佛、法、僧の三寶。

【なめたり】無禮たり、人を見くびること。

【名も盃云々】狸々と月の縁。(松風村雨の一)

【納屋は歌】は歌は端歌だとの説もあるが、後の近松

半二の改作「心中紙屋治兵衛」には此條の文章をそ

つくり用ひてあつて、納屋は歌を「はやり歌」と書い

て居る、或は原本の「はやり」とあるを、筆者が「納

や」と書損したか、不詳。(天網島の上)

【那由他の羅網】萬億の寶の網、天界及淨土を莊嚴す

る具の一つ。

【名寄せ】名づくし、名稱大よせの義。

【奈良團扇】奈良の社人が初め作つたとも傳へる、奈

良特産の古雅な團扇、判じ畫などの描かれたのもあ

る。

【鳴尾】鷹の尾羽の名稱。

【奈良柏】柵の異名。

【奈良刀】 奈良住の刀工の製作、後には鈍刀の稱。

【奈落】 地獄のこと、「泥犁」と同じ。

【奈落】 こゝのは海の底を云ふ。(用明天皇の二)

【奈良座】 奈良に居た金春、金剛、喜多三座の謠曲家

元の稱又は其流派の者を云ふ。

【奈良草履】 奈良から産するもの、主に細緒のもの。

【奈良坂や此手彼の手云々】 萬葉「奈良山のこのてが

しはのふたおもに、かにもかくにもねじけ人かも」

による、奈良坂は別註あり。

【奈良晒】 奈良から出す晒し麻布。

【ならし竹】 衣架、着物などの掛け竿。

【奈良芋】 奈良産の麻。

【奈良茶】 茶飯茶粥などに豆類大角豆など入れたも

の、もと奈良東大寺、興福寺などで炊き初めたと云

【奈良茶】 こゝのは奈良茶飯のこと、茶飯に粟、慈姑、

豆など混ぜたもの、淀川筋には奈良茶飯を賣るうろ

舟があつた。(餉櫃三の下)

【奈良茶かや此手盛にて云々】 土御門院御製「時雨ふ

るこの手拍のふたおもてとにもかくにもぬる、袖か

【奈良茶粥】 大和奈良の風に朝食に茶粥を啜る、節儉

の爲めであると云ふ「奈良茶」参照。

【奈良漬】 糟漬の一種、茄子、白瓜など漬けたもの、

もと奈良から製し始めたから名付ける。

【奈良の舊都を此處に改め】 奈良の皇居を山城長岡に

移されたのは桓武朝延暦三年十一月のことである。

【檜の葉守】 檜は、かしの異名、檜の葉守は古歌に

も詠まれた檜の葉の守り神、御食津の神。

【奈良の都の八重櫻】 伊勢大輔の「古の奈良の都の八

重櫻今日九重に匂ひぬるかな」から出る。

【ならびて】 同じ様に立ち並んで、同腹のこと。

【双の岡】 京都仁和寺の邊、妙心寺の西、一二三と南

北に三丘双んで立つ、兼好が晩年の隠棲地。

【奈良伏見】 奈良の遊里は木辻、伏見は撞木町。(淀鯉

の上)

【奈良諸白】 奈良酒のこと。

【奈良油煙】 奈良にて製する上品の油煙製墨のこと。

【成合】 成るがまゝに任せる。

【成金】 將某の語、敵の地盤へ入つた駒は、皆金に成

れる故に名付ける。

【態に似せて經苧をまく】 經苧とは、績糸を丸ふ巻ひ

たもの、「面に似せて經苧を巻く」とも云ひ、各人相

應の性に從ふて物事に異同あることの喩。

【鳴り羽ぶいて】 鳥が羽をたゞき鳴らすこと。

【生飄】 飄は水を掛む器で溢死の骸の垂れ下つたり喩

へたが、近松が信仰の「徒然草」の文「なりひさご

と云ふ物を人の得させたりければ、ある時木の枝に

かけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを云々」か

ら採り「生飄風に揺らるゝ如く」としたのである。

(天網鳥の下)

【業平の思ひと戀と兩國に】 業平の妻は大和に、戀女

は河内にありし故云ふ。(三世相の四)

【成良親王】 後醍醐天皇第四の皇子。

【成りんじ事をば説かず云々】 既に成したこと、遂げ

たことを、兎角言ふも無益との意。

【鳴尾崎】 西の宮の東、武庫川の出口。

【鳴るは瀧の水】 延年の舞の歌詞。

【成る程つめて】 出来るだけ充分に盛り入れてあげや

う。(女殺の下)

【なるみ瀧】 尾張國鳴海の浦のこと、熱田の東南一里。

【馴れ猫云々】 實方を手詞ひの猫に喩へ、何を鳴くぞ

と裏問ふた詞。(賢女手習の二)

【名和の又太郎】 伯耆國名和の人、良年と稱する富豪、

後醍醐帝隠岐に居すや、船上山に迎へ討賊の義兵を

擧げた忠臣。

【南圓堂には八角眼玉云々】 南圓堂の圓と八角目玉の

八角との對照。(女護鳥の一)

【南圓浮洲】 須彌四州の一、圓浮提のこと、圓浮は樹

の名、この洲の上に圓浮樹がある故に名付けると云

ふ、佛教の語にて此世界を指して稱する。

【南海の火浣布】 支那人の臆説に、火鼠の毛にて織り

火に投じても焼けぬと、即ち石綿で製したもの。雲

南地方の特産。

【南嶽】 支那湖北荊州府の附近にある山、神仙の棲地

と稱せられる、慧思禪師が弟子四十餘人と來居した

地、芙蓉が嶽は其最高峯を指す。(今國性爺の中)
 【南岳山】 五岳の一なる衡山のこと、湖南省洞庭湖の南にある。
 【南岳大師】 支那天台宗の第二祖慧思、大建二年南嶽に入り、住する八年にして寂、世稱して南岳大師と云ふ、聖德太子は大師の再誕との傳説がある。
 【南京】 北京に對する金陵の稱、思宗の崇禎二年に北京は鞏靉の爲に落ちたから、南京を帝都とした。(國性爺の一)
 【南京】 南京燒の略。
 【南京の八匁】 南京は南京燒の略、「繪南京」と稱するもの、燒物の鉢を八匁にかける。(博多の中)
 【南京北京云々】 支那十三省の内の省名。
 【南京綿云々】 南京種の産綿、此あたりの文は菱屋の職に因んだ縁語。(今宮心中の上)
 【南枝花始めて開く】 朗詠集の「誰言春色從東到、露暖南枝花始開」を取る。
 【南嶺部洲】 須彌山の南にある洲、樂は東北二洲に劣るが佛に遇ひ法を聞くことは四洲中の第一とす、も

と印度を指したが、後は吾人の住む全世界を云ふに至つた。
 【南大門のくわんの木云々】 東大寺南大門の頑丈な門の貫の木や桐(古名釘貫)のもぢり。(女護島の一)
 【難陀、跋陀】 難陀跋難陀、八大龍王中の兄弟難陀龍王、跋難陀龍王のこと、如來降生の際雨を降らし灌ぎ奉つたと云ふ故事がある。
 【難陀龍王】 以下八大龍王の名(松風村雨の三)
 【なんであう】 何云、何として。
 【なんであう】 何である、何事であるか、げすの詞。
 【南殿】 紫宸殿のこと。
 【南天と大蒜】 厄病除けの呪ひ。
 【納戸】 貴人の家の中にて、衣服調度など入れて置く場所。
 【何とお入り候ぞ】 如何にお暮しなさるか。(大磯虎の三)
 【南都東大寺大佛殿再建】 南都は奈良、東大寺は俗に奈良の大佛殿と稱す、史實に據ると其再建後、供養のあつたは建久六年三月十二日で、頼朝は此時に上

浴したとある。此場では其以前に畠山重忠が上つた事を作る。(出世景清の一)
 【納戸戸棚も見せさしし】 家の内を隅々迄搔きさがすこと。
 【南都に飛白酒】 飛白酒は霞酒のこと。
 【なんどり】 穩か、穩當。
 【難なく過る月日の關や】 これ迄が「國性爺」の文章で、それを道具屋節で語らせて居る、道具屋節は道具屋吉左衛門の創めた金平まがひの勇壯な一流。(天網島の上)
 【なんく】 なみく、充ちく。
 【南方毛抜】 尾張國名古屋産の毛抜の稱、南方とは銀冶の名、源敬公この毛抜の一筋の毛も残さず抜けるのを賞して、諸葛亮の出師表中「深入不毛南方已出」の句から、南方の稱を與へたものと云ふ。
 【難波橋】 道頓堀川惠比須橋の西の橋、紀の海音の「難波橋心中」などがある。
 【難波燒】 高津から製出する赤色の陶器、嘉平次の家で主に賣つて居たものらしい。(生玉の上)

【南蠻外科】 葡萄牙、西班牙等から輸入した外科療法。
 【南蠻ころ】 南蠻舶來の毛織物呉服服連の略、駱駝又は羊毛綿麻をまぜて織つたもの、それにて刀鞘を包んだものであらう。(反魂香の中)
 【南蠻流】 外科術のこと、外科は南蠻舶來の醫術なれば稱す。
 【南方無垢の成道】 龍女生を變じて男子となつた、即ち北方(陰)から南方(陽)無垢世界へ赴ひて成佛するの意。
 【何萬石ぞ幾萬人云々】 多くの知行高と多くの人の數、大名は胎内から領地を持ち領民に敬はるゝ果報があるとのこと、一粒の縁語から何萬石とつゞける。(丹波與作の上)
 【南面の位】 天子の位、天子は南面して座すと云ふに由る。
 【難問】 質問問答すること。



【煮合ふ音】物を煮き合ふやうな火熱の燃ゆる音。
 【二天作五】以下算盤の九々の聲。(天網島の中)
 【にむつうく云々】唐人の誓詞、説明の限りにあらず。
 【二位の尼君】清盛の後妻、平時忠の妹時子のこと、宗盛、知盛、重衡の母。
 【寶殿】禁中にて、諸國から貢する御贄の魚鳥などを納め料理する所。
 【寶殿】此處のは、魚鳥を藏めた料理場。(加増の三)
 【熱ばな】茶の入れ立て、煮端のこと。
 【煮える】煮え返る、湧き立つ、騒動すること。
 【荷が下りる】肩の荷が下りるの略、氣が安まり氣が樂になる。
 【二河白道云々】人ありて西に向ふて行くと忽ち二河が現はれた火の河と水の河と、其真中に廣さ四五寸

の白道がある、水火交も溢れ流れて、渡るに困難である、のみならず群賊毒獸後から迫つて来る、進退谷まつて白道を進み行こふとすると、東岸から聲あつて、汝此道に來らば必ず死の難なからんと勸める、又西岸からは、汝一心正念にして直に來むと喚ぶ、遂に意を決して西岸に到り、永く諸難を免れ善友と共に慶び樂しむことを得たと云ふ、信心守護の喩。
 【二合半】奴の切米を云ふ。
 【二合半】山の高さと(一合とは全山の高さを十合に割つて數へる其十分の一)奴など身分の低い者の給米をもぢる。(孕常盤の二)
 【和妙】織の細かい栲、あらたへの對。栲は往古絹布類の總稱。
 【握り墨】握り堅めて作つに墨、型に入れずに。
 【憎い者は生けて見よ】憎い人も忌み殺さずに、寛恕の目で扱へとの意。
 【肉髻】三十二相の一、佛頂又は頂髻と稱し、佛の頭頂の肉の隆起して髻のやうに見へるを云ふ。
 【肉陣】揚國忠が冬季宴席に、婢妾等を前に列し風を

遮らしめ、それを肉陣と號した、轉じて豪華の遊樂を稱する語。

【憎體雜口】憎らしい仕向け、惡口。
 【二九の鏡】二九十八と老けて映る憎い鏡にかける。(井筒業平の二)
 【憎ひが余つて云々】「不孝な兒ほど尙ほ可愛い」と「可愛さ餘つて憎さが百倍」と云ふ諺を取り合はせて云ふ。
 【にくや似氣なき田舎人云々】あの男は富豪であると仲人口に乗せられて、不似合な見も知らぬ田舎者と結婚するやうな水臭い夫婦仲は、たとへ千年同居して居つても實に無意義なはかないものであるとの義、つれづれ草に「世にありわぶる女の、にげなき老法師、あやしのあづま人なりとも、にきはしきにつきて、さそふ水あらばなどいふを中人、いづ方も、心にくきさまにいひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ。(つれづれの三)
 【二月堂の荒若狭】二月堂の關伽水を俗に若狭の水と云ふ、それに囚んだ稱。(女護鳥の一)

【二月中旬にふりを獻す】ふりは瓜の古語、唐の玄宗が温泉宮を設け、温室で瓜を熟しめ、二月中旬既に獻瓜を見ると云ふ「三體詩」に出た榮耀豪華の比喩。
 【二貫目近い二十兩】金と銀の換算相場が高ふなり、銀二貫目で金二十兩弱と云ふ、所謂賣買高い相場を云ふ。(女腹切の中)
 【逃足落足】逃げる、落ち行く事を云ふ。
 【逃尻】「逃げ腰」と同義。
 【逃吠】吠えながら逃げ走ること。
 【二言と聞かぬ】二た言と聞くまでもなく、承知したとの義。
 【二三の松】橋がかりに立てた松、舞台に近ひを一の松(要の松のこと)、次を二の松(風)、鏡の間(樂屋口)に接したのを三の松(掛り松)と云ふ。
 【二字】武士の二字なり。(女殺の上)
 【西頭】西のはし。
 【西川尻】備前國兒島灣藤戸の所在。
 【錦革】紫地に模様を白う出した革。

【錦皮】赤地の皮。

【錦毛】錦の絨毛。

【錦手】染付の磁器、五彩の釉で模様書きしたもの。

【錦の纜】蘭の楫、柱の棹。錦欄で作った船の綱、木

蘭で作った楫、柱の木の棹など、結構の美を盡した船の形容。

【錦の小路】京、四條通の北の筋。

【錦の旗】天皇旗、赤地の錦、上に日月の形象を表はす。

【錦縁】錦地の疊のへり。

【西口】砂場にある新町廓西の大口を云ふ、佐渡屋

町は西の端で道に近い。(冥途飛脚の中)

【西坂本】山城國愛宕郡修學院村のこと。

【にし達】主達の國訛り。

【西の海棹木が原】續古今一西の海あをきはらの波

まよりあらはれ出でし住吉の神から出る。

【西の大寺】奈良の西、昔、東大寺に對す巨剎、孝謙

天皇の勅願寺、西大寺を云ふ。

【西の京、東の京】昔、京都を二つに分け、朱雀大路

を境界に右京左京、即ち西の京、東の京とした。

【西の對】禁中又は貴族の屋敷の、寢殿の左右に設けた別棟の建物の稱、對の屋の略、其西方のを西の對と云ふ。

【西の洞院へ流す】西の海へサラリと流すと云ふ厄拂

ひの洒落、西の洞院は烏丸(大經師の所在)から三筋

西の町名。(大經師の上)

【西の洞院中道寺】往時西の洞院中道寺町に遊女町が

あつた、後、六條三筋町と共に島原に移された。(女

夫池の四)

【西の宮の左大臣】源高明、醍醐天皇第十七の王子、

政事に通ず、一時讒に由り太宰權師に貶せられた事

もある、西宮抄の著がある。

【西の戻り足】入日の西と淡路町から新町は西に當る

故、廊戻りの意にかける。(冥途飛脚の上)

【西八條】清盛の館の所在、清盛を一名西八條太政大

臣と呼ぶ。

【西東覺えてより】物心の付いた幼少の時。

【二十騎】二十人のこと、騎は人の義。(吉岡染の中)

【西吹く風】西方淨土の縁。(用文章の四)

【二十五有】衆生が輪轉する生死界を二十五種に分け

たもの、有とは因果不亡の義、因によつて必ず果を得ると云ふ義。

【二十五日】元暦元年三月二十五日。(佐々木の二)

【二十五の菩薩の歌】二十五菩薩は、佛を信じ往生を

願ふ者の爲に來迎し、行者に護り附き添ふて惡鬼神

を防ぐもの、今朝の三昧線と念誦とを歌舞の菩薩と

二十五菩薩とにかける。(二十五菩薩とは、觀世音、

大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在王、陀羅尼、白

象王、虛空藏、寶藏、德藏、金藏、光明王、金剛藏、

山海慧、華嚴、日照王、月光王、衆寶王、三昧、獅子

吼、定自在王、大威德、大自在王、無邊身の各菩薩)

(三世相の三)

【二十三夜なれど一向宗は云々】灸をすへる日のこ

と。

【二十三夜の代待】二十三夜の月代を待つので、夜更

けまで待ち更かす。

【二十四孝の揚香】揚香幼時、父と畑に出た時虎現は

を境界に右京左京、即ち西の京、東の京とした。

【西の對】禁中又は貴族の屋敷の、寢殿の左右に設けた別棟の建物の稱、對の屋の略、其西方のを西の對と云ふ。

【西の洞院へ流す】西の海へサラリと流すと云ふ厄拂

ひの洒落、西の洞院は烏丸(大經師の所在)から三筋

西の町名。(大經師の上)

【西の洞院中道寺】往時西の洞院中道寺町に遊女町が

あつた、後、六條三筋町と共に島原に移された。(女

夫池の四)

【西の宮の左大臣】源高明、醍醐天皇第十七の王子、

政事に通ず、一時讒に由り太宰權師に貶せられた事

もある、西宮抄の著がある。

【西の戻り足】入日の西と淡路町から新町は西に當る

故、廊戻りの意にかける。(冥途飛脚の上)

【西八條】清盛の館の所在、清盛を一名西八條太政大

臣と呼ぶ。

【西東覺えてより】物心の付いた幼少の時。

【二十騎】二十人のこと、騎は人の義。(吉岡染の中)

れて父を奪ひ去つた、揚香身に寸鐵を持たなかつた

が、唯孝の一念で飛びかゝつて虎の頸を扼した、虎

は驚き父を放つて逃げ去つたと云ふ、二十四孝中の

物語。

【二十二の糸】年と、三昧線の二三の糸とにかける。

(水朔日の下)

【二十二社詣】本編「卯月紅葉」の解説に詳叙した故

省く。

【二十八宿】天體の所在を表すために作られた區分法

で二十八の數字は月が天球を一周する日數である、

支那では東西南北の各方各七宿宛を配してゐる。

【二十八日】治承四年十二月二十八日の南都攻め。(女

護鳥の一)

【二十八部衆】觀世音菩薩の下に侍する二十八神、金

剛夜叉とは其内の那羅延堅固、密迹金剛の事にて、

俗に二王と稱する、寺門の左右に立つ神。

【にじむじんい菩薩云々】普門品第二十五の文、爾時

無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊

觀世音菩薩。(盛久の五)

【煮め】煮しめ飯。
 【二首の辭世】「二つ腹帯」にも引用せる事を思へば、實際に據つたものであらう、歌は本文の通り故略す。
 (宵庚申の下)
 【二乗作佛】聲聞と緣覺とが佛になること。
 【にじり上り】數寄屋の入り口。
 【似せ事】詐偽。(吉岡染の上)
 【二世三世五世七世五百生】生々死々未來永劫。
 【二世の本懐】現在と未來と二世かけての本望。
 【似せ紫の重ね妻】王子が女装の様を云ふたもの。
 (日本武の二)
 【似せも似せたり五十杯】人を欺くを一抔喰はずと云ふ、五十兩にかけて五十杯と云ふ。(冥途飛脚の上)
 【二千年の石橋云々】支那天台山にある石を云ふ。(枕言葉の四)
 【二千里の外故人の心云々】和漢朗詠集の「三五夜中新月色、二千里外故人心」の句を採る、月に對して二千里外の故舊を想ふ情に寄せる。
 【二千兩の借金】事實は吾妻身受の金で、この金が原

因で淀屋は缺所になつた「解説」を參看。(淀鯉の上)
 【二足を小判一兩】缺落者の慌てたる様を云ふたので小錢なき故草鞋二足に小判一兩拂ふたと云ふこと。
 【二代の朝敵】平將門と其子良門。(關八州の三)
 【にたゞしき首云々】太平記十五に、律僧正成等の死骸を求むと欺きしを、賊兵眞とし、似た首を曝し、を、或者これは似た首なり、まさしげにも書きける虚事かなと落書したり云々、にたは新田にかけらる。(女楠の三)
 【蹴かける】くねりかける。
 【にちければ】こねる、ねちくる。
 【二重の塔】吉野山に在る義經の蹴ぬけの塔。
 【二町五段】馬場は長さ二町廣さ五段。(鎗權三の上)
 【二挺の弓】「二張の弓は引かぬ」の諺がある、女は二夫にまみへずの意、こはお才が二夫に仕へることを云ふ。(鎗權三の下)
 【二張の弓を引く】二た心を持つことの喩。
 【仁木播磨守、石堂右馬之介】誠忠武鑑に由ると東隣は土屋主税、北隣は本多孫太郎屋敷、仁木石堂は高

師直時代の人物。(碁盤太平記)
 【肉桂】熱帶國に産する桂の木皮、一種の高い香りがある。
 【につ坂の蕨餅】日坂の宿の名物。
 【日親様】日蓮宗の名僧、日蓮に就き得度し、應永年間立正治國論を作り將軍義教を諫め、其怒りに觸れ鍋を焼きて頭に冠せられたが動ぜず、俗に鍋かぶりの日親と謂はれたは有名な話。
 【日親様の御門】高津中寺町正法寺(日蓮宗)、この寺内に日親堂がある、日親のことは「日親様」に註した通り、「鍋かぶりの上人」と稱せられ、元祿正徳享保にかけて大阪では大に流行したものである。
 【新田】新田義貞は此地から出た、武士の名所と云ふ所以。(千四犬の一)
 【日天子】日宮天子とも云ふ、四天王に屬し日輪を宮殿として常に七寶の車に乗り八馬を御し、左右に二妃を侍らせ七曜九曜の星宿に護衛させ、先頭には摩利支天を進ませると云ふ、さも嚴めしい行粧の、或は觀世音菩薩の化身とも云はれる。

【日天子、月天子】日月。
 【につとり】潤ひねばる。
 【日牌】佛寺にて毎日回向供養することを云ふ、月牌もある。
 【日本國裏】日本國中。
 【日本五常の寶】日本五常の道を象つた日の御座の寶劍を指して云ふ。(松風村雨の五)
 【二條の院】第七十八代の天皇、後白河天皇の次朝。
 【二條の關白】姓は藤原氏、二條京極に居る故名付けらる、五攝家の一。
 【煮ても焼いても】どうにもかうにもならぬ、始末におえぬ人間を罵つて云ふ語。
 【二天】二神。
 【二天】こゝのは源頼光四天王中の二天王、即ち綱と貞光。(山姥の一)
 【二天四天】多門天持國天增長天廣目天の四天神を語韻の上から二天四天と云つたもの、要するに天の諸神の總稱。
 【二の足】二の足を踏むの略、ためらう、躊躇する。

【新口村】大和國磯城郡、八木と田原本の間の小邑、三輪の西方。
 【二の瀬】山城國鞍馬と大原の間の山。
 【二のせ村】二瀬村、市原から鞍馬に行く街道の村。
 【二の宮の姉】二の宮家へ嫁ひだ十郎の姉。(世繼の三)
 【二杯目喰はず】景清の二番煎じで旨く歎き得たことを云ふ。(千匹犬の四)
 【庭錢】遊里で纏頭にやる錢、單に「庭」とも稱する。
 【にけだから】下人や下女などの家人を云ふ。
 【横潦】雨降つて地上に溜つた水の流れ。
 【二八三五の玉簾】簾の編み目と美人の年とにかけらる。(小栗の一)
 【鶏合】鶏を闘して勝負を決する遊び、多く三月の節物として行ふた。
 【鶏番ひ龍虎の精鬼と修羅】兩雄相對して負けず劣らず脱み合ひの緊張した態度を譬へる。(天智の二)
 【雞の卵を渡る】「薄水を履む」と同義、危険至極の譬。

【鶏鉾】堯の諫鼓鳥に擬して作つた鉾、六月七日に出る八箇の鉾の内。
 【雞飯】今で云ふ親子丼。
 【庭の龜は難波津の歌云々】庭の龜は、民の龜と詠みし難波宮の歌、「高臺に上りて見れば煙立つ民の龜は賑ひにけり」からもぢつたもの。(夕霧の上)
 【庭乗】庭騎は馬場で馬を馴乗することを云ふが、こゝでは簡単に庭上で騎るとの意。(東山殿の一)
 【二ばんばえ】二番目に生へる意、次男の事を云ふ、長子は家督を承け、次男共は各組下(弓組鐵砲組等)として仕へる。(宵庚申の上)
 【新お商黒】新妻のこと、夫を持つとお商黒(鐵葉)で尙を黒ふ染める故に云ふ。
 【新島守】新參の島の番人、即ち島の住民の意。
 【二十十日に風は吹かず】此下へ「と極つた譯ではない」を付けるに能く分る。(孕常盤の二)
 【入於大海假使黒風云々】海波鎮めの呪文、黒風は空を暗くする旋風、羅刹鬼國は惡鬼の棲む境。
 【入札】商用語、物品を買ふに豫め其買價を札に書ひ

て入れることを云ふ、こゝの意は、買約の札入は此赤掃が一番札と云ふにある。(聖徳太子の五)
 【入道の朋を切る】入道のどうを取ると、入が残る、それが入滅の答案となる。(女護鳥の一)
 【二佛の中間】釋迦去り彌勒は未だ出ない間の義であるが、こゝのは細川玄旨の仲間大佛と云ふが髪を剃た時の狂歌に「大佛かしらをそりて又佛これぞ二佛の中間の果」とあるのから出た語。(孕常盤の二)
 【二歩では高砂野の宮】二歩では高いを、高砂野の宮にかけ謡曲の名をとる、流石に索性に相當した洒落である。(壽門松の上)
 【入部】諸候が初めて其領地に就くこと。
 【入部】入國、入府などと同義、浦島が曾遊の郷たる龍宮入りを稱して云ふ。(浦島の四)
 【にべもない】鰐にて製した鰐は一層粘着力が強い、鰐もないとは其反對で、愛想なし、すげなしとの義。
 【鳩の入江】江州琵琶湖の別稱。
 【鳩の海】近江の琵琶湖の異名。
 【にほひ】すべて美しい性質のほうつと外にあらはれ

るにいふ、色にも香にもいふ、こゝでは氣色(ケハヒ)の意(つれづれの二)
 【香櫻】八重の白花、匂ひの高ひ櫻の一種。
 【匂ひ墨】こゝのは薰りある墨で書いた誓紙を云ふ。
 【日本紀云々】浦島の事は「日本紀」に初めて出て居る故云ふ。(松風村雨の五)
 【日本堤】吉原に行く路次の堤。
 【二面八角十文字】縦横無盡の形容。
 【荷持瘤の傳】荷物を擔ぐ爲に出來た瘤を荷持瘤と云ひ、傳は其荷持の呼び名。
 【若一王子】熊野權現の末社、一の王子は太子の謂である、社は藤白坂の下にあり、鈴木龜井兄弟の塔が其附近にある。(孕常盤の五)
 【若作障即有一佛魔境】障即を作す魔も、佛も、一境にあるとの意。
 【若人欲了知三世一切佛云々】華嚴經に見ゆる世に破地獄の文と稱するもの、佛を知らんと欲する者は遠きに求めずとも一切皆我が心にありと云ふ義。
 【にやこい】生れ付きのにやけたこと、女などに甘い

【如意寶珠】 佛舍利から出る、萬願萬望思ひの儘に、

叶はざるなしと云ふ靈珠。

【女院】 皇太后何々院(佛門の)の御座所。

【女院】 建禮門院を云ふ。(女護島の五)

【女房を仕上げたり】 女房振を仕上げて美しくなつ

たこのこと。

【女御更衣】 女御の事は別註にあるが、雲上の御寮に

待する女官で中宮の次位、更衣は同じく女御の下位

にあつて、天子の御衣を更ふる事を勤める役。

【女護の島】 昔の蝦夷の地圖を見ると、東北の海中に

女人島と云ふのがある。

【女三の宮】 朱雀院第三の皇女ゆゑ名付ける。

【如獅子王の金剛力】 獅子王の如き猛勇力

【如清涼池】 涼しい清々しい靈池の如し。

【女若】 女と若衆、即ち女色にも又男色にも。

【女婦】 掃除、點油を司る女官。

【如世尊勸當具奉行】 普賢は釋迦佛の右の脇士にて慈

非を掌る、即ち世尊の教命通り慈非を行ふことの義。

【如渡得船】 「渡りに船」の義、法華經藥王品の句。

【女人結界】 僧徒修道の障害を入らしめぬ爲め、境界

を制限して、女人の登山を嚴禁するを云ふ。高野と

叡山は古くから女人禁制の山。(いろはの四)

【女人堂】 この高野山不動坂を上つた所にある

のを云ふ、女人禁制故、これから奥には入れず、此

堂にて休憩投宿したものである、其昔は高野の七口

と云ひ、此口々に女人堂があつた。

【女人地獄使能斷佛種】 唯識論に、「女人は地獄の使な

り、永く佛の種子を斷つ、外面似菩薩、内心如夜叉」

とある。

【如法】 柔和なこと、佛語から轉ず。

【女犯】 邪淫戒を犯すこと。

【如來の三十二相云々】 釋尊は三十二相を備へたが、

提婆達多には三十相だけで二相足らぬ、故に千幅輪

(足の底の網形の紋)に金具をつけ、白毫(眉間の毫)

には螢の光を借つて、釋迦に負けまじとしたこと。

(用明天皇の一)

【如來は外れた】 阿彌陀くじに當らなかつたこと。(女

腹切の中

【によろ〜】 のろ〜、蛇などの匍匐する貝。

【にれを噛む】 にれを噛むとは、牛などの草を咀嚼し

ては呑み、又吐き出して食ふことに言ふが、此處で

は、齒を喰ひしぱり憤れる貝に用ひて居る。

【尼連禪河】 東天竺(印度)王舍城附近を流る、川、今

のリラヂヤン河のこと、釋尊六年苦行の愚を思ひ、

此河に浴して身垢を洗ふたと云ふ遺跡。

【仁王立】 仁王の像の如く突つ立つ形容、仁王は佛教

守護の、密迹金剛(左輔)那羅延金剛(右弼)の二

神を云ふ、寺門の左右に安置されて居る。

【仁王門】 天王寺南門内の正北の門、裏に名作の高麗

犬一對がある。

【仁王門の金剛垣】 仁王門の前面の腰部に設けられて

ある故、この三郎が腹切り破る様に譬へる。(將棊

經の四)

【人界の南に流れ行く水】 圓悟禪師錄に「天上に星あ

り皆北に拱す、人間水として東に朝せざるはなし」

即ち前句の意によると人間界の水は南に流るゝこと

【人魚】 顔は女性、體は魚鱗の、水上を出没すると云

ふ想像上の動物。

【人間の五福】 人生の五福とは、壽、富、康寧、徳を

好むこと、老て天命を終ふること。

【人間の私語天の聞くこと】 雷云々 天に耳あり、暗

きに眼あり、人知らぬと思ふ事も、天は能く知れり

と云ふ意。

【人間は朝腹】 朝飯前のすき腹、ホンの一口、人間な

どは食ひ足らぬとの義。

【人間萬事塞翁が馬】 人世の禍福の定まりなきこと、

支那に塞翁と云ふが、一匹の馬を失ひ二匹の馬を得

たと云ふ、禍福測り難き淮南子人間訓にある故事。

【仁治二年】 四條天皇の朝、北條四代經時が執權時

代。

【人參で行水さす】 あらゆる名藥を投ずると云ふ喻。

【人神なし】 人日神日なし、彗點に關する語。

【人數をまき】 人數を整へ。

【人性】 人情、人の性質。

【人脈筋】 脈筋のこと、これを断てば人命絶える故云ふ。

ぬ

【ぬえこ鳥】 鴝子、梟の一種。
 【抜かしてくれ】 逃れさせてくれ。
 【ぬか〜】 ぬく〜、厚皮面な良。
 【抜かぬ太刀の高名】 手を出さずして手柄をする喻。
 【膝働き】 無駄骨折り。
 【膝袋】 湯に入りて使ふ、膝を入れた布の小袋。
 【膝味噌汁の御恩】 下僕等は常に膝味噌汁を頂戴して活きて居る、其御主の御恩と云ふこと。
 【拔足】 足音のせぬ程の静肅な歩み方「差足」註参照。
 【貫簀】 丸く削つた竹で編んだ簾、手洗ひの際水の飛び散らぬやう盥などにかけるもの。
 【拔手】 兩の手を互ひ違ひに水上に出して泳ぐ。
 【ぬき拍子】 都踊のぬき文句の踊拍子。
 【ぬく】 ぬく〜、「ぬけ作」など、ぼつと出、田舎者を卑しめて云ふ語、廓詞。

【ぬく〜】 ぬけ〜と、鐵面皮に、知つて知らぬふりする。
 【拭ひ漆の刀かけ】 サツバリと清らかな心の比喩。(大經師の上)
 【温め鳥】 鷹が寒さを凌ぐ爲め、つかみ捕へた小鳥で、足や爪根を温めて夜を明かし、翌朝放ちやると云ふ、此處のは我が子を温め鳥のやうに抱きかゝへる恩愛の情に喩へる。(百合若大臣の三)
 【ぬく若】 若輩、青二才と同義。
 【抜参宮】 長上や主君の許しを得ずに忍んで参宮すること、一昨々年とあるは寶永三年で非常に抜参りの流行した年。(丹波與作の下)
 【抜け参宮の頭字】 抜けの頭字は「ぬ」で、即ち盗人の「ぬ」の字の頭字と同じと云ふこと。
 【幣と散り】 雪が御幣のやうに散りしく。
 【幣とりあへず手向山云々】 古今「此度は幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〜」から出る。
 【ぬしづかん】 己が所有にすること、主領の義。
 【主は細工の人寶云々】 「細工貧乏人寶」とて、細工上

手の人は世間から重んぜられる割に、自らは貧乏なのが多いと云ふ諺。(女腹切の上)

【塗師屋】塗物屋、蒔繪屋などを云ふ。

【泥塗くる】なすり合ふ、我が非を人に負はそうとす。

【盗人と手を出す】盗人と咎めた時、手出しする者は

いよゝゝ盗人たることを證明するものだ云ふ諺。

【盗人におひ】盗人に負銭の諺による、損の上に損の上塗り意。

【盗人に蔵の番磁石に針】猫に鯉節と同じ格な比喻。

【盗人の晝寝も當がある】盗人は夜稼の商賣ゆゑ晝を

寝ると云ふ俚諺、お花を賣つて儲けんが爲に、好き

でもないお花の母を妻にした事を喩へて言ふ。(女腹切の中)

【盗みする子は憎からで】「盗みする子は憎からで繩

取が恨めしい」と親心の一面を云ふた諺。

【盗みほざいたな】普通ほざくは口に任せて喋言る事

なれど、こゝのは「盗みさらしたな」と口穢く罵る

意。(天網鳥の上)

【ぬた】料理の名、魚肉をいろゝの蔬菜と酢味噌にしたもの、紅葉葉緑り葉などを浪のあえ物にしたとの意。(加増の三)

【ぬための鎗】奴多米鎗、鹿の角で作り、三方にぬた(鈔)を残した鎗矢。

【ぬつけりとした顔】ぬつべりの訛、何氣ない顔、何喰はぬ顔。

【布子をやすくと産む】布子を貰ふたことを、布子

の子の縁語から子を産むにもちる。(孕常盤の三)

【布頭巾】布で作つた頭巾。

【布の帽額】帽額とは御簾の上に横に張る幕のやうな

帛、つれづれ草に「蘆の御簾をかけて、布のもかう

あらゝしく。(つれづれの四)

【布引】今の神戸市の東北、生田の森の北山にある布

引の淵。

【ぬはいゝだ】南無阿彌陀の約。(千匹犬の四)

【縫れ伏す】身を其物にヒタリと着けて伏すこと。

【縫ふてふ笠】「笠縫ひのさんだわら被り」から採る、

笠を作る者は却て笠を被らずとさんだわらを被るとの

意、こゝでは有明が麥藁笠被た姿の即興。(五人男の

一)

【ぬまいだ】南無阿彌陀を捨て鉢に言つたもの。(女楠

沼田) 上野國利根郡の名邑。

【ぬめくる】ぬらりくらりの貞。

【ぬめり込む】滑り入る。

【ぬめり出る】滑らかにすべり出る。

【ぬめり風】ぬらゝと小さいやらしい風俗。

【ぬもじ】ぬす人の下に文字を添へる、盗人様と同じ。

(吉岡染の中)

【ぬらりころり云々】ぬらりは鰻、ころりは山椒味噌。

(女楠の四)

【塗桶に丸綿云々】綿屋の看板に塗桶を出す、苧桶に

擬したものか。(女夫池の三)

【塗木の弓】漆塗の弓。

【塗籠の平根云々】塗籠藤の平根の矢二十四本を籠に

盛り入れる。(五人兄弟の一)

【ぬりにける】色をつける、戯れかゝる。

【塗籠の矢】漆で塗つた矢竹の矢。

【塗木履】漆塗の下駄、女用のもの。

【ぬるい】手温い。

【濡れかけ】色仕掛け。

【濡れ鳥の聲云々】浦島が鳥の聲をたよりに日本に歸

ることは、神武天皇八咫鳥の故事に擬する。(浦島の

四)

【濡れた風】戀中の風俗。

【濡坊主】好色坊主のこと、當時濡の字は廣く用ひら

れた。

【濡咄】色話し。

【濡一通の狀文】色ぶみ一式。

【濡れ者】色よき女、ぬれ事にたけた女。

ね

【倭人の詞は甘き云々】倭者は巧みに言を飾るの義。
【善成乳虎の牙】極悪兇暴の言の義、善成は漢の名高い酷吏、乳虎とは、子を乳養する虎は頗る獠猛であるところから、暴威の形容語になつて居る、漢書酷吏傳に「善成爲三關都尉一號曰、寧見三乳虎一無値三善成之怒、其暴如此」。
【寝入ばな】寝入端にて、よく寝に就た處を云ふ。
【鏡鉢】佛家の樂器、形は丸皿の如く、響銅(さはり)にて作る、二枚打ち合せて鳴らす。
【根を堀て葉を枯らさん】「根から葉から」とも云ひ、一切悉皆を根絶させやうと云ふ喩。
【根を堀る竹】俗説に、産まず女が死ぬと、手の爪を剃いで竹の根を堀らせると云ふことがある。(卯月の下)。
【願ひの糸】七夕神に、女子どもが機織縫物の上達其

他の願ひ事の爲に供へる糸、こゝのは請願の意と掛緒の縁語。(關八州繫馬の四)
【彌宜殿】はたをり虫の異名。
【彌宜の息子か青葉賣】小陸の扮装が女のやうな男のやうなを、當代の風俗に譬へて云ふ。(國性爺の四)
【根腐て】根本から腐つて。
【根ごき】根こそぎ、根請共抜く。
【根心】心の底、本心。
【根堀】根のあるまゝ。
【猫に鯉魚】猫に肴の番、盗人に金の番と同義。
【猫に干鮭預けた】「猫に鯉節」と同じ意。
【猫の前の鼠の晝寝】最も危険な喩。
【猫股】化け猫、年老ひて尾は二股に分れた恐ろしい猫。
【根來折敷】紀州根來から出る漆塗の折敷、朱塗に黄色を帯びたもの、こゝは金時の顔色に譬へる。(關八州繫馬の二)
【根來法師】紀伊國根來寺の山僧。
【根ざし】生ひ立ち。

【根差たる所存】深ひ存意。
【寝覺草】こゝのは煙草のこと。(伊豆日記の四)
【寝覺、更級、杉野】侍女の名。(關八州繫馬の二)
【音締】枝を糸巻に巻きしめて音色を適當に出すこと。
【鼠入らず】戸棚のこと。
【鼠木戸】芝居の木戸の客の出入口を云ふ、鼠が巢に入るやうな形をして入る故に名付けるとも云ふ。
【鼠算用】鼠が子を産み、其子が又子を産み、非常に早く繁殖することを鼠算用と稱するが、此處の意は親鼠の淨閑の良い分別を指して云ふたもの。(壽門松の中)
【鼠承露盤】鼠算などから名付けた例の當意即妙の名稱か。(反魂香の下)
【鼠突】鼠を突き刺すこと。
【鼠の尾花】溝萩のこと、又の名みづかけ草。
【鼠の尾まで錐の鞘】廢物利用の妙法。(博多の中)
【鼠の牙の災】鼠に噛まれたほどな小災。
【ねた】妬みの轉。

【寝た内に夜船の着く】凡てがウツトリと夢心地で過ぎたとの喩。
【ねたにこみ】妬みを抱き。
【強請り取】小盗どもをねだつて其上前をはねる。
【ねだれ嘆く】理非も問はず甘へて強請すること。
【強請者】無法を言ひかけ問題にして、金錢を強請する輩のことを云ふ、廓には此種の者が夥しいから言ふたので。(夕霧の上)
【捻岩】捻ぢれたやうな形の岩、大師の母が登山できぬをいらつて捻ぢた岩と云ひつたへる、高野山天野口にある。
【ねちみやくした】大阪の方言「もつちやくした」とも云ひ、持て扱ふに困つたと云ふ心。
【ねちわけて】捻ぢ曲げて。
【根付】煙草入、錢入などの紐に付けて、腰に下げる時、帯に挿むもの。
【ねつたい】妬しの音便。
【ねつたい坊主】攝持坊主の訛、ふるまい坊主なども云ひ同じく嘲弄の詞。

【根どひくどひ】 蛭川親元東明寺百首に「むつかしく根どひくどひや無用なる、事をば尋ね聞かであるべし」根問ひ葉問ひくどくしいこと。

【音取】 樂器の音調を合はすこと。

【寝鳥】 夜間樹上又は巢に眠つて居る鳥。

【寝鳥を射るは道に非ず】 死んだも同前の者は射殺すべきではない、懐に入った鳥は獵人も助けると同義。

【寝鳥を指す】 寝てゐる鳥を刺す、最も容易な意。

【寝鳥の翼を休むる如く】 しがみ付ひて潜み居る形容。

【根なしがづら云々】 蔓草にて松の木などに絡み付き、其液を吸ふて寄生する、無縁の松にも蔓草が絡み慕ふに、情けのない女かなとの意。(賢女手習の二)

【子の目を根から根曳の松】 太夫を松の位と云ふ、根曳は即ち身受けの事、小松曳は春の初子の日の行事ゆゑ其縁による。(夕霧の中)

【ねばいは三河者】 烏丸光廣卿の「にかはの國と云ふべかりけり」の狂歌から採る。(丹波與作の中)

【寝ばな】 寝入りばなの略。

【子祭り】 大黒天の縁日子の日にかけ、寝るにもぢる。(松風村雨の一)

【ねまり】 居られる。

【ねまり申す】 這ひつくばふて頼むと云ふ北國邊の方言。

【寝亂れ髪】 髪は女の入髪、寝亂れ髪を、こがれ舟の

かもじ(船の舳に房のやうに飾つて垂れるもの)にか

けて云ふ。(用明天皇の一)

【寝むづかり】 泣いてせがむ。

【寝物語】 寝物語の里、美濃國柏原の東方。

【練色】 淡黄色。

【練貫水】 三井寺の麓大練寺にある池の清水の稱、天

智天皇の御衣を練つた水との傳説があり、清くなめ

らかな名水の意として俗諺に使はれてゐる。

【煉物屋】 種々の薬品を煉り合はせて、寶玉などに擬

し作る業人。

【練物屋】 絹を練ること、染物、洗ひ張り屋の類。

【闇作り】 菓を作ること。

【涅槃の落穂】 田に落ちた穂を拾ふも悟りのたよりの意。

【涅槃の調】 樂の調の莊嚴さ、涅槃に入るの思ひを云ふ。

【涅槃の雪の名残】 涅槃會は陰曆二月十五日、雪の果

は涅槃の諺がある、雪も涅槃の頃になれば降らな

くなるとの意で、即ち門の雪にも名残惜しいと云ふ

義、近松が俳諧調用文の一例。(歌念佛の中)

【根曳の櫻】 身請けされて廓を去る傾城のこと。(世繼

の五)

【念彼觀音力、歷劫不思議】 別に註したが普門品の文

である、こゝには、我等が願ひの適ふたは古今不思議

の奇縁なりと云ふ心で洒落て言はしてゐる。(兼好法

師の上)

【ねび者】 年よりは大人びたこと。

【根太】 臀部など脂肪多い部分に出来る腫物の一種。

【ねふりの木】 合歡の木、朝花開き夜に萎み、朝又咲

く。

【寝間帳裏は見探され】 人に見せられぬ内部迄見られ

ぬ。

【念をつがうた】 入念に誓約したこと。

【年行】 年々の苦行。

【年貢は餘る程量つた】 返禮報酬は充分に済した。

【念頃】 こゝのは私通のこと。(波の鼓の中)

【念者】 男色の對手方の稱。(若衆に對)

【年頭八朔藏納】 百性が地主に對する年中諸禮。

【念なう】 殊の外、思ひの外。

【念なう】 容易に、わけなしに、狂言詞。

【ねんくおろく】 子を寝さす時にすかしながら唄ふ

子守歌。

【年々歳々花相似たり】 唐の宋之間の有所思と題する

詩の句とも、又、劉希夷の代下悲三白頭一翁上の句と

も云ふ。

【念晴し】 思ひを晴らす。

【念佛講云々】 こゝのは、輪番で女郎を買ふの義。(虎

が磨の上)

【念佛講に當れば蒸豆云々】 念佛宗の講中に當ると豆

を蒸るのが例。

【年前】 遊女奉公人などの年明け前。

【念も無い事】 思ひもよらぬこと。
 【念力岩をとほす】 一心の力は岩石をも貫く、即ち精神一到何事か成らざらんとの義、楚熊渠子が石を虎と見て射たる、李廣が草中の石を虎と見て射たるなど、例多し。

の

【野合の軍】 野外に出て會戦すること。
 【能内法師云々】 「武隈の松は此たび跡もなし、千年を經てや我は來ぬらん」の歌意を採る。
 【能仁大師】 釋迦の譯、梵語。
 【能武】 武勇に長ずること、能文の對語。
 【野江か飛田もの】 野江は大阪を東に離れた京街道の地、飛田は大阪の南阿部野墓地の北、共に刑場のあつた處、即ち野江か飛田のお仕置き代物と罵つた詞。
 【のえふす】 風の靡くやうに歸伏する。
 【野がけ】 野遊び、遊山の義。
 【野方】 野働き方面の役。
 【退かぬ身の上】 退き去りの出來ぬ深い關係の身。
 【野髪】 叢生せる馬の髪の毛。
 【牧髪牧爪】 野に放ち飼の荒馬の叢立てる髪毛や、生びたまゝの爪。

【野雁の矢】 野に降る雁の羽で射いだ矢。
 【通るゝも業云々】 命助かるも宿業なれば、悦びに似て悦びでもないとの義。(歌念佛の下)
 【通れぬ方】 のつびきならぬ方。
 【通れぬ弟子】 ぬささしのならぬ間柄の弟子、即ち印可を與へねばならぬ弟子の意。(鎗權三の上)
 【のがれぬ者】 のがれぬ中、親族などの意。
 【野狐の窟を窺ふ】 野狐が窟の餌物を、そつと窺ふやうに、忍んで行くこと。
 【退き端】 遁れ出る有様。(吉岡染の中)
 【軒端の松】 往時小倉山二尊院定家の山莊時雨亭の邊にあつた松、定家の歌に「忍ばれて物とはなしに小倉山軒場の松ぞ馴れて久しき」。
 【のけばの梅】 取拂ひの意、「梅」は能の曲名、のけばは退け場と軒場にかける。(傾城酒呑の四)
 【銀商】 揚屋と女郎屋兼帯で儲けること、丁度銀の双の出し入り共に物を切るに似た故云ふ。(傾城酒呑の三)
 【残し置くのと連れ行くと】 男の魂は二階に残り、女

の魂は長柄堤へと連添ふて行くこと。(二枚繪の下)
 【のこ〜】 お茶の子の縁語、遠慮せずと、憚らずと
 お花に振舞やとの意。(女腹切の上)
 【拭漆】 薄く塗った漆。
 【残る方なく】 手落ちなく、よく行き届ひて。
 【野崎参の屋形船】 北河内四條村の野崎觀音(福壽山
 慈眼寺)毎春無縁經執行し、陰曆三月十五日から三十
 一日迄は参詣客に滿つ(今は五月に修行)、古き習慣
 にて、船にて行く者、堤を徒歩する者と、水陸罵り
 合ふ奇風がある、此處には本文に説明の如く、四月中
 旬(享保六年)開帳のあつた時のこと。(女殺の上)
 【のさばる】 はびこる、我儘にのび擴がる。
 【のさ者】 のほろず者、のら者など云ふ義。
 【鬘斗】 鬘斗鮑の略、鮑の肉を薄く長くはぎ、引き伸
 して乾したもの。
 【伸上る】 増長する。
 【鬘斗附】 刀劍の語、金銀を薄く打延べて鞘につける
 こと。
 【のし〜と】 のさ〜と、重くるしい貞。

【のじばる】 のさばる、強情ばる。
 【鬘斗目】 練糸と生糸を經緯にして織つた絹布で腰の
 邊にのみ縞を織出したもの、賀服用。
 【野宿】 こゝは野遊の義。(伊豆日記の一)
 【野出頭】 常に鷹野に扈從して出張すること。
 【載せ事】 偽り装ふて人を載せること、偽り事の義。
 【覗きを暮の門立】 客が格子をのぞく、女郎が格子に
 出る、廊の夕暮の光景。(虎が磨の上)
 【のた打つ】 ぬた打つと同じと云ふ、猪が刈藻の上に
 臥すこと、もがく、ころげまはるの義。
 【筥搦模】 矢竹のそりを挽め直すに用ひる具、其具の
 形のやうに突き流されること。
 【野倒を打つ】 のた打つ、這ひまはる。
 【のたれ死】 路傍なぞに行倒れて死ぬこと。
 【後藥】 將來の爲、後の幸福のためとの義。
 【後に青菜の浸し物】 後に逢はうと青菜とをかける、
 無駄口の達者な、無作法な廊の女中が目に見るやう
 である。(天網島の上)
 【後の葵の下簾】 加茂の葵祭は四月中の酉の日、吉例

にて葵を以て種々の飾りとし、家々の軒、簾などに
 も葵の二葉を付けた、それが祭が過ぎての後にも尙
 ほ付けてあることを云つたので、「徒然草」に「祭す
 ぎぬれば、後の葵不用なりとて或人の御簾なるを皆
 とらせられ侍りしが云々」とある。(兼好法師の上)
 【のつとり】 のつそりのこと。
 【のつびきならず】 退き引きならず、避くべからざる
 義。
 【野づら竹】 野生の竹。
 【野面御影】 山から切り出した儘の御影石。
 【咽を干す】 咽をならす程の美味があるに咽を干して
 食はぬこと。(井筒業平の一)
 【喉が火の用心】 糊口に火が付いて生計が出来ぬとの
 しゃれ。
 【能登鯖】 能登守教經を指す、鯖は能登國の名産、俗
 に佐志鯖と云ふ。(女護鳥の一)
 【能登守教經】 平家中無双驍勇の名ある人、壽永四年
 二月屋島の役に義經を討ち洩し、力士二人を兩脇に
 抱へた儘海に投じて死んだ年二十六。

【喉元過て熱さ忘る】 苦痛の時に助けられた恩も、
 苦が止むと同時に忘れて仕舞ふと云ふ諺、病癒ゆれ
 ば醫者を忘れると同義。
 【咽より劍を吐く】 自ら自分の悪行を告白する苦痛の
 形容。(冥途飛脚の上)
 【野取】 野取馬のこと、牧場から初めて捉へて來た馬。
 【篋中責めて云々】 保元物語の「實莊嚴院の門の方立
 に、篋中責めてぞ立つたりける」から出る、矢の迫
 り寄ること。(鎌田の上)
 【野にも山にも親しき人は云々】 世間到處とるころに知
 り人は持つべきものとの意、「曾我物語」にある「兄
 弟をば野の末山の奥にも持つべかりけるぞや」から
 採る。(五人兄弟の二)
 【のゝ様】 神様のこと。
 【野々宮】 嵯峨小倉山の東南。
 【のゝめく】 のゝしるに同じ、聲高に呼ぶこと。
 【延ばへて】 延ばせて。
 【のび】 倦んだ時に手足を伸して吐息すること。
 【伸びた顔】 顔の造作をゆるめてグニヤリとなる貞、

鼻毛を伸ばすと同じ。

【のびらか】 悠々とした、のび／＼とした。

【信國】 山城の刀鍛冶、了戒の孫、國久の子、後光嚴院延文頃の人。

【のふづ者】 野太い、圓ぶとい者、上方詞。

【のべ】 延紙のこと、遊女の持つ紙、堅七寸横九寸の小形杉原紙。

【延の文】 延紙に認めた文。

【登らぬか】 登らせたのではないか。(萬年草の上)

【上りやすなく】 云々 上り阪はゆる／＼、下り阪は小走り。(曾根崎心中)

【登ればさつさ下ればさつさ】 「若縁」の「心すゞし」の歌から取る。(卯月の上)

【飲ませぬ樽の口ふさぎ】 密事の口留めに物を與へる

【野間の内海】 尾張國知多郡衣浦の附近、長田忠致の家のある地。(烏帽子の一)

【矢竹の廻り】 矢竹の廻り。

【呑さいて】 飲み終らず。

【蚤取眼】 猿が蚤を捕る時のやうに、きよろ／＼と眼を配る様の譬。

【野見の大匠】 野見宿禰、垂仁天皇の朝、當麻蹶速と力を角し投げ殺した大力の勇者。

【飲めや諸へや一寸前は闇】 昔の盆踊歌に「のみやれうたやれ先の世は闇、今はななばの花盛り」とある。

【のめらせ】 太兵衛を地上に引つ倒し、叩き延すの意。

【野守の鏡】 野中の溜り水に影の映るを鏡に喩へて云ふ、新古今「はしたかの野守の鏡えてしがな、思ひ思はずよそながら見む」是れ題名の由つて来る所で、此處のは海面を野守の鏡と見立て、目には見へても手には取られぬ、即ち夫婦親子の幻のやうな別離を意味したるもの。(百合若大臣の三)

【野遊山】 野遊びのこと、遊山は山に遊ぶに限らず、戸外に出て遊ぶことを云ひ習はした廣義の詞、船遊山なども云ふ。

【のら】 のらくら者の略、懶惰者、道樂者。

【野良を盡し】 極道を仕盡す。

【野良乾く】 野良はづばら、乾くは爲す、する。

【のらぞんざい】 のらは「のろし」鈍なこと、「ぞんざい」は粗略者。

【のらつぽ】 野良坊なり、怠け者に同じ。

【野良猫】 野良犬も、何れも飼主のない犬猫。(浦島の三)

【のら一巻】 のらくら事なら何が何でも、道樂のあり

だけと云ふ義。

【野良松】 のらくら者の異名。

【笹入】 幾本かの矢の入るかを示す語、千笹入とは千本入、五百笹入とは五百本入のこと。

【乗掛け】 一驛の駄馬の荷物を二十貫として、一人それに乗し添ふことを「乗掛」と云へど、こゝのは乗り初めると云ふ意。(三世相の一)

【乗懸の客】 道中の驛馬で旅装のまま乗り入れる客。

【糊かへ物】 糊付けした衣類。

【憲清法師】 西行法師、佐藤兵衛尉藤原憲清。

【乗し三枚】 三枚は三枚肩、駕籠に三人の昇夫が付く

もの、三枚肩の駕籠に乗つたこと。の意。

【乗乗共】 乗組員、船員、乗客などを一齊に云ふ。

【糊立】 折目正しくスツキリしたこと。

【教經の弓勢】 「……の爲に妨げられ」を首筆する。(女護島の四)

【乗手は氏神】 乗手は助け舟との意、天祐儀倅の義。(丹波與作の中)

【のりなしぶね】 乗り無し船、乗り合の對手のない船、即ち後家の事を云ふ。(聖徳太子の三)

【糊にする】 ぐだ／＼に軟かにすること。

【法の灯】 法燈、同じ浮名の三味線に載る、にかけろ。(今宮心中の下)

【のりの花】 乗る、血、法の花にかけろ。(萬年草の下)

【法の花、紅の蓮】 法の花の法は、佛法の法と、乗りと、血との縁語、血から紅の蓮とかけろ、即ち毛氈を紅蓮の臺と観する意にて、毛氈を情死の際に用ひた事は實説にある。(背庚申の下)

【法の水法の薪】 釋迦が悉多太子の頃、檀特山にて難行苦行したその薪水の勞苦を指す。

【乗物下馬】 下馬下乗口。

【乗物古い】駕籠に乗るなどは古くさいことである。
 【のんこに髪結ふ】伊達氣取の髪の結び方。
 【喉の潤干蕪】喉干からび、干蕪のやうに釣り上げられる。

は

【はあ、うすくすあぜ】以下唐人詞「國性爺」な
 どと同様、作者の出鱈目なり。(大織冠の二)
 【はあはく】心配して氣をもみ、はあく思ひ煩ふ
 こと。
 【枚を含んで進む】軍勢の聲を立てぬやうに、口に含
 む具、形箸に似て、兩端に小き繩を付け、横に口に
 ふくんで頭後に繫ぐと云ふ。
 【梅花紙漉し花の油】梅花はねり香の一種、荳の油は
 系ごまから製した油、(印肉桐油用)お吉の色香匂ふ
 姿を稱へて云ふ。(女殺の上)
 【梅花の移り】梅花髪油の移り香、女の匂ひ。
 【配帯仕かねる】薬の加減を仕かねる、所置に苦しむ
 こと。
 【はいしいどうく】馬士が馬を逐ふ詞。
 【陪臣】天子から見て、また家來のこと。(國性爺の三)

【配膳】膳部を客席に配すること。
 【這出】田舎あたりから初めて出て來たこと。
 【拜殿の假寝の夢】第一段に描かれた夢のこと。(百合
 若大臣の三)
 【敗毒散】解毒劑。
 【排毒散】風邪用の煎藥。
 【灰になつても歸るな】骨灰になり、死んでも再び戻
 るなと云ふこと。
 【賣人土民】商人百姓。
 【灰猫の顔】猫が冬の寒さに竈などの下に潜り込んで
 灰だらけになつた、其顔を鍛冶屋の主人の灰まぶれ
 になつて働いて居るに譬へる。(米朝日の上)
 【はいのえ猫の年】ひのえをはいのえともちり、はい
 のえは灰猫のもちり。(女夫池の一)
 【繩拂】繩を拂ふに用ひる拂子。
 【配符】お觸れ書を配布すること。
 【梅風】梅雨時の風。
 【敗亡】進退谷まりて騒ぐこと。
 【灰寄せ】火葬の後其骨を拾ひ寄せること。

【報恩講】一向宗にて毎年陰曆十一月廿二日から廿八日まで執行する法會。
 【伯耆の大盡丹波に馴合ひ年々女夫】幕客とたんご女は何れも浮氣性を意味する廓詞、それで年々夫婦變りする事を云ふた。
 【寶篋印陀羅尼神呪】一切の功德を含んだ陀羅尼と云ふ義、寶篋印とはそれを比喩的に表した稱。
 【寶篋印陀羅尼】寶篋印陀羅尼、この陀羅尼を亡者の墓前で唱へると、其功力で墮地獄者も火界を免れると云ふ。
 【暴逆を戒め云々】左傳宣十二年に、「禁暴戢兵、保大、定功、安民、和衆豐財」とある、以上を治國の七徳とする。(日本武の一)
 【烽火萬里の詐の後云々】太平記十卷の文に見へる、周の幽王愛姫褒姒の笑を得ん爲め、屢々詐りの烽火を擧げ、遂に申候の爲に斃された故事、戎翟は戎狄、即ち敵軍の旌旗天をかすめて攻め寄せるの義、以上の詞は驕る者久しからずと云つた意で相模入道の末路を諷して居る。(千匹犬の四)

【判官龜氣】弱者びいきの意、判官義經は淨曲歌舞伎其他に同情を以て紹介されて居る故、世間は凡て判官びいきである、若し姑が嫁を逐ひ出したとなると、理否も問はずに、世間は姑根性と罵り、弱き嫁の方へ肩を持つべしとのこと。(宵庚申の下)
 【房玄齡】字は喬孫、支那臨淄の産、隋國の監察御史となる、家庭の頗る圓滿であつた人。
 【暴虎憑河云々】暴虎は虎を手で打ち、憑河は河を徒渉すること、何れも頗る危険な事の喩、論語に「子曰く暴虎憑河、死して悔なき者には吾は與みせざるなり」。
 【昂目】二十八宿の一、七星の聚つたもの、すばる(昂)と稱する。
 【帽子の額】被り物被た額のあたり。
 【方丈】一丈四方の室のこと、維摩居士一丈四方の居室に住み、家にあつて能く菩薩の道を行じたとの故事がある、別に註あり。
 【放生會】陰曆八月十五日、八幡神社祭日に、捕へた魚鳥を放ちやる會式。

【放生供】魚鳥などの命を助け放ちやる法會。
 【放生供養】捕へ置く生物類を放ち、助けてやる供養。
 【傍若無人】傍に人なき如き無禮な振舞の義、支那の王猛が蝨をひねりつゝ語つたと云ふ故事。
 【寶珠】こゝのは橋の擬寶珠を云ふ。(一心五戒の二)
 【寶所】法華七喻の一、化城喻品にある語、衆生が長旅の疲れを休ましめる爲めの安息所。
 【亡心】亡靈、妄念。
 【坊主墮ち】僧身が墮落して還俗したこと。
 【坊主持】携帶品を公平に持ち合ふ方法として、途中坊主に逢ふ毎に、持ち人を交代する一種の遊戲である。
 【方寸の盤】一寸四方の盤。
 【寶前】神佛の御前の稱。
 【房前公】藤原房前、北家藤原氏の祖。
 【彭祖】列仙傳にある、殷の末世に七百才の長壽を保つて尙ほ衰へずとある。
 【方崇り】方位のたゞり、頬を打たれた故、頬に方をもちつた洒落。(大經師の中)

【寶鐸】塔の四隅などにかける大きな風鈴に似たもの。
 【坊主】幼兒を指す。(重井筒の上)
 【方圓がある】限りがある、程度がある。
 【庖丁鍛冶】鍛冶師の拙劣なを罵る語。
 【場打てず】場所負けせず。
 【方等經】大乘方等經典のことを指す。
 【方童仙人】法道上人、天竺より來た人、俗に空鉢上人と呼ばれ奇行があつた。
 【房の津】鹿兒島の西北にあたる海濱の地。
 【惘々】知覺を失ひボンヤリする良。
 【ぼうく】茫茫、際涯なく雪の降る良。(雪女の上)
 【方々して】こゝのは方々彼地此地へ奉公し廻つての義。(碁盤太平記)
 【謀判】偽印のこと。
 【防風】刺身のけんなどに用ひる、やませりのこと。
 【望夫山】武昌の北方の山名、夫の從軍に、妻は子を連れて此の山上に餓送したが、遂に夫の歸らぬを泣き悲しみ、子を負ふて立ちながら山上にて泣き死に

死んで終ふた、其姿が其儘化して石と成つたから、其石を望夫石、其山を望夫山と呼んだとの故事による。

【彷彿】 それかあらぬか幽かな良。

【褒貶】 善悪の批評。

【放免のつけ物】 つれづれ、草に「建治弘安の頃は、祭の日の放免のつけものに、ことやうなる紺の布四五端にて、馬をつくりて尾髪には、とうしみをして蛛のい書きたる水干につけて云々」とある、放免は檢非違使の雑役の名、元放免せられたる罪人を以て任じたるよりの名稱、つけ物は着用せる錦織。(つれづれの四)

【放免】 檢非違使の役所に使はれ、警固の役を勤める下人どもを云ふ、元、罪人にして放免された者共を以て此役に宛てたから、この稱となつた。

【坊門通り】 京都の町の坊路の稱。

【はらうく頭巾】 炮烙頭巾のこと、丸頭巾にて、其形が炮烙に似た故名付く。(炮烙は素焼の丸平たい土鍋にて胡麻、豆等其他の物を炒るに用ひる具)

【炮礮火矢】 銅の空丸に火薬を填め導火をさせて、火を點じて敵陣に投ずる、今の破裂弾に似たもの。

【生拔の町人】 生れ付きの町人。

【はえぬきの念者】 「一代若衆にならずに」の縁語で、若衆(男色の弟分)に對する念者(同じく兄分)と云つたので、一代若衆にならずに天稟の念者であると虚勢を張つた詞。(丹波與作の上)

【羽織丈に】 羽織の丈の長さに。

【羽織の腰巻】 腰巻羽織のこと、羽織の裾を腰に挿んで巻きつける。

【はがい、】 尙痒いなり、靴を隔て痒きを搔くと云つた心持。

【博士】 此處には、學問、手本と云つた意味。(兼好法師の中)

【博多小梅】 白太夫の娘小梅を指す。(天神記の三)

【鋼を以て茨植えたる黄楊の棒】 棒の長さ八尺、筋鐵入りに鋼のとげを植へ付けたもの。(鎌田の上)

【墓引く】 高野山奥の院には大名等墓が多い、後世のため安眠の地を靈場に求める習風。

【羽交に付く】 俗に喉の下に付くと云う、食つ付いて行くこと。

【袴いらすの長羽織】 袴なしの長羽織は大經師の當時の風俗で、侍でもなく町人でもない特種階級の僧侶など云つた部類のもの。(大經師の上)

【袴腰】 袴の腰板にあたる部分。

【袴の上】 上下の上を云ふ。

【袴の着際】 袴の着けぶり。

【はかまの町屋】 袴のまちと碓氷郡町屋村とにかけらる。(加増の四)

【果行き】 はかどること、俗に墓所をはかゆきがするとして吉事につく。次註參看。

【はか行き】 萬事進捗するをはかゆきがすると云ふを、墓行と同音なれば、墓へ行けば善事がある、凶却て吉となると云ふ反語として用ひられる。

【秤が似合ふた】 秤の目をそゝる町人の分際が釣合ふた。

【謀を帷幄の内に巡らし云々】 座ながらにして軍略を巡らすこと、帷幄は幕、此句は史記高祖本紀にあ

【破顔鬼】 鬼の大將にこの愛嬌のある命名は滑稽なる。

萬、破顔一笑に値する。(山姥の五)

【羽利き】 はりを利かす、第一流。

【はぎさん、しまさん】 萩様島様、遊女の名、剃ぐにかける。(女腹切の中)

【萩の戸】 古の禁裡清涼殿の東西、小萩垣のありし邊の戸、或は又天皇の常の御座所とも云ふ。

【萩焼】 長州阿武郡松本村から製出する陶器、始め毛利侯が朝鮮の陶工を萩に召し焼かせたものと云ふ。

【白】 白人のこと。

【白雨】 驟雨。

【伯牙が琴も鐘子期にあらざれば云々】 伯牙の鼓する琴を善く解した者は鐘子期で、伯牙の念ふ所は鐘子期必ず得と云はれた、故に鐘子期死して伯牙は琴を破り絃を断つて生涯顧みなかつたと云ふ、即ち知音の一例としての譬。

【博雅の三位】 醍醐天皇の皇孫、二品兵部卿克明親王の長子にて、音楽に長じ、逢阪山に蟬丸を訪ふて琵琶

琵琶の秘曲を傳へたと云ふ。
 【鰯】 はじし、齒の根を被ふ肉。
 【白鰯】 孔子の子、鯉のこと。
 【白居易は又我子を云々】 白樂天が愛女金釵子を哭した其文意を採つたもの。(歌念佛の下)
 【はぐくむ】 親鳥が雛を羽含み被ひ育てることから、轉じて養育の意となる。
 【百濟國より普賢文珠云々】 佛像は凡て百濟から舶來した、普賢文珠も猿と獅子に駕御して渡來したと云ふ事。
 【伯叔】 をちのこと、こゝには崇峻天皇を指す。(聖徳太子の一)
 【はくせ】 博士にて、古への大學寮の官人。
 【深川】 瀧を成す川の流れ。
 【博多王】 白澤王(はくたわう)の誤り、白澤王とは清涼殿の鬼の間の南壁に描ける、鬼を切る勇將の名。
 【ばくてい、そろ、二くすじ、三馬、あざがけ】 以下は凡て博奕の符牒を並べ立てたもの。(大織冠の四)
 【はくてうとりの朝鮮鷹】 白丁を着たやうな鳥、即ち太子の一)
 【白鷹を云ふたものか。(百日の一)】
 【白の白茶】 白人のことを茶になぞらへて云ふ。(潤色の中)
 【白のふう】 白人の風俗。
 【白馬の節會】 正月七日、禁中に行はれた古式、此日青馬を見れば邪氣を除くと云ふ故事から、馬寮の青馬を庭上に牽き渡すを天覽になるので、後には白馬を正しとの説に由り、青馬を白馬に變へたとある。
 【白蜜】 蜂蜜の上等品。
 【麥門冬】 問答にかける、一名ぜうがひげ、藥品名。(薩摩歌の上)
 【莫耶の如く】 莫耶の劍の鋭利なるが如くとの義。
 【伯愈】 韓伯愈は至孝の人、母に打たれて痛くなかつた故、却て其老ひたのを悲しんだと云ふ故事、本文に父云々とあるは誤り。(關八州繫馬の三)
 【白樂天云々】 諸曲の白樂天にある通りの事柄を引用す、青苔衣を帯て巖の肩にかゝり云々の詩も同様。(國性爺の四)
 【白樂天が詩風】 太原の人白居易、最も詩才に長じ白

氏長慶集一名白氏文集七十五卷の著がある。
 【白樂天のおもて】 能の面と、戸外とをかける、面を被たまま、逃げ惑ふさま。(加増の一)
 【はぐれまい】 道を迷ふて見失ふまい。
 【羽黒】 羽前國羽黒山神社、お齋ぐるにかけける。(千西犬の四)
 【羽黒山の隣知らず】 羽黒山は別に註した、これも名産の酒の名。
 【白鷺は塵土のけがれを云々】 花人親王が賤の奴と身を糞し給ふことを、白鷺が塵土の中にまじつて尙ほ汚れなき色をなせる事に喩へた語。(用明天皇の四)
 【博勞町】 番太が夢から夢を食ふ獲、ばく勞町とかけた、博勞町は順慶町(新町橋の東詰の通り)の一つ北の通り。(淀鯉の上)
 【破軍】 破軍星は北斗の第七に當る星、劍の形を成し其指す方向は凶である、本文では破軍の劍先が巽(東南)に向ふ故、東から南について乗り込めば吉である云々。(碁盤太平記)
 【破軍星】 北斗の第七に當る星、此星の指す方位は凶であると云はれる。前項註參看。
 【刷毛の彌五郎、皆朱の善兵衛】 共に色友達の悪友、刷毛の仇名は、野郎頭の鬚先を細長ふして粹を氣取つたものであらう、皆朱とは、赤く塗つた漆のこと、恐らく赤ら面の特徴のある男であらう。(女殺の上)
 【菰】 小枝などに鳥糞をつけて、囀の傍に置き鳥を捕へる具。
 【箱入千兩】 箱根権現に因む、お湯殿奉公は箱根の湯女の縁(千西犬の四)
 【箱崎の松、宰府の梅】 箱崎千代の松原の松と、太宰府の天神に因む飛梅と。(女護鳥の四)
 【箱崎の松原】 筑前國粕屋郡箱崎八幡宮の松原、多々羅濱に續く。
 【はごにかゝる】 菰のこと、はごは糞をつけた小枝、囀の傍に置いて鳥を捕へる具、即ち捕へられた義。
 【箱根の別當】 五郎時致の師の僧。(會稽山の三)
 【箱根の湯本】 相模箱根山中七湯の一つ。
 【箱根八里は云々】 馬士唄本歌は「……越すに越され

ぬ大井川云々。(加増曾我の二)

【箱根山一字の功德】箱玉丸の箱の一字を指す。(加増の二)

【箱の池水】武藏國にある池の名、夫木一冬深み箱の池邊を朝行けば米の鏡見ぬ人ぞなき。

【箱梯子】踏段が板ではなく箱形になつたもの、室内から二階へかける踏段。

【箱枕】角の箱枕、引出し付きのもの。

【藪姑射の山の雪の御賀】仙洞御所の雪見の祝賀。

【ばさら髪】ばさけた髪、亂れ髪、こゝのは亂れ心に響へる。(關八州繫馬の一)

【端】端女郎、團女郎より一級下位。

【橋を四つ渡せる】大阪四つ橋のこと、長堀川と西横堀川の交叉點、炭屋橋、吉野屋橋、上繫橋、下繫橋を云ふ。

【橋が架けたや云々】媒介して見たいの意、松の落葉の五、五尺手拭に「佐渡といよこの越後は、佐渡と越後はすぢ向ひ、橋をいよこの、かきよやれ橋をかきよやれ舟橋を」から採る。(冥途飛脚の中)

【はしかゝらう】商がゆからう。

【橋がかり】能舞台へ樂屋から出る廊下。

【階隠】階の上の、輿を寄せる爲に設けた場所。

【橋がなければ渡りがない】俗に云ふ橋渡し、仲立のこと、「橋なき川は渡られぬ」とも云ふ。

【橋から投げて水食はせ】河に臨める色里、橋の多い大阪を聯想させる。(天網島の上)

【弾き】兒女の遊戯の名、指先にて小石、きしやごなど弾き、數取りして多ひのを勝とする遊び。

【梯子の下のごそ〜】忍び會ふこと。(丹波與作の中)

【はした】はした者の略(半者)女官の中の、中位にある者を云ふ。(賢女手習の二)

【鶴】敏鷹の義、鷹の一種。

【鶴が金翅鳥を狙ふ】蟪蛄の斧と同比喩、比較にならぬ意、鶴は小鷹、金翅鳥は迦樓羅とて金色の翼の其兩端三百三十六萬里あると云ふ巨大な生物の稱。【端に残る可き】中途はんばに生き残る者があらうか。(潤色の下)

【橋詰】新町大門東口は新町橋、其橋詰。(淀鯉の上) 【箸取らして】据膳の箸を取らず、戀を承諾させる。

【梯子の子】梯子、こゝのは子供の遊び用の梯子。

【箸のこけた事】些細な出来事の喩。

【端の間】家の外路に近い座敷。

【榛】栗に似た木、實も栗の味がある、山野に自生し、春季花を開く。

【橋姫】宇治橋の南詰に祀る、昔し恪氣深き女が、夫の他の女と契つたを憤り、毎夜宇治川に浸り、生きながら鬼となり、人を悩ました故、神として鎮め祭つたのが橋姫の社だと傳へられる。

【馬耳風】馬耳東風のこと、何を言ふも耳に入らぬこととの喩。

【橋辨慶云々】謠曲「橋辨慶」に、辨慶が牛若丸に散々に悩まされる條を、滑稽的に取り入れたもの。(淀鯉の上)

【橋本】八幡山の西南、京河内街道の驛。

【馬借】馬の賃貸しを業とするもの。 【婆娑れた姿】引締りのない媚めいたしどけない姿。

【ばしやれ者】ばさら者に同じ、締りのない、華奢風の者。

【柱一本の主】磔刑のこと。

【柱唇】家の柱又は壁に貼付ける一枚刷の唇。

【柱立】家を建てるに先立つて、その柱を立て、祝ふ式。

【はしり】走り元、臺所のながし。

【走り】山川などの水の流れを云ふ。

【走り書】近松が住吉より歸阪の途に、駕籠の中にて作文せしより、「走り書」と書き出したとの説がある。(天網島の下)

【走書する追手船】海上をサラ〜と走る帆かけ船の形容。

【走りこぎり】根かぎり走ること。 【はしりの隅の蜘蛛啼】臺所走り元の隅で啼くげぢぢちの聲で吉凶を占ふ。 【はしりの竹の子】走りは初物、一番走りの竹の子を云ふ。 【走者】逃亡者。

【走れば走る云々】人形に振をつける爲の措辭、女人の道行ゆゑ、長文句の中には此如き文句あれば、人形の振に變化できてよし云々と「難波土産」に穂積以貫が述べて居る。(曾根崎心中)

【管】 契約の意、弓の管と弦と合致すれば外れることがない故に、管を約定の義に用ひる。

【蓮池】 生玉東門の外八幡宮の邊にある。(曾根崎心中)

【管込】 矢管込め、矢管とは矢の頭、弦をかかるところ。

【管ちがひ】 手管が相違すること。

【蓮の糸にて大石を釣下ぐ】 到底不可能との比喻。(山姥の五)

【蓮の葉笠】 蓮葉でこしらへた笠、亡者の被り物。

【蓮葉袖】 遊女風の袖を云ふ。

【はずまう】 はずむ、俗にはりこむ、おごる。

【はぜ】 稜のこと、糯米を煎つて爆ぜふくらしたもの、魚の餌とする。

【芭蕉に落ちて松の聲】 謡曲「芭蕉」にある句、以下

處々に使用。(伊豆日記の三)

【はせ折り】 端折り。

【端せり】 小店端店で遊ぶこと。

【泊瀬のお寺と三輪の山】 泊瀬寺は磯城上郡泊瀬山にある、回廊の牡丹花と二丈六尺の観音とに名高い寺、三輪山も同郡にあつて、蛇體を祀れると云ふ三輪の明神、芋玉巻の杉、梅川忠兵衛の三輪の茶屋などある、泊瀬三輪の邊は檜の林多かりしと見へ萬葉集「みもろつく三輪山見ればこもりくの泊瀬の檜原おもほゆるかな」此邊りの景、一幅の畫巻物を展べたやう。(いろはの四)

【長谷部雲谷】 雲谷等類は天正頃肥前の名畫家、雪舟の畫風に學んで更に高韻な一派を創めた人、此處には悪役として虐使されて居る。(反魂香の上)

【馬糞】 鞍に敷く皮革の被り物。

【馬代銀】 祝ひとして贈る馬に代へての贈金。

【幡杖】 洛北、圓通寺のある地、松ヶ崎の北。

【はだを合はせ】 心一つにすること。

【機織虫】 きりんすのこと、聲が機を織る音に似る。

【裸體軍】 着の身着のまゝ、只一人つぼちの戦争の義。

【裸一步】 包んでない裸のまゝの金。

【裸百疋】 諺に「男は裸百貫」と云ふを百疋に轉じ替へたもの。(夕霧の中)

【裸身や云々】 「裸百貫」の諺にかける。(今宮心中の上)

【はたけ出す】 悉皆投り出す。

【旅籠が六かたけ】 泊りが六回。

【旅籠屋】 旅人宿。旅籠と云へば旅行用荷物を入れる器、今の旅行カバンの類を云ふたのが、轉じて宿屋の別稱となつた。

【はたした衆】 果したにて、米を賣り果したとの意から「はた」とは賣方の通語になつてゐる。(女殺の中)

【機代】 機織りの材料。

【はだせ馬】 裸背馬なり、裸馬と同義。

【商叩き】 商を喰ひ鳴らして憤る。

【肌付】 肌に直接に着けた衣物。

【旗の脚】 長旗の先の、風に靡き翻る箇所。

【肌物】 禪のこと。

【肌の物】 肌に着ける物、衣類のこと。

【はた〜〜】 物と物と續けさまに當る音。

【肌懐】 内懐のこと。

【肌は鍋の底】 眞黒な肌の色の喩。

【はためく】 ハタ〜と鳴る。

【働き立て】 出しやばり過ぎる、やり過ぎる。

【促る】 せまり催促する。

【はだれ雪】 斑雪、まだらに降る雪。

【畑六良左衛門】 新田方の勇將。

【鉢】 腦蓋骨のこと、腦を覆へる骨。

【八併】 舞ふ時の列を併と云ふ、八併は八組のこと、天子は八、諸侯は六、大夫は四、士は二と定る。

【八寒地獄】 有情を寒水で苦しめる八種の地獄、南瞻部洲の下五百由旬の地、八寒地獄の隣にあるとの佛説、頸部陀、尼刺部陀、頸嘶吒、鼈々婆、虎々婆、嗚鉢羅、鉢特摩、摩訶鉢特摩の以上六地獄。

【八寒八風】 八寒は別に註した八寒地獄のこと、八風とは八方の風、即ち炎風(東北)、條風(東方)、景風(東南)、巨風(南方)、涼風(西南)、颯風(西方)、麗風(西北)、寒風(北方)。

【八逆罪】 謀反、謀大逆、不道、大不敬、不孝、不義、謀叛、大逆の八大罪。

【八九】 八才か九才かとの義、破竹の勢にかける。(井筒菜平の五)

【破竹草履】 淡竹で作った草履、八文字の八の頭韻。(虎が磨の中)

【淡竹草履】 十七か十八九草履とかけ、淡竹草履は竹を割って作った履物。

【八貫目】 一兩六十匁替とすると百三十三兩餘となる。

【八軒家】 天神橋南詰東、(京橋二丁目)、昔は八軒の船宿あり、京、伏見通ひの船乗り場であつた。(天網島の下)

【破地獄の秘文】 地獄の苦を破る功德ありと稱する經文、其文は別に註した、「若人欲云々」參看。

【鉢こくり】 鉢叩きの坊主のこと。

【撥駒】 三味線の撥と駒。

【八座】 參議のこと、員數八人ある故名付ける。

【八十種好】 三十二相を有しても好がないと微妙でな

い、好は相の細目で、佛は兩者を兼備してゐる。

【八十八夜】 立春から第八十八夜に當る曆日の稱。

【八十末社】 末社は太鼓持、客の大盡を大神即ち大社と云ふに對して喩へる、八十は大數の形容。

【八字文珠】 文珠八字法のこと、文珠菩薩を本尊としての祈禱法、文珠の眞言に一字、五字、八字の別があるより、名付ける。

【蓮の八條】 八條の地名と八葉の蓮花の縁語。(大原問答の三)

【八大】 八大童子、七大云々の縁語。(用文章の四)

【八大金剛童子】 吉野八大神のこと。

【八大童子は八識】 眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿賴耶識を八識と稱し、八大童子とは此八識に配したるもの。

【八大龍神】 海上平穩を祈る神、難陀、跋難陀、沙伽羅、和修吉、徳叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅の八大龍王。

【鉢叩き】 瓢箪で鉢の頭を叩く事にかける。(反魂香の上)

【八軸の妙典】 法華經八卷のこと、經典はもと軸に巻ひた故この稱がある。

【八陣】 諸葛孔明の作つた陣形の稱。

【はつと呑みかけ】 陽氣に一ぱい呑んで。

【蜂に上下の禮あり】 關尹子に「聖人師蜂立三君臣」とあるに由る、蜂主と其臣との禮儀の正しいことを云ふ。

【鉢に出る】 鉢は僧徒の食器、托鉢に出ること。

【八人の乙女】 八乙女、巫女。

【鉢の木】 植木鉢の木。

【檀のほひ】 檀は重ねの色目の稱、表は黄、裏は萌黄、にほひは染色の名、ぼかしのこと。

【八の巻】 法華經の八の巻。(佐々木の三)

【八はいやる】 飯八杯やつて腹一ぱいになつたとの義

【八疊】 唐書「東至三高麗、南至三眞臘、西至三波斯、吐蕃、堅昆、北至三突厥、契丹、靺鞨、謂三之八蕃」要するに八方の夷共、各國の叛徒共を云ふ。

【鉢開】 こゝは食ひ扶持と云つた意。

【八部】 八部衆のこと、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修

羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽。

【八分の弓】 弓の厚さを云ふ、普通は四分から六七分とする、八分は強弓の意。

【八平氏】 坂東にて平氏を名乗る八家、千葉、上總、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾を云ふ。

【八萬四千】 佛法の繁く多いとの意、主として佛道に用ひらるゝ語、八萬四千葉、八萬四千病など。

【八幡大名】 以下は狂言の「靱猿」の筋を挿み込んだもの、八幡は源氏の氏神、八幡大名とは源家のある大名のこと。(松風村雨の五)

【八萬地獄】 あらゆる地獄の意。

【八萬法藏】 八萬四千の經論のこと。

【罰利生ある】 嚴しい代りに温味もあると云ふ喩。

【罰利生も人によるか】 神佛の罰利生を與へるに、人の貴賤高下に由つて差別あるかとの喩言。(女護島の舞とも稱する、唐の太宗の作。

【はつあ】 感嘆詞、ハア、葉にかける。(佐々木の三)
【初色】 手入らずの美色、お夏を指す。(歌念佛の上)
【八音】 金、石、糸、竹、匏、土、革、木の八種樂器。
【廿日草】 牡丹の異稱、但し本文には芍薬とある。(用
明天皇の四)

【恥しなから】 こゝのは憚りながらの意。
【恥しの森】 山城國羽束師の森。

【恥かしのもり云々】 山城の名所、羽束師の森にかけ
て、身の所體の亂れた恥かしさを云ふ。(曾根崎心中)
【恥かしや亡き跡に云々】 この邊の文は諸曲「忠度」
の後ジテの出の文章を其儘借つてゐる。(千載の四)

【はつき】 はつきり、明瞭。
【初君】 初買の遊女。

【八功德池】 極樂淨土に在ると云ふ寶池にて、八功德
を具へた靈水、(一)澄淨(二)清冷(三)甘美(四)輕軟
(五)潤澤(六)安和(七)除患(八)増益。

【八苦八難】 八苦は涅槃經に出づ、八難は維摩經にあ
る、此處のは、あらゆる神佛の罰苦を指す。(天智の
二)

【抜苦與樂】 苦を去り樂を授けること、佛語。

【はつけ】 はりつけの略。

【八卦八陣】 八卦は乾兌離震巽坎艮坤の易象、八陣は
諸葛孔明の陣立と稱する古兵法。

【八歳の龍女云々】 法華經提婆品にある、婆娑羅龍王
の女八才の時、文殊菩薩の導きによつて、釋尊の前
に來り變じて男子と成り、南方無垢世界に成佛すと
説かれて居る。

【はつさい者】 蓮葉女、才氣走つた女を呼ぶ、大阪の
方言、發才など書く。

【八相】 八方。

【初盃】 太夫が新春に内祝ひとて家内で初盃をすま
し、それから禮廻りの道中に出る。(壽門松の上)

【はづさんせ】 脇道へそれて通れなされの義。

【八色五色の花】 色さまざまの花の盛りの形容。

【はつしの糸】 絹布類をほぐして糸として使ふもの、
まだ糸らしい糸にもなつて居ない初心の時代を指し
て云ふ。(薩摩歌の中)

【初箱に折らばや云々】 初菊の御遊ゆへ、古今集凡何

内躬恒の「心あてに折らばやをらん初霜の、おきま
どはせる白菊の花」から取る。

【八省】 中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、
宮内の八省。

【八庄司】 大和國吉野山中の八郷、鹿瀬、蕪坂、湯淺
阿瀬川、小原、中津河、吉野の各郷の長。

【八省百官】 大化改新以來に置かれた官府、中務、
式部、治部、兵部、刑部、民部、大藏、宮内の八省、
百官は百司百僚、もろ／＼の官人の總稱。

【八寸の給仕云々】 胸に打たる、八寸釘と、八寸膳(足
の高さ八寸の膳)とにかける。(萬年草の上)

【初瀬も遠し難波寺】 諸曲「三井寺」の文句。
【八專】 曆の語、壬子の日から癸亥の日まで十二日間
中、間日を除いた八日間の稱、一年に六度ある。

【楚】 米麥などを炙り焦して粉としたもの。
【跋提河】 アジタバツチ河、釋尊此河の西岸にて涅槃
に入る。

【はつたり】 俗にはりこむ、充分にすること。
【はつち】 もと朝鮮語と云ふ、股引「棍襦」。

【はつち／＼】 鉢坊主、托鉢して物を乞ひ歩行く僧の
呼び聲。

【八町走り井】 八丁は大津八丁、走り井は大津街道に
ある著名な井水、大津八町を走るにかける。(反魂香
の上)

【八町まち】 重言なれど、近所至るところと云ふ意を
誇張して云ふたもの。

【ばつてう笠】 竹の子笠の一種の大形なもの。

【八天】 天界帝釋天宮を繞圍する東西南北の各八天。

【はつとして】 噂をばつと廣めること。
【はつと廣げし手も打たれず】 開いた口がふさがらぬ
と同意、非常な呆れかたの形容。

【服部】 大阪の北方の村、服部煙草の産地ゆゑ、葉屋
と名付けた作者の洒落。(壽門松の上)

【服部煙草】 攝津服部の地に産する煙草は古來有名。
【初音】 義經が愛玩したと稱する鼓の銘。

【初音お床】 初めての寢床、新枕の意、初音と初寢を
かける。(三世相の二)

【初音の里】 美濃國の地名。

【初子の日松澤山】 初子の日には松を曳く古例によつて、廊の紋日に松の太夫の澤山なことを云ふ。(壽門松の上)

【八方へ差す】 八方へ生え擴がる。

【初花】 其年始めて咲く花、しほらしい形容に用ひられる。

【ぼつばの鮫鞘】 「ぼつば」は大阪の方言でははでな事を云ふ、今日でも用ひられて居る、鮫鞘は若い武士が伊達好みの鮫皮を巻いたもの。

【初見草】 萩の異名。

【はづむ】 俗に、はりこむ、おごること。

【撥無】 はねつけて顧みないこと。

【初昔】 三月二十一日から摘む茶故「昔」と名付ける。上等の煎茶抹茶の名。

【初名月】 八月十五日夜、九月十三夜を名月と云ふに對して。

【初元結】 元服の髪を結ぶ紐を云ふが、こゝのは養子に行くに付き初めて髪を上げたとの意。(丹波與作の上)

【初元結の小紫】 元服の時、髪を結ぶに紫の組紐を用ひた、「ゆひそむる初元結のこ紫衣の色に移れとぞ思ふ」。

【八徳】 胸服のこと、十徳に似たもの故名付ける。

【はでな人】 仰山らしい人。

【はでな者】 行き過ぎ者。

【馬頭觀音】 三面八臂、頭上に馬頭を戴く、六觀音の一つで、觀音菩薩が大威勢で大慈悲を行ふことを形容したるもの。

【再從兄弟】 三從兄弟の稱。

【鳩のかい】 「鳩の飼ひ」にて妖巫の類、即ち八幡大明神に託して鳩の飼料を食る義とも言へば、又、表面は日本回國の六部と言ひながら年中同地に住んで、まが／＼しひ顔の男を、鳩のかいと云ふとの説もある、兎に角、人を誑かり盗みなどする詐偽師と云ふ義であらう。

【鳩の杖】 頭部に鳩の頭を彫つた杖、鳩は咽ばぬもの故老人の用ひるものと云はれてゐる。

【涕】 鼻汁の略。

【鼻脂】 物に塗り添へて一層つやを付けると云ふ意。(鎗羅三の上)

【鼻息窺ふ胡椒の粉】 熟睡か否かを窺ふに、胡椒の粉をさへ散らぬ程に、よく寝入つて居る。(梶狩の三)

【鼻息も云々】 毫も、ちつとも。

【花軍】 普通は櫻花の枝を翳して打ち合ふ遊戯を云ふが、こゝのは、櫻と梅との對戦に作る。(國性爺の一)

【鼻歌】 小唄など小聲で唄ふこと。

【花靱】 靱に花を挿した紋。

【花漆】 精製された漆を云ふ、目出度く織ぐの縁語。

【鼻をふき】 猛獸などの鼻息を猛く吹くこと。

【花折一合】 花籠一個。

【花折坂】 高野山不動阪女人堂の下方、昔參詣人此處で花を折り大師に手向けたものと云ふ。

【花かいらぎ】 梅華皮、柄鮫の粒の間に花點状をした刀の柄又は鞘の飾りを云ふ。

【花勝見】 草の名、この草の本稱に付ては諸説がある、或は「かまやまあやめ」とも「まこも」とも「たのじも」であるとも云ふ。

【花貝】 櫻貝のこと。

【鼻紙びんび】 鼻紙を惜氣なしに無暗に使ふことで、びんびは、ばつ／＼など云ふと同意の方言。

【鼻紙袋】 鼻紙、金、藥、小楊枝、耳搔等を疊紙に入れたもの。

【花曇りなれ】 開雲が天日を蔽ふも暫時の間と云ふ意を花ぐもりに喩へる。(井筒業平の二)

【鼻毛を讀まる】 女に溺れて弄ばるゝも知らぬ事、こゝは女の事に限らず、何處で馬鹿遊をして居たかとの意。(宵庚申の下)

【鼻毛千本朱雀云々】 朱雀は鳥原、千本通にある故に云ふ。

【華皿】 花筥、散華の時(行道しつゝ花を散らす行事)その花びらを盛り又は檜の葉など入れる金屬製の皿。

【咄染む】 語がはづむ。

【はなし目貫】 片々に離れた目貫、こゝのは放任主義の意。(女腹切の上)

【鼻白】 こゝのは、ハタと出會ふこと、鼻つき合ふこと

【花指衣の色装】萩とか又は露草の花を、衣に指りて色を染める、それを襲ねて着ること。

【花園】山城葛野郡花園村、今の妙心寺の地。

【花染め被衣】櫻の花の色に染め上げた被りもの。

【花橋の袖の香】古今「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」による。

【花橋昔の人と云々】前註同様「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」からとる。

【花橋唐土人の孝行云々】吳志に見ゆる孝子陸績が六才の時賓客となつて招かれし席上、橘を懷に秘し、歸つて母に與へんとした故事。

【花田の帯】縹色の帯。

【鼻血、鼻から出る血。】

【花散里】源氏の巻の名、麗景殿女御の三の君の住居によせる。(いろはの二)

【鼻衝く】反抗すること。

【はなでやる】はなは鼻歌、のんきに鼻歌で來往すること。

【華飛び蝶驚けども人愁へず云々】花散り蝶驚く行く春にも、騎者に馴れた宮中の人々は敢て愁へない、殿廊別に不慮の春があるから」と、「三體詩」にある

鄭宮の石季龍が豪奢淫蕩を諷した詩の詞。本編の大

明思宗帝が暗愚の質、國亂起らんとするを知らずに、

酒色に溺れて居ると云ふ一齣の、序詞として用ひて

居る。詩は「花飛蝶驚不レ愁レ人、水殿雲廊別置レ春、曉日靚粧千騎女、白櫻桃下紫綸巾」陸龜蒙の詠。(國

性命の一)

【花ならば初櫻】これから盛りにならうと云ふ境。(世

織の三)

【花盗人】こゝでは風流人と云つた意。(枕言葉の一)

【鼻に扇】鼻を扇に當てがふて、喜左衛門くと呼ぶ、如何にも大盡らしい面目が見へる。(夕霧の上)

【花に鳴く鶯、水に棲む蛙云々】古今集の序にある句「花に啼く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、孰れか歌を詠まざりける云々」。

【鼻に目を付け】天狗なれば其鼻に心を付けて見る。(百合若大臣の三)

【鼻捻】鼻捻りのこと、木柄の端に冥をつけ荒馬の鼻に嵌めて捻る馬具。

【鼻の先の走り智恵】鼻先きだけの浅い智恵ぶり。

【鼻の下が干上る】口をぬらす事が出来ぬ、糊口が出来ぬと云ふこと。

【花の帽子】美くしい被りものを云ふ。

【花の帽子の空色】淡い空色の空を初夏の残花の被り物(帽子)に見立てた形容。

【花の吹雪と詠じけん】山家集「春風の花の吹雪に埋もれてゆきもやられぬ志賀の山道」を云ふ。

【花の下】連歌の宗匠家の異名、宗祇法師から創る。

【花は嵐】往時の花やかな面影はあらしを嵐にかけ、尙ほ和事役の名人嵐三右衛門が名を揚げる動機となつた「花に嵐」の名セリフを活用したもの。(夕霧の上)

【花筥】花を摘んで入れる筥。

【花は盛りに云々】「徒然草」の句「花は盛りに月は隈なきをのみ見る物かは云々」を借用。(兼好法師の中)

【鼻梁】鼻の穴の間の隔ての肉を云ふ、俗に鼻の障子。

【花は三吉野人は武士】花の中の花は吉野の櫻、人の

中の人は武士と云つた古諺。

【鼻はよい衆】鼻だけは満足満悦。

【花火山】豊前國にある。

【鼻乾る】鼻の乾く時即ちくしゃみが出る時。(つれづれの四)

【鼻笛】呼子の笛のこと。

【花舞と名にこそ云々】花舞とは名のみで家の中心は娘にあることを云ふたもの、此文句は「松の落葉」櫻

盡しにある。(卯月の中)

【花結び】立花の道を指す。

【花紫を戴いて】紫帽子を被ること。

【花珍らし】非常に珍らしい義。

【花柚】柚の汁。(會稽山の二)

【花柚】密柑の類。

【放れ物】常軌より飛離れたもの、一種特別のもの。

【胸に衣させず】飾らず儂らず其儘に言ふことの喩。

【はね】泥穢、泥の片。

【跳馬の障子の繪】宇多朝の名畫家巨勢金剛が畫した内裏の馬は、毎夜出て萩の戸の萩を喰うたとの傳説による。(反魂香の上)

【羽かはす】向ひ合はせになり羽根を突きかはす。

【羽がへし】宙返りすること。

【羽づくろひ】これも鶯に喩へて、身ごしらへする形容を云ふ。

【羽繕ひ】別に註あり、此處のは鶴澤の鶴が手持わるげに立つて行く形に譬へて言ふた。(千匹犬の三)

【跳釣瓶】桔槔、石の重みで水を汲み上げる仕かけの釣瓶。

【羽根の二つ羽】大羽の箒、茶式の用具。

【撥袴】糊でしやちこばつた袴、端がピンと立ちはだかる故、嵩にかけて云ひ被せる喩に使ふ。(女夫池の二)

【はね元結】髪の上に跳ね上つた元結。

【巴の字】曲水の宴の時、水上に巴の字を書くこと云ふ故事を採る。

【母を悪虎に取られ云々】曾我物語にも引用された李將軍の故事、但しこれは父が虎害に逢ふことになつてゐる。(扇八景の下)

【はじかつて】はびこる、ひろがるの義、威張り返へること。

【母川】土佐國母島、古名を妹兒島と呼ぶ。

【彈りをかへりみず】慮外ながら、畏れ多きも顧ず。

【彈り千萬】不都合千萬。

【彈りのせき】はじかりの關は昔陸奥國に在つた關所の名。

【鋸】刀の鐔の上下に固く貫ひた金具。

【箒木】ありと見へて無きものゝ例に用ひる、昔、信濃國その原のふせ屋の森で見ると箒のやうな梢があるを、近寄ると其形が見へなくなると云ひ傳へられた怪木、源「はゞき木の心も知らでその原の道にあやなくまどひぬるかた」

【はゞきの露】性古信濃國にあつたと云ふ箒木を母にかけて云ふ、箒木は箒のやうな梢の木にて、立ち寄ると忽ち形が消へ失せると言ひ傳へる、亡き母の

面影を箒木の露に譬へて言ふ。(三世相の三)

【箒木の卷】源氏五十四帖のうち「數ならぬ伏屋に生ふる」の歌意、賤しき者と云ふ謎。

【羽々斬】素盞鳴尊大蛇を斬りし名劍、後世石上神宮に祭る神寶。

【はゞこ草】ひきよもぎのこと。

【母者人】母である人の訛、子から母を呼ぶ稱。

【婆々せ】婆御前を洒落て略して云ふ、老妻のこと。

【杵原】杵の繁れる原、杵は幹二丈ほどのもありて秋に紅葉する、はゞと云ふ同音の縁から母親にかけて用ひる、老木は即ち遺母を云ふ。(大磯虎の三)

【母の浮名】こゝのは母の悪名と云ふこと。(宵庚申の下)

【母の刀自云々】刀自は女主、主婦の稱、以下は「平家物語」の文章朗讀で、祇王が佛御前に籠を奪はれ、家に歸り居る内、又清盛入道から召された、祇王は否んだ、それを母が教訓を與へて是非に入道の召に應ずるやう勸め居る一節。(宵庚申の中)

【幅の廣い傾城の請様】晴れ々しい傾城の請け出し

やう、幅の廣いは不遠慮な厚かましいと云ふ意。(女夫池の一)

【羽々矢】羽の大きく廣い矢。

【八幡の海賊】支那明の時代に、日本船に八幡の神號を掲げて邊海を荒した和寇のことを稱して云ふ。

【ばはん船】倭寇が八幡の旗を掲げて邊海を荒した頃、明人等は八幡(ばはん)船とて懼れた。

【這ひ躡ふても】地頭代官等を地に這ひ躡はせ懇願させてもの意。(松風村雨の二)

【はひでの蛙二合半】這出たばかりの、ポツと出の奉公人は一日二合半貫ふと云ふこと。

【這柏樹】檜の類、地上に這ふもの。

【法界順逆結縁】あらゆる衆生を救ひ佛縁を結ぶ意。

【法界とも】法界格氣とも略。(鎗權三の上)

【法界の男】内も外も一切無差別の、締りのない男。

【法界無縁無明能化】此世にて未だ佛菩薩と結縁の無

い者や、愚痴煩惱に迷ふ者を濟度教化するの義。

【法界格氣】法界は佛語にて宇宙一切の世界を云ふ、

誰れ彼れなしに一切平等に(自分の事でもないに)格
氣すること。

【翫き】 羽たゝきすること。

【羽吹く】 鳥の羽たゝくこと、前項に同じ。

【法氣付く】 佛氣の出ること。

【法相】 法相宗、法の性相を解決するを主とした佛教、

元興寺の道昭(孝徳朝)唐から歸朝して唱へ創めた。

【法藏比丘云々】 王位を捨て發心出家し沙門となつ

た天竺の世徳王のこと、其淨瑠璃とは、緣起由來な

ど云ふ事を、開放題に述べたものなり。(女殺の中)

【羽伏し】 双方同様に倒れること、相授の語。

【法性寺】 法勝寺にて、白河院の建立にかゝる大寺、

今、京都動物園のある邊。

【法匠】 佛教の語、佛教信者、門徒の意。

【法要の修理三昧】 種々の法會を熱心に續け修するこ

と。

【はぶらさず】 放心せず、氣を落さず、心をそらさぬ

こと。

【法隆寺】 大和國法隆寺村にある推古天皇十五年の建

立にて我邦第一の古刹。

【法隆寺】 大和國平群郡法隆寺村、手代二郎兵衛の故

郷。(今宮心中の上)

【祝子宮奴】 神官の人々。

【法輪】 嵐山の半腹にある法輪寺。(用文章の五)

【はふれにたれど云々】 落ちぶれて居ても艶に美しく

奥床しい。

【法皇の御代】 醍醐帝の前代、宇多法皇の御代を指す。

(天神記の二)

【蠅打】 蠅はらひ、蠅を叩き殺す具、こゝでは松の木

を指して云ふた。(川中島の一)

【濱せせり】 惣嫁買ひのこと、多く濱(川岸)に立つ

故、濱をせゝり歩行くの意。

【濱名の橋】 遠江國濱名湖の北山際にあつたが後斷絶

した陽成院元慶八年建設、長五十六丈あつたと云ふ。

【はまなみ】 濱並にて、濱の賣女並の錢高と云ふこと、

濱から次の滋賀の連波を呼び起す、又、十文錢の裏の

波模様にもかける。(女腹切の中)

【濱に立つ】 惣嫁に出ること、辻君は多く濱(川岸)に

立つ故云ふ。

【濱の市】 豊後國の色里。

【濱の床几】 河岸の納涼床几のこと。

【濱の眞砂は云々】 石川五右衛門の詠と稱せらる「石

川や濱の眞砂は盡きるとも」の歌をもちる。(佐々木

の二)

【濱焼】 料理の一種、蒸し焼にすること。

【濱床】 帳臺の類、三尺四方にて高さ一尺程の臺を四

つ列べ、四隅に柱を立て帳を垂れた貴人用の座床。

【はまり】 穴にはまる、向ふ見ずの意、俗語。

【はみ返る】 食み返るにて、食むは食言の、背くの意

味、背きて元に返ること。

【はみ出し鏝】 短刀用の鏝、柄及び鞘の上へ食み出し

たものと云ふ。

【刃向く】 太刀の正面に立つこと。

【はめ立する】 欺きいつわる。

【鱧の皮】 鱧の皮を細く刻んで炙り、酢に漬けて食ふ、

上方人の愛好食物。

【刃物の相性】 刀と持主との運性を云ふ。

【はや】 鐘、はえのこと。

【甲矢乙矢】 第一の矢、第二の矢と云ふ義。

【早追ひ】 急使ひで道中を晝夜兼行で駕籠を走らせる

もの。

【早鐘まさり】 鐘の代りに私の丸太頭を打てば、早鐘

代りになるとの洒落。(女楠の四)

【林を辭する狩場の鳥云々】 狩場の勢子に林の巢を逐

ひ出された鳥のやうな、哀れな有様を云ふ。

【はやす】 細かに切り刻むこと、叩ひて音を出すこと

ふ意で、切ると云ふ忌言葉を避ける時に使ふ。

【早瀬川】 急足を川の早瀬に譬へて云ふ。

【早瀬の鮎を鵜の鳥云々】 敵を掌裡に握つて追ひ廻す

喩。

【連玉のおの云々】 いざなぎの神の御子、連玉之男神

にかける。(吉岡染の下)

【はやち風】 はやちは疾風、疾風の風とは御丁重であ

る。

【はやて船】 疾風船、追風に追はれて奔る船。

【早繩】 捕繩を云ふ。

【隼人】薩摩大隅から年々京に上り禁中外門守護に當る、後世薩摩武士の稱となる。

【速日の命】饒速日命、天孫瓊杵尊の兄。

【隼が雉子に逢ひし鳥屋落し】隼は鷹の鋭い一種、雉子を見つけて鳥小屋から蹴落す其早業を云ふ。

【葉山繁山云々】新古今「筑波山葉山繁山茂けれど思ひ入るには障らざりけり」を採る。

【早道】錢入、巾着の稱。

【早雄】血氣に逸る若者を云ふ。

【疾りの馬に鞭】油に火を注ぐの喩と同義、逸る者をして一層逸らしめる。

【ばら緒】叢緒、幾筋かの細い緒を合はせて作った鼻緒。

【腹をゐる】腹を癒る、憤りを癒やす。

【はらか云々】ひらかの三郎のもぢり、はらかは腹赤のこと、鱒の古名、昔、大内の公事に、腹赤の奏とて鱒の贄を天皇に奉ることがある、それを云ふ。(加増の三)

【原惣右衛門】原惣右衛門のこと。(基盤太平記)

【ばらす】ばら／＼にする、殺すこと。

【腹腺をよつて笑ふ】抱腹絶倒のこと。

【腹筋千萬やい】腹の筋が撚れる、抱腹絶倒と嘲笑する詞。

【婆羅僧掲諦】陀羅尼の句、腹を立てるにもちる。

【腹の中から馴染】乳兒の頃から深い馴染。

【拂ひ打】逐ひ拂ふやうに打つこと。(百日曾我の二)

【拂物】不用品で賣拂はるゝ品。

【はらほろめく】はら／＼ほろ／＼音のする。

【腹巻に袖付し云々】武裝すること。

【波羅蜜花】波羅蜜樹に咲く花。

【波羅門が摩醯首羅】波羅門は印度僧侶の階級の稱、こゝには波羅門天即ち梵天のことを云ひ、摩醯首羅は大自在天のこと、共に勇猛神の意にて用ひてゐる。(鎌田の上)

【婆羅門王】こゝは天竺で信仰される造物主梵天王を云ふ。(嵯峨の四)

【はらや】輕粉、肌白粉のこと。

【腹襦】角力の手の、相手を腹の上に吊り上げて運び

出すこと。

【はらりつと】すつきりと、全然。

【はり】博奕の語、金をかけること。

【張合人形】釣合人形のこと、玩具の人形、紙人形の兩脚に重しを付け中心の竹骨で調子を取り動かす、彌二良兵衛又は豆人形とも云ふ。

【はりが過ぎて】博奕の金をはること、博奕が過ぎての意。

【張り切る】力を張つて切り裂くこと。

【張口】力の張り切つた工合。

【張輿】武家僧侶などの乗物で、周圍を備後疊の表で張りつゝんだもの。

【針立】針醫者。

【磔が獄門の首を見て云々】猿の尻笑ひと同義。(嫉歌の三)

【針手】裁縫する人。

【針手きゝ】縫物の手利、達者なこと。

【針手綴の色紙短冊云々】着物のしきしや綴り綴ぎはぎの仕直し仕事を、色紙短冊に譬へて風流に云ふた

もの。(隅田川の三)

【張抜】型の上を紙で張つて其物の形に作る。

【張臂】勢張つて臂を左右に張る良。

【張物に親子の愛】張物に使用する細い竹串の「しんし」と親子の音便とをもちる。(扇八景の中)

【春をもつて】おさんの夫以春を指す。(大經師の上)

【春子】春になつて生れた子、こゝは鹿の子に云ふ。(五人兄弟の一)

【春過ぎて夏來にけらし白旗の】持統天皇の御製に、「春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天のかく山」の白妙とあるを、源家の白旗に代へて云ふ。(出世景清の一)

【春と秋とを併す】春は花をも人に忘れよの花、秋は、月を捨てと灯火やの月を指す。(加増の二)

【春長公】織田信長の假名。(三國志の一)

【春の鴈花を拾つれば云々】鴈行燕來の意、露より薄きお情けや「までが琴唄になつてゐる。(浦島の三)

【春の錦とこき交し】古今「見渡せば柳櫻をこきませ

て都ぞ春の錦なりける」から採つた句。

【春の野にあさる雉子の云々】拾遺集にある家持の歌、知れつゝは知られつゝ。

【春の夜の夢驚かす云々】以下「波にゆるるゝ世の習ひ」まで、「松の落葉」の六、「淀川所作」の前半の文を作り替へたもの。「春の夜の夢驚かすくたかけの其きぬゝ」の物思ひ又逢ふ事もいつかわと深き心にかこち草根引にせんといひかわす云々」澤村長十郎岩井佐源太等の所作狂言。(淀鯉の上)

【春は東に立てそむる】春は東風、即ち東門から吹き来る、以下、春夏秋冬を、東南西北に配して壽き祝ふ柱立の文。(田世景清の一)

【春や昔の春ならぬ】古今「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」による。

【はれいの庭】晴れの場。

【晴ざるに何の虹云々】心曇り勝ちなるに拘はらず花やかに美しくしいとの形容。(小栗の五)

【ばれたる詞付】はちけた、蓮葉な言葉ぶり。

【判】此處のは證文の意。(重井筒の中)

【潘安仁が母方の甥】張文成の「遊仙窟」にある、文

成の契つた女は潘安仁の外姪とあるを、外甥として、花山帝の麗容に譬へる、潘安仁亦非常の美男子であつたと云ふ。(枕言葉の一)

【はんがい】半蓋、長持の小さなもの、榛谷にかけて云ふ。(會稽山の一)

【判を据や】判を据えよの訛。

【はんかう】半頭、半髪(はんかみ)の音便、頭髪を前部の半分だけを剃り、後方の髪を残した頭のこと。

【半髪額】はん髪(はんかみ)の音便、半分剃つた髪。

【板額女】淺利與市義遠の妻、力量非常に勝れ、又射術に達した女丈夫。

【番頭】武家の番衆の長。

【萬機】天皇親ら執り給ふ政務。

【半弓】長さ大弓の半分位。

【萬機をいろはせ給はねば】政治を執らせ給はねばの意。

【半切紙】本來は杉原紙を横に半分に切つたもの、後には何の紙にても此名を用ふ。

【半九郎お染】「鳥邊山心中」のお染半九郎の役。(卯月

の上)

【樊噲が鴻門にて云々】樊噲は漢の高祖が麾下の無双の勇士、高祖、項羽の爲に危ふかつた鴻門の會に馳け參じて、劔舞したと云ふ故事から取る。

【樊噲が母衣】母は子の樊噲に衣を脱で餞別とした、樊噲は戦ひ毎に此母衣を鎧に被けて奮戦した、これ後世母衣の始めと云ふ俗説がある。

【樊噲が門破り】沛公の危難を聞きし盾を突て駈け付けた樊噲の武勇。(兼好法師の上)

【樊噲の牢人】牢人は浪人、猛々しい浪人者を譬へて云ふ。

【樊噲は劍を抜て人を斬らず】漢の高祖の危急を救ふために樊噲が項羽の宴席に入つた時、劍を抜き立つて舞ひ、肉を切つて食ひ、臣死を辭せず、豈特に屠酒のみならんやと満座の人の氣を呑んだと云ふ故事。

【樊噲流は珍らしからず】此條の文章、豪快にして金平風の佛がある、巢林子は「天網島」のなまいだ坊主のてんごう念佛に之を引用し道具屋節で語らせて居る、當時人口に膾炙したものと見へる。(國性爺の

四)

【樊噲流は珍らしからず云々】「國性爺合戦」九仙山に國性爺が關所破りの一節を借つて來たので「國性爺合戦」は正徳五年十一月が初興行、二回目は此年享保五年一月それを場當りの加へたものにて、此種の例は珍らしくはない。(天網島の上)

【盤桓】行きつ止りつ、進み難い貞。

【半偈】偈は佛教の語、四句を一偈とする、半偈は二句。

【半夏】半季のもぢり、藥草からすびしゃくの異名。(薩摩歌の上)

【はんげ草】かたしる草(三白草)のこと。

【萬古目前の境界】悠久に昔も今も變らぬ境界、以下朗詠の文。(振袖始の二)

【盤古王】述異記に「盤古氏、夫婦陰陽之始也、天地萬物之祖也」とある。

【反魂香】李夫人の冥魂を再び見たいと、漢の武帝が方士をして反魂香を作らせ、之を焼くと、夫人の姿

が現はれたと東坡詩集所註にある、又洪芻の香譜には、蘇氏の子徳哥が司天主簿徐肇の爲に、反魂香を焚くと、徐肇の父母の靈が煙中に現はれたとある。

〔反魂香の中〕

〔反魂樹〕 反魂香の樹と云ふことであらう、梅檀の香木と對稱。

〔反魂の法〕 歸死回生の法、魂魄を呼び返へす法。

〔坂西〕 坂東の對稱、即ち相模國足柄の坂以西の國を云ふ。

〔播州の赤松〕 播摩國赤松圓心のこと。

〔萬事限りの病〕 九死に瀕した病。

〔盤渉を平調に〕 共に十二律の名、盤渉調を平調（秋の調）に調子をかへること。（蟬丸の三）

〔鑿字の明〕 滅火の呪法。

〔萬事は皆非なり〕 「つれづれ草」の句、老莊の思想、賢愚得失、世の中の一切の事は皆空虚なもので云ふに足らず願ふに足らぬとの義。

〔番匠箱〕 大工の道具。

〔盤上亂舞〕 碁將碁双六等、盤の上の遊戲を盤上と云

ひ、今様の歌など諳ふたり舞ふたりするを亂舞と云

〔坂松山〕 一心寺のこと、茶白山の北、天王寺西門の西二丁、淨土宗鎮西派、寺内に遺跡寺寶多し、日想觀修練の勤行場にて、八代目園十郎の碑、本多忠朝の禁酒墳などある。

〔萬乘の位〕 天子の位、天子は萬乘の國、諸侯は千乘の國と稱し、天子の御領地は軍車を萬乗出すほどあるもの故に云ふと、「禮記王制」に見ゆ。

〔半身丈六〕 佛像などの半身の座像身長一丈六尺のこと。

〔萬歳を誦はせ〕 天下太平を謳歌させる。

〔はんぞう天王〕 はんぞうは半挿、水を盛つて、物に注ぎ入れる器、はんぞう天王と洒落る。

〔斑足王〕 印度摩訶陀國の王、其父牝獅子と交はつて産れた子、兩翅、鹿足、駁足とも云ふ、足の上に斑駁がある故、斑足王と稱した、性獠猛、好んで小兒を食ふと云ふ暴君。

〔萬代の池の龜〕 支那の王陵の池名、此池中の龜は甲

に三玉を備へたりとは、能樂の始めに翁の諷ふ文句。

〔番葛籠〕 泊り番用の蒲團夜着その他を入れる葛籠。

〔番手〕 狩の組々。

〔萬天〕 滿天下。

〔坂東聲〕 變聲を云ふ、坂東人の粗野な音聲のこと。

〔坂東武士の荒育ち〕 坂東とは相模國足柄の坂から東の國々の稱で、其國の武士等は皆猛け育ちなりとの意。

〔樂特が愚痴も文珠の智慧〕 智も愚も差別なしとの意。

〔はんなり〕 氣の晴れ々する貝。

〔晩にや梅の木の枝おろそ云々〕 松の葉三卷にある、のんやほ節の歌「ぼんにござらば、ひごなたさいてござれ」、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ〜ひごなたさいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ〜」を採る。（西王母の一）

〔般若阪〕 南都般若寺の東なりしとも、今の大道の東なりしともあれど不明、但し現時は般若寺の南の坂を稱してゐる。

ひ、今様の歌など諳ふたり舞ふたりするを亂舞と云

〔坂松山〕 一心寺のこと、茶白山の北、天王寺西門の西二丁、淨土宗鎮西派、寺内に遺跡寺寶多し、日想觀修練の勤行場にて、八代目園十郎の碑、本多忠朝の禁酒墳などある。

〔萬乘の位〕 天子の位、天子は萬乘の國、諸侯は千乘の國と稱し、天子の御領地は軍車を萬乗出すほどあるもの故に云ふと、「禮記王制」に見ゆ。

〔半身丈六〕 佛像などの半身の座像身長一丈六尺のこと。

〔萬歳を誦はせ〕 天下太平を謳歌させる。

〔はんぞう天王〕 はんぞうは半挿、水を盛つて、物に注ぎ入れる器、はんぞう天王と洒落る。

〔斑足王〕 印度摩訶陀國の王、其父牝獅子と交はつて産れた子、兩翅、鹿足、駁足とも云ふ、足の上に斑駁がある故、斑足王と稱した、性獠猛、好んで小兒を食ふと云ふ暴君。

〔萬代の池の龜〕 支那の王陵の池名、此池中の龜は甲

〔般若寺〕 大和國奈良の北端、護良親王、敵難を大般若經の唐櫃に避けさせたとの傳説がある。

〔般若十六善神〕 大般若經を守護する十六善神の稱、即ち、勇猛心地善神、毘盧博又善神、增益善神、救護一切善神、獅子威猛善神、離一切怖畏善神、能忍善神、提頭賴吒善神、歡喜善神、除一切障難善神、能救諸有善神、攝伏諸魔善神、吠室羅廓善神、降伏毒害善神、毘盧勒叉善神、拔除罪垢善神。

〔斑女が聞〕 斑婕好は漢の孝成帝の宮人、詩賦に巧みな人、趙飛燕の爲に寵を奪はれ其作の怨歌行に、聞の扇が秋になつて捨てられることを怨んだ文がある、聞怨のさびしさの意。

〔萬能一心の家業なし〕 「萬能も一心の善には如かず」の諺もあるが、その家業に萬能も一心の善もない破戸漢と云ふこと。（傾城酒吞の四）

〔伴の別當〕 名は廉平、相人占卜の術に達した人。

〔半臂〕 樂人の着る殆んど袖のない短衣、東帶の時袍と下襲との間に着用するもの。

〔半ぶ〕 女郎の名、祇園坊の半分にかける。（傾城酒吞

【の四】

【半兵衛は池田屋の小菊】 西澤文庫傳奇作書情死人名録の中に出る。(水朝日の下)

【半夜】 夜半に同じ。

【ばんや】 斑枝花、熱帯國に産する、實の中に綿のやうな、ふわ／＼したものがあつた、故に植などに入れて用ひる。

【范蠡】 越王勾踐が會稽に降つて入牢の時、范蠡は魚賣に化けて近付き、密書を魚腹に入れて獄中の勾踐に致したと云ふ故事。

【范蠡が趣】 越王勾踐の忠臣で、臥薪嘗膽能く主を擁して會稽の恥を雪ひだ、こゝは忠臣の意に引用したまで。(國性爺の)

【范蠡西施を湖水に沈む】 范蠡越王勾踐に事へ共に吳王夫差を討ち滅した故事、西施は夫差の魂を奪ふた美姫。

【半蓮を分けて】 一蓮托生の半座を分けての意。

ひ

【楡扇】 楡の薄板を綴ち合はせて作つた扇。

【火刑】 「重井筒」のお房が炬燵の中で苦しむ所がある、それを云ふ。(淀廻の下)

【火灸にならしやれぬか】 徳兵衛が大分やけになつて毒ついた詞、火灸は火で焼き殺す徳川時代の刑名。(重井筒の中)

【最氣の方】 好意を持つ人。

【最氣の引倒し】 其人をかばひてする事が却て其人の不爲めとなる事の比喩。

【引てやる】 助けて飲んでやる。

【ひいふつと】 一、二の三と氣合の息。(加増の五)

【火打が禁物】 「曾根崎心中」のお初が心中に出る時

も火を打つたことある故、懲り／＼する意。
【燧ヶ城】 北陸線今庄驛附近にある木曾義仲の平氏の軍と戦ひし舊趾。

【比叡山とは云々】 兩賢聖の草創ゆゑ、比叡賢叡の山と稱するとの義。

【冷にも熱氣にも】 何の利害の關係もないこと。

【比叡の山云々】 冷えにもぢる。(百合若大臣の二)

【ひをぐくり】 ひぼぐくり、紐でくくり上げる。

【火をとぼす】 櫻の花が咲く形容。(天神記の三)

【火搔】 薪の火を搔き出す具。

【楡垣作り】 船の兩側に楡垣風の垣を組立てたのを云ふ、本来云ふと、楡垣船とは大阪廻船問屋の、七八

石以上の大船の稱。

【非學者論に負けず】 似て非なる學者の暴論には正學者は逆も勝たれぬと云ふ諺。

【非學非道】 無學無道。

【日かげ】 籠居して日影に居るとの意。

【日がこみ】 日數のかゝること。

【東を吾妻云々】 日本武尊が東夷征伐の途、碓氷嶺にて東北を望み、弟橘姫を追懐して「吾が妻はや」と歎

ぜられた、それより東國を吾妻と稱したと云ふ故事、

此の作の本文では橘姫が日本武尊を追懐するやうに

逆用されて居る、従つて此處にも妻の字と夫の字とを混用して居る。(日本武の五)

【東三十三ヶ國】 日本六十餘州の内東三十三國。

【東三條】 東三條左大臣源常。

【東三條兼家】 法興院大臣藤原兼家のこと、右大臣師輔の三子、後に關白となる、一條天皇は兼家の女詮子の出。

【東の山】 京の東山。(蟬丸の三)

【東の横堀】 大阪東横堀川の川岸筋。

【東塞り】 東方位の凶なこと、大將軍星のある方角を凶とする。

【びかしやか】 派手つぽな、浮調子なこと。

【東山殿】 足利義政を指す。

【東山の六文字】 京都東山如意が嶽の半腹に、六の字形の大きな火を點する行事、弘法大師が始めたと傳へる、毎年新曆八月十六日夜行はる大壯觀の京名物。

【ひかせぬ】 不承知を言はせぬ、承け引かせぬこと。

【氷河】 武藏國氷川大明神、祭神素盞鳴命。

【ひがくし】 僻事なりとの意。

【ひがやす】 ひがひす、辱罵なこと。

【日柄傘】 大形の日傘、太夫などに被せかける日傘。

【瞼目】 すが目のこと、やぶにらみ。

【光り過つ】 光りにまがふ。

【光は喰はぬ】 權柄ぶり恐れはせぬ。(山姥の二)

【光り物】 光りつゝ空中を走るもの。(つれづれの三)

【光源もじ云々】 光る源氏の君のこと、もじは女詞の添字。

【比干】 比干は紂王の暴逆を諫めて止まなかつた爲め胸を割かれ殺された人の名。(聖徳太子の二)

【彼岸ざくら】 彼岸頃に早く開く、單瓣淡紅色。

【引扇】 舞の引く手の時の扇づかひ。

【引入】 元服の時に冠を被らせる最重要の役、髻を引入れる故この稱がある、禁中では多くは太政大臣が之れにあたる。

【引入れ】 強ひて仲間に入れる義、元は元服の冠を被らせる人を稱した、此處のは李踏天が無理やりに味方に付けた事を云ふ。(國性爺の二)

【引入大臣】 元服の加冠役の大臣。

【引馬】 飾り立てた馬。

【引白粉】 厚く塗つた白粉のこと。

【引柿する】 柿澁を引く。

【引替へ男】 女性に化けた男子。

【引事揃へ】 故事考證澤山なこと。

【引敷物】 敷きものに同じ。

【引重箱】 膳部に添えて出す重箱。

【引きつけられし云々】 心の變つて向ふに惹きつけられたと云ふを、矢を引くにかけて云ふ。(冷泉節の下)

【引きはせぬ】 後へは引かぬ、どこ迄もやる。

【引日】 遊女が身揚りして店を引き、休んだ日。

【ひきく】 ひいき。

【引舟】 太夫に付き添ふ鹿戀女郎(勤めはせず内證なり)を云ふ、これは扇屋夕霧から始つた慣習で、全盛の余り、先客くへ引舟をやつて置き、自分の行くまで座を持たしたものと云ふ。

【引結び】 結び方の名、女帯の結び方にもある。

【墓目】 鏝の一種、長さ四寸程の木製、五六の孔があり、それに空氣が觸れると、鳴り響くやうに作つた

【飛行通力】 天空を飛行する神通力。

【飛脚宿】 龜屋は大阪十八軒の飛脚宿の一つ。(冥途飛脚の上)

【引渡し】 本膳に盃を三つ添えた膳部。

【非口所宜非心所測】 口で述べられず心で推する所でないとの意、法華經提婆品の句。

【引手数多】 俗に「引つぱりだこ」、古今集「大幣の引手数多になりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」とある。

【引くと思ふな供せよ】 繩を引くのではない、我がお供をするのだとの義。(千匹犬の一)

【比丘尼】 尼姿の賣春婦のこと、念佛講、丸太普請と云ふもその縁語、尙ほ「びくにん」參看。(吉岡染の上)

【びくにん】 比丘尼の訛、淺黄の木綿布子に、龍門の中幅帯を前結にして、黒羽二重の頭がくしに加賀笠と云ふ扮装で、小唄など歌ふて來る、一種の淫賣婦。

【引間】 遠江國濱松の古稱。

【楡隈の岡】 大和國高市郡にある。
 【日暮し】 説教節の大夫日暮八太夫をもちる。(井筒業平の二)
 【日暮は世上の夜明方】 盗賊は夕方から働きに出かける故に云ふ諺。
 【引け】 屈辱のこと。
 【庇恵】 おかけ、庇護。
 【引色】 敗け色。
 【鬚籠】 竹の端を鬚のやうに編み残して編んだ籠。
 【髭切】 髭切の名劍。(山姥の四)
 【ひげ口】 口元にかめしく髭を生やしたひげ口の人々、ひげ面など云ふに同じく、嘲弄の語。
 【髭喰反らし】 上髭を口に食はへたやうに生やし、其端を上の方へ反らすこと。
 【髭籠】 鬚籠に同じ。
 【髭唐人】 唐人の罵倒語。
 【ひけた事】 退けたこと、遅れを取ることを。
 【ひけて見ゆる】 卑怯めきて見へるの略。
 【非行】 非道、道ならぬこと。

【彦山】 豊前豊後筑前の三國に跨る深山、古來怪奇の傳説に富む、三所大権現を祀る。(百合若大臣の四)
 【ひこずる】 小舌咽、小舌咽は、咽喉の上から蔓のやうに垂れ下つた小さな肉、吾妻の咽喉首を引つゝかんだとの意。(壽門松の上)
 【彦火々出見云々】 瓊々杵尊の第三子、彦火々出見尊が海神豊玉彦の女豊玉姫を妃とした故事。(浦島の二)
 【肥後屋】 茶屋ではない、川向ひ即ち道頓堀か日本橋邊の宿屋である。(重井筒の中)
 【非言】 批難する、否む。
 【非想天、非々想天】 三界諸天の内無色界の第四天、非想非々想處天のこと、三界中の最上層にある故有頂天の別稱がある。
 【久方】 天の枕詞なれど、轉じて「光り」にかけても云ふ。
 【久方の雲居云々】 新千載和歌集にのせられたる、「久方の雲居はるかに出づる日の光に勾ふ山ざくらかな」といふ兼好の歌の下五を時鳥に替へた。(つれ

【鬻女】 物賣女。
 【火ざくら】 緋櫻、花の小さひ莖の垂れた櫻、花未開の時は眞紅の色を呈する。
 【緋櫻になすぞ悲し】 焚ひて薪の火にすること、緋は火に通ずるの意。(最明寺殿の下)
 【膝栗毛】 旅行するに乘馬などに由らないこと、徒歩旅行の義。
 【提子の水云々】 提子は酒を入れて盃に注ぐ器、提子の水の湯になることは伊勢物語にある話。(井筒業平の四)
 【久しうて】 年久しく経て、久々での省略語。(關八州繫馬の四)
 【久し辛漬】 驕者久しからずの義。(傾城酒呑の四)
 【飛札】 飛脚便の一書。
 【膝突】 膝に敷く三尺四方の薄べり。
 【膝とも談合】 人と相談するの利益な事を言つた諺、人の居ない場合は我が膝とでも相談する方がよいとの譬。

【膝の皿】 膝頭の眞中にある、皿のやうな骨。
 【膝丸】 髭切と共に源氏重代の寶劍、滿仲この刀で罪人を試し斬つた時、膝を加へて斬れたので、膝丸と名付けたと云ふ名刀。
 【膝も据らぬ】 膝がわな／＼慄ふて落ち着かぬ。
 【久吉】 豊臣秀吉の假名、徳川政府に憚つて云ふ。(三國志の一)
 【菱垣】 竹を菱形に組んで作つた垣。
 【ひしぎ】 力を入れて曲げること。
 【ひじきもの】 鹿尾菜、海草の名、山家集「あま人のいそしくかへるひじきもの云々」の歌による。
 【ひしぐる】 ひしげると同じ、壓碎の義。
 【ひしげて】 拉ぐの俗語、押しつけられて潰れること。
 【ひしこ】 鯉、ひしこ鯛の略。
 【菱袖、平野屋をさやう、肥後芋莖】 平野菟蓐以下凡て房中の戲具、現に存するは肥後芋莖だけである、菱袖に付ては好色伊勢物語に「好色男ありけり下女しげるもの、許に、ひし袖といふ物をやると、思ひあらば六さい宿にもねもしなん、ひしつむぎをば

袖にしつゝも。(重井筒の中)

【菱縫】 菱形に糸を縫ふ。

【秘事は睫毛】 睫は目の側にあつて見えぬ如く、世に秘傳と云ふものも、聞いて見れば容易であるとの諺。

【非情の松も枝垂れて云々】 秦の始皇帝風雨を避けた松の太夫の故事。

【毘沙門立】 仁王立ちなどと同義、嚴めしく突立つこと。

【ひしやりほん」と 眞實眞剣と云つた廓詞。

【毘首翔磨】 工匠を司る神、帝釋天の臣。

【非修非學】 修行の功も學問もないこと。

【聖切る】 佛道の歸依者となること。

【翡翠の大髷】 かはせみの羽のやうな翠り色した澤山な髪の手。

【翡翠の黒髪】 艶やかな黒髪の形容、翡翠はかはせびの翅の色。

【ひすい人心】 狡猾なずるい人の心。

【ひずかし】 心の邪まなこと、古語。

【美精好】 精好織は絹糸で織つた地質良く極めて精美な織物。

【火ぜせり】 火なぶりする。

【備前國光】 鍛冶の名。

【備前摺鉢】 摺鉢は備前の名産、頑丈で強いとの名がある。

【備前の守】 備前焼の焼物から聯想した職名のもちり。(用明天皇の一)

【備前鉢】 備前焼の鉢、質の硬いもの。

【びそのなき】 比疎(櫛の異名)のなき、賤の女の髪飾りのなひことを云ふたものか。

【ひぞり】 すねる。

【乾反】 日に當つて反りかへる、むかつき腹にもちる。

【乾反り大盡】 野暮な大盡を云ふ。

【日高の袖】 美濃國の名所。

【ひたき】 鶴、鳥の名、雀大の、頭灰色、嘴脚は蒼黒、翅と背は灰赤色に黒斑、清らかな聲を持つ。

【火焚の衛士】 御所諸門を警衛する爲め、火を焚ひて夜を守る職を云ふ。詞萃集「御垣守衛士のたく火の

夜は燃え、晝はきえつゝ物をこそ思へ」。

【日長ける】 日脚が高くなる。

【日足して】 日足らず、養育すること。

【直地】 地上のこと。

【非太刀】 非難、欠點を上げて難ずること。

【常陸の律師教範】 荒法師黨の領袖。

【常陸坊海存仙人】 源義經の家臣、江州園城寺の僧、主君と共に北國に落ち衣川の戦から姿を晦まし、生死不明の疑問の人と傳へられて居る、こゝには邪教の本尊が不死歡樂の仙人とあつて、即ち耶蘇教のキリストに擬せられて居る。(鳥原蛙合戦の二)

【常陸帯】 常陸國鹿島の神事に、男女思ふ人の名を書いた布の帯を結び合せ、婚嫁を定める習例がある。

【ひた縫】 縫ひつぶし。

【飛彈掾】 手妻人形の名人山本飛彈掾、ある期間には竹田に劣らぬ全盛を見せたものである、着物のひだにもちる。(重井筒の下)

【額を隠す渡邊の云々】 茨木童子に譬へて額の角を隠すと云ひ、渡邊綱にもちつて渡邊の庵につゞける。

【額垂う】 小剃刀を額垂れと云ふ、たれるは刺ること。

【額に毛抜もあてる者】 一人前の男子を云ふ。

【額に絶えし古毛抜】 老人ゆゑ若者のやうに額に毛抜の用もないこと、くひかねぬは毛抜の縁語。(重井筒の上)

【びたひらなか】 びたは鏝銭のこと、ひらなかは「きなか」即ち寸半で、半銭のこと。

【額綿】 綿帽子のこと。

【ひたふる】 ひたすら。

【ひたや籠】 ひたすらに籠居すること。

【左り扇】 氣樂な事を左り扇扇と云ふにぞらへた洒落。(鳥帽子の四)

【左折】 鳥帽子の前額を左の方へ折りふせたもの、源家は左折を尊び平家は右折を用ひたものである。

【左勝手】 對手方に向つて左の前方、いざと云ふ場合に抜刀に便宜な位置。

【左巴】 左巻の巴の紋所、朝比奈は和田義盛の三男、母は木曾義仲の妾巴御前の女に當る故、強力の流れを汲むとの意。(五人兄弟の三)

【左繩】 左前などと同義、物事の逆になる喩、右繩又は右前と云へば順當を意味するけれど。
 【左に胎つて男子なり】 妊娠の左り孕みは男兒だと云ふ諺がある。
 【左前】 思ふた事の逆に〜と外れること。
 【妻たる君子】 文彩ある君子、論語の「斐然成章」から出る。
 【紙紐天】 金翅鳥に乗り、輪を先導とし、何物をも破碎し得る大威徳を備へた婆羅門の神、永遠の表象たるアナンタ蛇に支へられたる花に倚りかゝり、天地未分の海に浮ぶ神だとも云はれて居る。
 【ひち笠】 袖笠と同じく、袖の代りに脇を上げて雨を防ぐ心。
 【脇壺】 開き戸の框に用ひる壺形の鐵製具。
 【活ちまさる】 濡れまさる。
 【費長房の鶴】 汝南の費長房方術翁と鶴に駕する故事。
 【肘綿】 綿を持つ手を肘にかけて廣げること云ふ。
 【筆架かざり石】 筆かけの飾り石。

【日嗣】 天位を嗣ぎ給ふの意、日嗣の皇子は皇太子のこと。
 【びつくりよ】 嚇かし者よとの意、蒙古(もくり)にもちつての洒落。(百合若大臣の三)
 【引つ術へ】 口に軽く噛んで支へる。
 【筆硯童子】 玉章塚の守護神を南無奇妙筆硯童子とは振つた命名。(三世相の下)
 【ひつこき髪】 二つ折を云々、ひつこき髪は髻のない髪、二つ折は二つ折返へすこと。
 【引裂紙を云々】 紙を引き裂ひてつなぎ合はせ、簾に結び付けてくゝり止める。(烏帽子の二)
 【引捌き】 夜着蒲團など取り亂した様。(基盤太平記)
 【引つ敷】 腰當のこと。(鎌田の下)
 【引抜き】 引き締めて着る。
 【引抜き帯】 一幅の布帛を其儘で、じごひて帯にしたもの、腰帶のこと。
 【未申】 西南の方角。
 【ひつしと】 充ち満ちた良。
 【羊の膈】 羊の膈は曲折甚しいから、險路に譬へる。

【ひつしやり】 電光の閃めき。
 【びつしやりほん】 バタと止ること。
 【ひつしよ形振】 ひつしよなしと形振にかけ、早乙女の愛想のない働作のこと。(女護島の三)
 【ひつすがふて】 相次いで、追つ付ひて、ひつは接頭語。
 【ひつそぎ】 竹の削がれた切尖。
 【逼塞】 本来は徳川時代の罪科の名で、閉門より稍輕き刑を云ひ、遠慮、謹慎、其上に逼塞の刑があつた、それから轉じて、落魄しての佗び住みを云ふやうになつた。
 【備中鉄】 専ら水田に用ひる熊手のやうに齒のあるもの。
 【櫃におさめてかくさんか、價を求めて賣らんか】 論語子罕編に「子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏之諸。求善買一而沽之諸。子曰、沽之哉、沽之哉。我待買者也」とあり、孔子が明君の迎へを待つてゐると云ふ意。
 【ひつばなし】 引つ放しにて、男らしく齒切れのよい

【ひつ腹】 脾胃、横腹のこと。
 【引張切】 両方から引張り合ふて引切ること。
 【引張風】 こゝは両手を廣げた磔の形を喩へて云ふ。(歌念佛の上)
 【匹夫共】 下部ども。
 【匹夫のよう】 匹夫の勇の誤字であらう。(烏帽子の三)
 【匹夫匹婦も志を奪はず】 論語に「三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」、三軍の勇は人に在り、匹夫の志は自己にある、故に奪ひ難しとの意。
 【ひづめ】 引き詰め約、引つ詰め引き締め節約すること。
 【秀卿と中よしの云々】 田原藤太秀卿が龍神の願により三上山の蜈蚣を退治した爲め、龍宮城に歡待されたと傳説。
 【一あくみ】 一と困らせ。
 【一足づつに消えて行く】 道の霜の一足一足に消へて行く、死に一步づつ近付くの心を譬へる。

【人筏】人間を筏のやうに繋ぐこと。
 【人置】女術、遊女奉公の口入屋。
 【人を泣かせし報】偽り多い遊女の身の報ひと云ふこと。(加増の四)
 【人を虫ともはいく】人を虫とも蠅とも思はぬ意にかける。(會稽山の一)
 【人がましき方】相當な資格のある人と云ふこと。
 【一木の松】謠曲「松風」にも、須磨の浦邊に松風村雨の舊蹟として一本松を書ひて居る。(松風村雨の三)
 【一切半や二切】一と座敷や二た座敷、遊里の詞。
 【人來と厭ふ】古今集「梅の花見にこそ來つれ鶯の人來くと厭ひしをる」に據る。(萬年草の中)
 【ひとくく】人來くと鶯の啼聲、古今集の歌詞による。前註參看。
 【一藏あかう】此様な豪遊しては、いかな藏も空虚にならう。(淀鯉の上)
 【一くるめ】一まとめ、一つかみ。
 【人ごと言はゞ筵敷け】嘘をすれば影がさすの類、人の事を言へば屹度來る故、先づ筵敷ひてから嘘さす

るがよいとの意。
 【人事言はゞ目代おけ】人の嘘すれば、其人が來るもの故、まづ番人を置ひて後にせよとの諺、嘘をすれば影がさすと同意。
 【人ごとゆひ】大和葛城山の一言主神にもちる。
 【ひと粉に終ふ】一とまふれにする。
 【一こぶし】一拳、狩などの語、今一と試み、今一番と云ふ義。
 【一しほ】一と染め、染物などの染汁に浸す度数を數へる語。
 【一絞り】ビツンヤリ濡れること。
 【人知れぬ大内山の山守云々】千載「人知れぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」の頼政の歌から採る。(五人兄弟の四)
 【人せり】人競り、群集の競り合ふて混雜すること。
 【人そばへ】體裁、外形だけ眞實らしく見せ、腹の中では左様でもないこと、留人あるを知つてわざと切腹しやうとするなど。
 【人立ち】群集の騒ぎ寄ること。

【人立繁山】人立ちの繁いこと、引船の名にかける。
 (壽門松の上)
 【人種絶やさん】一人も残らず討取つて人間の種を絶たんとの勢。
 【一度は榮へ一度は衰ふ】「東の方」にまで謠曲「杜若」の文句から採る。(淀鯉の下)
 【人魂】燐火を指して、人の魂魄が肉體を去つて行く火の玉だと云ふ俗説から來て居る。
 【副車】從者を乗らさせる車、添へ車のこと、これも雙の縁。(日本武の四)
 【人溜居】人の溜り所、休息所。
 【一つ穴の狐】同じ仲間、同臭味の者、同類と云ふ喻。
 【一つ買】小買ひの意、謙遜した詞。
 【一つ口】同じやうに、一列に。
 【一つ巴】巴の紋の一種。
 【一つ巴の波】巴は浪の形を描ひたもの故云ふ。
 【一つとや云々】數へ唄の形式。(今宮心中の下)
 【一つ流の御祓川】京の御祓川と一つ流れとの義。(繪權三の下)

【一ツなる口桃の酒】一ツなる口は少しは飲める口、桃の酒は、雛男の縁から、一つに對する百々なども含んでの筆拍子。(會根崎心中)
 【一つの利劍云々】謠曲「海士」の詞。(大經師の上)
 【人礫】人を小石のやうに投げる。
 【一つ前】着物の前を一つにして揃えること。
 【一つ身】並巾一丈一尺もので仕立てた着物、一二才の子供の着用。
 【一手】武術の第一歩、初歩。
 【人手間取らせし】手数をかけること。
 【人でも九位でもなし】疎な人間でない者を罵る諺に「人でも杭でもない」とある、杭と九位をもちる。(大織冠の一)
 【一ながれ】一流、旗一つのこと。
 【人なだれ】群集の列が崩れて、すべり墜ちること。
 【人類れつかせ】群り集り押しつ押しされつ集團する。
 【人にこそよれ品にこそ】人もあらうに、品もあらうに、黒人の女が徒歩の者齎せちべんなど、例の野崎參り名物の惡たい口。(女殺の上)

【人に両手の奴有り足の乗物あるが故云々】 両手を召使ひに譬へ兩脚を乗物にたとへ、善走し得ることを云ふ。(十二段の三)

【一尉】 一と幅のこと。

【人の能】 能のやうに多人数が押し付けられた形容。

【人の損ねる事】 人の身上に傷つけること。

【人の父としては慈に止まり】 「大學」の句「爲三人子一止」於孝一爲三人父一止於慈一から出る。

【人は零落の志】 人は落ちぶれた時に特に親切にしてやるものとの諺、「人は落ち目が大事」とも云ふ。

【人は心】 氣は心など云ふに同じ。

【人橋】 橋をかける如く引續き、使者を立てること、多く大急用の場合に用ひる語。(女夫池の一)

【人ばし】 人をば、しは助辭。

【一箸づつあそばせ】 ゆるりと一箸づつ楽しんで賞玩あそばせと、敵を嘲笑した詞。(用明天皇の五)

【人は素性】 人間は血筋家柄こそ大切なれとの義。

【一とふり振つて】 槍持奴の尻を振る癖をとる。(宵庚申の上)

【一重も飾れど】 衣服一枚も着飾れど。(山姥の一)

【人目の能】 人目に氣取られぬやうに袖垣すること。

【人目よぐ間】 人目を避くる隙。

【ひともし】 葱のこと、婦人用語。

【一本薄刈り残す云々】 兩刀のうち一本は賣り代し、一本だけが腰に淋しく残つてゐること。(鎗權三の下)

【一本薄穂に出で】 群を抜いて頭角を現はすこと。

【ひとよ重ねし妻琴云々】 矢矧の長者の家で牛若の笛と浮瑠璃姫の琴と合はせ、其一夜を契つたこと、「十二段」にある事柄。(冷泉節の下)

【一節切】 笛の名、尺八に似て稍短し、竹の一節にて作りし故名付けたもの。

【一夜に變る淵瀬云々】 古今「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬となる」から出る。

【人呼ぶ片手の袖の下云々】 門に出て通行の旅客を呼びながら片手間に苧を續んで内職することを云ふ。(丹波與作の中)

【獨り打つ鼓】 孤立の義。

【一人腹】 一人腹を立てる。

【獨武者】 源頼光の臣平井保昌を四天王に對して獨武者と云ふ、吾妻を之に見立てたもの。(淀鯉の下)

【獨り物に狂ふに似たり】 「狂人も一人は狂はぬ」の諺から出る、相手なしに只一人で暴れるやうなものとの義。

【一人も一人がらなれや】 一人も一人本當の一人子との義。

【雛男】 雛様のやうな美男子。

【ひながた】 烏帽子の前額の皺。

【日向ぼこ】 日向に出て暖まること。

【火繩】 煙草の火に用ひる、當時芝居での賣物の一つ。(二枚繪の上)

【美男草】 美男かづら、文字上の美稱により、只美男を草に擬して云ふたまで。(鎗の權三の上)

【美男石】 美男かづらの油の稱、伽羅油が出来るまでは大に用ひられた美髪油である。

【非人敵討】 春藤治良右衛門兄弟が非人となつて敵を付けねらうと云ふ有名な歌舞伎の外題。

【非人の女房には猶ならぬ】 先に治兵衛が乞食非人となつてもと云ふに對しての皮肉な反語。(天網島の中)

【千ぬ思ひ】 涙に濕つて乾かぬ思ひ。

【ひねくろし】 ませて見へる、じみに見へる。

【捻り餅】 子供がわんぱくする時、懲しめの爲め尻とか腕とかを捻ることを、俗に捻り餅と云ふ。

【ひねる者】 こゝのは取組む者の義。(天智の五)

【非の入りぬ程】 批難を受けぬ程度。

【非の入りさうな】 批難を打たれさうな。

【樋の上の切荒布】 樋の上とは道頓堀清津橋西詰の地で、名高ひ昆布屋があつた、切荒布もあつたに違ひない、京都では大阪の土産として今でも昆布を珍重する。(女腹切の上)

【丙午】 丙午に生れた女は男を殺すと云ふ俗説がある。

【日の岡】 大津から京の粟田口へ越へる峠。

【籠の川上】 出雲國籠の川の上流。

【日の鳥】 金鳥玉兔とて日と月を云ふ、事文類聚に「張

衝が靈憲に、日は太陽の精なり、積で鳥の象をなす、鳥は陽の類なり、月は陰精の宗なり、積で獸の象を成す、兎は陰の類なり云々。
 【櫓の木作り】の名作より云々。單に材料の高下によつて内容の如何を問はず其出來榮の可否を評すること。(井筒業平の三)
 【日野絹】 上野國日野から出る極上質の絹。
 【脾の臟云々】 脾の臟の強い者は大聲である。
 【火斗】 十能のこと。
 【火の住家】 三界の火宅など云ひ、娑婆、現世の稱。
 【火の玉】 こゝのは海女千鳥の亡魂を云ふ。(女護鳥の四)
 【日野の中納言資朝卿】 藤原氏、後醍醐天皇に親近し、北條高時の叛に、藤原俊基等と恢復を謀つたが、破れて佐渡に流され、七年の後に殺された。(用文章の一)
 【緋の袴】 赤前垂を洒落て云ふ。(反魂香の中)
 【丙午の女は夫に崇る】 俗説に、丙午に生れた女は男を殺すと云ふことがある。

【繩の俎板木】 繩の前面にある、杭と杭との上に架けた横木。
 【日の御座の寶劍】 晝御座の寶劍、晝御座とは清涼殿に天皇の晝まします平敷の御座で、寶劍は其晝御座に置かれる御劍。
 【日のもく内裏】 萬歳唄、今は「日の本内裏」と歌ふてある。(大經師の下)
 【鶴櫻】 ひは鳥の羽色をした櫻。
 【檜皮屋】 檜皮を以て屋根を葺く工人。
 【火鉢の脚】 押へ付けられたやうな顔の譬、目鼻を一つに云々の縁から火鉢の脚と云ふた。(浦島の一)
 【火鉢の尉】 火鉢の炭火が白ふ灰となつて行くのを云ふ、白髮の尉に擬して云ふたもの。
 【ひはづ者】 纖弱な者、かよわい者。
 【火花】 刀と刀と打ち合ひ火を散らすこと、花の散るやうなとの喩。
 【杭把の左大臣】 關白基經の三子藤原仲平、時平、忠平を合せて三平と稱した、基經の家を杭把殿と稱したを、後仲平が領有した故此名がある。

【脾腹】 横腹。
 【雲雀毛】 黄と白との斑色。
 【雲雀の床】 雲雀の巢。
 【雲雀のやうなる腕先】 雲雀の脚は、細くて長い故に言ふ、所謂「蚊の脚」と同様、瘦骨の親爺に喩へて云ふ。(天神記の三)
 【雲雀骨】 瘦せ骨、雲雀の脚の細いのに譬へる。
 【雲雀山】 大和國宇多郡宇賀志村の東、中將姫閑居の地と傳ふ、淨瑠璃歌舞伎などにて名高い。
 【ひゞき】 ひゞの事、茶碗などの疵が、割れやうとするところ。
 【響の灘】 長門國の西北、玄界灘に連る。
 【胼凍瘡】 胼は寒さに手足の皮膚が細かく龜裂すること、凍瘡は同じくたゞれて瘡となるもの。
 【ひゝながた】 雛形。
 【日文千文】 日々に千通も文を送ると云ふこと。
 【妣母】 亡母。
 【隙白く】 戸や障子のすき間が白んで見へる。
 【日ませ〜のお鷹狩】 隔日毎に放鷹山獵して武を練

【日待】 日祭、日の出を待つて祭ること、十五日が定日。
 【火廻し】 遊戯の名、紙燭に火を付け、頭に火の字の付く物の名を云ひ、順々に廻り、遂に言ひつまつて紙燭の火の消へた者を負とする、火わたし、ひもじ草とも云ふた。
 【火水を飛せて】 水火を闘はす激戦の形容。
 【秘密の鏡】 當時傳道の方便として用ひたと云ふ「三世鏡」の事か、三世鏡は所謂三世の姿を見ることが出来ること云ふ仕懸けのある不思議の鏡。
 【緋無垢子すてふ云々】 新古今「衣子すてふ天の香久山」のもぢり、紅葉の赤きを緋無垢に譬へて云ふ。(天智の四)
 【氷室の谷】 山城愛宕郡氷室山の邊。
 【氷室の社】 氷室の跡は大和に三十幾箇所あると云ふ、氷室の社の跡は奈良飛火野北向荒神の西にある。
 【氷室守】 氷室の番人、氷室は冬の氷を夏まで貯蔵する所。

【氷室山】 笈の種の縁、山は愛宕郡にある。(用文章の二)

【姫瓜】 蔓草、瓜の一種、こゝのは美しい子の稱。(兼好法師の中)

【姫貝】 貽貝(いがひ)のこと、肉は食用とし、いがひの酢など作る。

【姫君】 こゝはお鳥を指す。(二枚繪の上)

【姫胡桃】 胡桃の一種、山雀の好物、山雀の使者に寄り来る姫たちを喻へて云ふ。(娥の一)

【姫島】 豊後國北浦の東方海中にある。

【姫の白山】 加賀國白山大権現の祭神は、姫神伊弉册尊ゆゑ云ふ。

【姫始め】 様を食べせめる日とも、又俗に新年始めて同表する日とも云ふ。

【眉目】 面目、手柄。

【火も仕舞へ】 火を落して寝仕度すること。

【檜物や】 檜の薄板其他などで作る曲げ物屋のこと。

【火屋】 火葬場。

【兵衛の尉、左衛門の尉】 兵衛は兵衛府、禁裏の宮門

以外を警衛の役、左衛門は衛門府の内に屬し、禁裏を警護し諸門の出入を管する役、尉は判官にて、古官名四部官の内、次官の次、主典の上。

【兵庫鎖】 古、兵衛府に付屬した兵庫寮で製作した鎖、後に一般に良好品を總稱して云ふた、刀の帯取に用いたもの。

【拍子木の調子金にして云々】 夜廻りの拍子木の「木」と九つ時(今の午後十二時)の調子の「金」とを比べ、金が木に尅つ事を云ふたものか。(葦盤太平記)

【兵衛博奕の逸遊】 公家の身分には不相應な兵衛や賭博の道樂と云ふこと。(松風村雨の一)

【兵杖の家】 武器弓箭にたづさわる家、武士の家。

【平調】 秋調と同じく樂の律の調子を云ふ。

【平等大慧】 一切衆生を平等に視る諸佛の智慧。

【ひやう〜】 樂器のひびき。

【颯々】 疾風の吹きささぶ貝。

【びやう〜わん〜】 犬の泣き聲。

【ひやうまづいたる】 病魔付ひたるにて、本心ではない病ひ神が憑いて言はするとの義。

【剽慢付き】 剽悍傲慢ぶり。

【眇目】 片目のこと。

【評文】 衣服の紋様の中を種々の色で彩つたもの。

【漂漾】 たゞよう。

【ひやうり】 拍子(ひやうし)の訛。

【百和龍王右衛門王左衛門王】 龍王及び其左右王の名。

【百貫に編笠云々】 「百貫の抵當に編笠一蓋」の諺を轉用して、表具だけでも百貫の値のものを、編笠一蓋の代に賣り拂ふことを云ふ。(博多の中)

【百官百寮】 朝廷に仕へる諸司、諸役人。

【百貫町】 瓦町の堺筋(今の二丁目)西を云ふ、古名。

【百間長屋】 多人數が住む棟續きの長家。

【百間堀】 大阪西區江の子島の東側を流れる川。

【百三十六地獄】 根本地獄の八大地獄と、その近邊地獄百二十八増とを合せて總計百三十六地獄が成立する。

【白求】 草の名、根は食用とし、乾かし蒸らし蚊遣等に用ひる、誓文の詞白癩にもちる。(薩摩歌の上)

【百節の骨頭云々】 以上諸曲「歌占」の文の應用。(女護

鳥の四)

【白道】 二河白道の喩にあること別に註あり、淨土往生を願ふ清淨な信仰心の喩。

【白檀磨の太刀の鞘】 白檀は印度等に産し、香料などに用ひる植物、それを磨き上げた刀の鞘を云ふ、流石に唐土戻りのハイカラの持物。(いろはの二)

【百丈の木に登つて一丈の枝より落つ】 大事は小事より破るゝの喩を云ふ、徒然草にある、人を木に上らせ、下りる時軒の高さ頃になつて注意した條の借用。(葦盤太平記)

【白衲】 白い僧衣。

【百二十末社】 俗に内宮八十外宮四十の末社があると稱する。

【百二十里の相の宿】 江戸と難波の中間にある、遠江國濱松の宿を云ふ、此一酌は八百屋半兵衛が故郷濱松へ、亡父の十七回忌に歸り居る處を描ひてゐる。(宵庚申の上)

【百二十里の名取ども】 東海道品川から京まで百二十五里と稱する、即ち海道で著名な田女であるとの義。

(丹波與作の中)

【百日法華】 他宗の者が一時祈願の爲に日蓮宗になるを稱して云ふ。

【百人一首】 定家の撰になれる、古今百名家の歌一首づつを集めた歌書。

【百の口を抜く】 百文錢は普通九十六文錢で通用して居た、其一錢の中から更に九文十文づつ、素知らぬ顔で抜きとつて、祝儀にやれと云ふこと。(萬年草の中)

【百八】 數珠の顆の數。

【百八の玉の緒】 數珠は百八煩惱になぞらへ、百八顆の珠から成る故に云ふ、珠を玉の緒にかける。

【百八の菩提樹】 菩提樹の實で作つた數珠のこと。

【百八煩惱】 吾人の心を惱亂する煩惱が百八種あると云ふ佛者の計數。

【百八煩惱の雲衝きて】 百八煩惱は鐘の縁、その雲間を錫杖衝ひて出で立つ行者の行粧を云ふ。(枕言葉の四)

【百八ぼんのくぼ】 百八煩惱にかけて、ぼんのくぼ

(襟首の四所)と云ふ。(會稽山の一)

【びやくく】 白癩の略、自誓の詞、別に註せり。

【百福莊嚴】 三十二相を具すること、その一相好を得るにも百福を積まねばならぬ、即ち莊嚴の相を云ふたもの。

【百様知つて一様知らず】 百を知る知者にも、一を知らぬ事もあるとの喩。

【びやくらいこくらしい】 白癩黒癩、神明にかけて自誓する時の詞、決して偽りでない、たとへ恐ろしい癩病になるとも云つた義。

【百里來た道は百里歸る】 己に出るものは己に還るの諺と同じ。

【百兩あし】 百兩に足が届いてゐる、たしかに百兩はかゝつてゐるとの意。

【百連】 多數に連なること。

【百鍊の雷】 激烈な雷の形容。

【白虎歴切風】 白虎の五體節々食ひ切るに譬へ、風疾骨に入つて激痛する病症。

【ひやつひやひイ】 酒の冷やにかけて笛の音にもち

る、尙ほ以下のらうく、ひららうく云々も同じく笛の調。(女夫池の四)

【火屋へ丹足】 もう半身は火葬場の厄介になつて居る程な余命の少ない老爺と云ふ意、棺桶に片足突つ込んで居るの諺と同義。

【ひやりらり】 笛の音。

【山丹】 姫百合の異名。

【火ようじ】 「火の用心」の約語。

【比翼煙管】 雁首は一つで吸口の二つある煙管、元祿頃の通な流行品。

【比翼の誓紙】 誓紙は前言ふ如き所謂熊野牛王の裏面へ、約束の事柄を認めるので、起誓は此紙に限つたものとされて居た、比翼と云ふは男女の比翼の契りを云ふたもの、今はそれに引き替へて絶縁の天罰起請文を書くこととなつたを云ふ。(天網島の中)

【ひよくと鳴くは鴨】 「松の葉」三卷の二上り歌

「ひよくと鳴くはひよ鳥、小池に棲むは鴛鴦、鴛鴦のしかもやもめにおふやの留守もり」を採る。

【ひよる酔】 ほろ酔。

【ひよんな事】 途方もない事、とんでもない事。

【ひよんな物】 變なもの、奇態なもの。

【ひら】 平梳のこと、ひらの物との義。

【平】 嘉平次の粹詞。(生玉の上)

【ひらい】 相手撰ばず角力ふこと、相撲の語。

【平泉】 陸中國西盤井郡平泉、平泉城は清衡基衡秀衡三代の居城。

【平泉の文珠寶壽】 陸中國の名刀匠、文壽を云ふ、髮切、膝丸の名刀を鍛ふた人。

【平井一人武者清氏】 頼光四天王の外の一人武者平井保昌の子と作られてある。(五人男の一)

【尾籠至極】 無禮、馬鹿などの意、もとはをこと云ふ語に此文字を當てたのを、音讀したものだとも言ふ。

【天膏絨】 絹織物、西班牙語の轉化したものと云ふ。

【平緒】 東帯の時に袍上に垂れる平組の緒。

【牧岡の宮】 河内國河内郡牧岡村鎮座、天兒屋根命外三神を祀る、今、官幣大社。

【牧方】 今の牧方町、京街道の一驛、昔は牧場があつて頼朝の名馬生食も此地の産と云ふ。

【開き扇、三本傘、雪折竹】 孰れも紋所の名。
 【ひらぎの長】 これは新町茨木屋幸齊の事なれど假名を用ひて居る。(傾城酒呑の三)
 【牧聞】 薩州一の宮牧聞神社。
 【開く日】 曆中段十二直のうち。
 【びらくら】 「かれこれ」この件彼の件」など云ふ俗語、此處では、諸所で明けた借金の穴と云つた意。(二枚繪の下)
 【平様】 頼平の平、廓風の通語を用ひる。(關八州繫馬の三)
 【平更】 ひたすら、平に。
 【ひらたくたい】 平つたい、じやらくした。
 【平樽】 手の付いてない平たい桶に似た樽。
 【ひらづけ】 横付けのこと。
 【平包】 風呂敷包。
 【ひら強い】 平強いは無理押しに強ひること。
 【平でも壺でも】 平は平大壺とおひらとにかける、お平は平たき碗の稱、壺とは普通の壺ではなく、主に本膳の時に用ふる汁物を盛る小高い器で、共に膳部

用の器具、それで「此方仕度よう御座る」御馳走には及ばぬと云つたのである。(夕霧の上)
 【平野】 大阪から東南二里の小邑、大念佛寺のある地。
 【平野】 京葛野郡、北野天満宮の西方、平野社あり。
 【平野蒟蒻】 攝津平野の産物、美味で大阪によく賣れた。
 【平野町大神宮】 大阪内平野町にある、二十二社詣の二十一番。(卯月の上)
 【平張】 天幕のこと、平たく天井に張る日被ひ幕。
 【びらくら】 髪がびらくらゝゝ亂れることを云ふ。
 【平鬻を短冊】 平元結を臨時に短冊の代用にする。(井筒業平の二)
 【ひらくく】 平らか、たひらになること。
 【ひらり紙花七九寸】 紙花は延べ紙(七寸に九寸の寸法)のこと、客が祝儀を出すに、現金を包むなど野暮な事で、其時は延紙を捻つて、ひらりと投つて與へたものである、今でも空虚の祝儀袋だけを渡して置ひて、後に現金と引替へる風が残つて居る、商業の大阪人は、此處にも一種の手形法を利用して居る。

【びらりしやらり】 媚めひた良。
 【びらりしやらり】 こゝのは情緒的な筆の運びの形容。(山姥の二)
 【びらり帽子】 おもり帽子の如く錘をいれず、被りてヒラ／＼と軽く翻へる帽子を云ふ、主として笠の下に被つた女用のもの。
 【平緒】 東帯の時に腰より袴の上へかけて垂れる緒、長さ六尺余幅三寸ほどのもの。
 【毘嵐婆風】 大疾風、萬物を破壊して進む迅猛風。
 【びり】 ちつべい、小めらう、子供を罵る語。
 【飛龍權現】 紀州那智に祭る神。
 【毗盧】 毗盧遮那佛の略稱、光明遍照の義、密教では大日如來を稱して居る、悟れば即ち大日如來の法身佛と云ふこと。
 【蛭が小島】 伊豆國三島の南二里。
 【蛭金】 板金のこと。
 【畫筒】 畫の辨當。
 【蛭子の神】 伊井諾伊井冊兩神の御子、俗に三才にして脚猶ほ立たず、故に天濱磯樟船に載せ海上に流し

た云々とある。
 【毘盧舍那、徧一切處】 共に光明遍照の義。
 【畫當場】 畫の狩場の現場。
 【蛭巻】 蛭の巻き付ひたやうな形に、棒の柄を巻き付けること。
 【領巾塵山】 肥前國唐津の東南の山、大伴佐手彦が遣唐使として渡航するを悲しんだ妻の佐用姫が、山頭に立つて領巾(婦人の項に掛ける裝飾の布帛)を振りつゝ石と化したと云ふ故事。
 【廣い國】 十萬億土のこと。
 【ひろがず】 行はず、爲さず、人を罵つての語。
 【拾ひ首】 戦場に落ちてある敵の首を拾ひ取ること。
 【びろく】 べろく、べちやくすること。
 【びろく】 きよろくと意地汚なく付け廻ること。
 【廣ふ狭ふする】 江戸大阪を跨にかけて自由自在に取引すること。(冥途飛脚の上)
 【廣矛】 丈の長い矛。
 【ひろめて】 披露して。
 【彌鹿の子】 ヒワ茶色の鹿の子。

【岷江の水】 船を泛ぶ云々】 岷江は支那四川省と甘肅省の境岷山から流るゝ川、小水も後には大江となる、下賤より身を起し後に榮達した豊公を指して云ふ。(三國志の三)

【鏡】 鏡を見る小鏡、懐中鏡の一種。

【髪かき撫てぞ云々】 様子ぶつて髪など掻きつける貞

を云ふ。(世繼の二)

【貧家には古人疎し】 貧乏すれば舊知の人も遠ざかる

との意。

【頻迦の飼雛】 やがて名鳥となる雛兒と云ふこと。

【頻伽の聲】 頻伽は極樂淨土に棲む美音の麗鳥、官女

達の凱歌の聲に譬へる。

【頻伽は卵の内にて云々】 頻伽は美音の鳥、大論「歌

羅頻伽鳥、在二穀中一、未レ發レ聲、已能勝三諸鳥一

勝れた人は生れながらにして其兆あらはるゝと云ふ

喩。

【髮櫛】 女の髮毛を掻き上げる、長く齷の疎ひ櫛。

【備後橋】 茶瓶にかける、大阪西横堀彌生橋の古稱。

(今宮心中の上)

【びんざさら】 拍板、小板を數十枚重ね合せ、其一端を皮又は糸で綴り、板と板とを打つて音を出す、往古は田樂などに用ひられたもの、後には歌念佛や相の山や説教節等にも使用した。

【便船】 他の船に便つて乗る。

【ひんだ】 貧太、貧乏人のこと。

【ひんづ】 有り余る、有つて用のない命と云ふこと、

大阪の方言。

【髪づら】 みづらの音便、上古男子の髮の風、頂髮を

左右に分けて結ふたもの。

【髪結ふ】 みづらに結ふ。

【ひんづる】 へつるの訛、へぎとること、行平を取ら

れた事を餓鬼が食物の上前をはね取られたことに譬

へる。(松風村雨の三)

【ひんなり】 しなやか、すんなり。

【頻婆果】 頻婆樹の果實、眞紅なるより唇の色に譬へ

る。

【貧は諸道の妨げ】 貧乏は萬事萬端に障害となるとの

諺。

【舞繁として三度顧る】 勞を厭はず三たびまで顧み

訪ふて名士を得んと努むること、蜀の玄德が草廬に

孔明を訪ふた故事による、杜甫の蜀相の詩に「三顧

頻繁天下計」とある。(川中島の二)

【びんび酒】 ちび〜酒。

【鬢水】 油の無い時代には、髮を撫でつけるに美男蔓

の水を用ひた、其れを鬢水と云ふ。

【鬢水入】 鬢や髮を撫で付ける時に使ふ水油などの容

器、形が丁度小判に似てゐる、陶器製、眞鍮製塗物

製などある。

【ひんよゑい】 木造のかけ聲、或ははんよゑいの過り

かとも云ふ。

【府】國府のこと、國衙の所在。

【怖異軍陣中、念被觀音力】戰陣中の怖れある場合に、觀音を念ずると、敵退くと云ふ意、普門品中の語、是れは兄弟敵討の成功を祈つたもの。(會稽山の四)

【吹簫吹く】吹簫は銀治の火をおこす具、猛虎の凄まじい大息吐息の形容。

【ぶい〜共】ぶい〜、咳く虫けら共、罵倒語。

【ふう男】風流男の約。

【楓葉良訓信女、露秋禪定門】お千代と半兵衛の戒名、但し一書によると、お千代のは目丘靈訓信女、半兵衛のは崇禪定門信士とある。(宵庚申の下)

【風月の情後世の道】文學と宗教、風流と教訓。

【福建省】支那東南の一省、古揚州の地。

【風御】風を御する、風に乘ずること。

【風車】本書挿圖に由ると、大きな四輪付きで空を翔ける車。(賢女手習の五)

【風俗】風俗歌にて、國々の人情風俗を詠へる神樂歌の一種。

【風塵にかけ】身を物の數とも思はぬこと。

【ふう〜】放埒無頼者のこと。

【夫婦が中の精次第】夫婦の出精しだいで子孫繁昌するとのしやれ詞。

【夫婦の中に何の面目】夫婦間に、面目の體面のと、形式がましいとの義。(女腹切の下)

【夫婦が夫婦云々】鶴國夫婦と府生夫婦を指す。(浦島の子)

【風流陣】玄宗皇帝が豪華の逸事、宮女百余人を兩陣に分け、手に旗幟を振つて闘はせ、敗軍の方は盃に處せられる、これを風流陣と呼んだ。

【風輪火輪】風神と火の神。

【風輪火輪】輪車の如く風や焔の旋廻すること。

【ふうわり、ふわ〜】雲に駕し行く形容。

【ふうん】不平顔して嘯く良。

【武衛】禁裏兵衛の役を唐名で武衛と云ふ、斯波は左衛門佐である。(雪女の上)

【斧鉞を給はる】征討主將の權威を表する爲に給はるもの。

【笛に寄る鹿火に入る虫】好んで死地に寄り來ると云ふ譬。(川中島の四)

【吭の針】喉に針をする、薄氷を踏む危ふきに喩へる。

【笛のひしぎ】笛の音のけたままししい響。

【無鹽】鹽氣なし、新鮮なこと。

【不孝の子は恵ある父を養はず】不孝の子は慈恵ある親を自分と逐ひ拂ふとの意。(川中島の四)

【不孝の塗上げ】不孝の上の不孝の上塗り。

【深草山】山城國紀伊郡の東邊。

【不覺人】不覺悟な人。

【深い事こそ】別に大して込み入つた事でもないこと。

【深田に馬を云々】謡曲「兼平」の文句「深田に馬を駈落し、ひけどもあがらず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果云々」

【不合點】合點のない、呑み込みの悪い。

【深見草】牡丹の異名。

【ふかみどり屋】料亭か、色里の菓子屋か櫛屋かの名か、掴みどりの縁語。(女腹切の中)

【深養父】深敷にかける、深養父は古今集に見ゆる歌人。(鎗権三の下)

【不堪】未熟不鍛練。

【龜雁】けりと雁。

【豐干禪師が四睡の虎】豐干が寒山、拾得と、虎と共に睡つた所謂四睡の故事、此畫を四睡圖と稱して有名なもの。

【葺不合命】天津日高彦火火出見尊の御子、彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊のこと、大統を繼承し、玉依姫を妃とし、四皇子を生み給ふ。

【ふき合すの尊】神武天皇の父神、うがやふきあへずの尊にもちる。(弘徽殿の五)

【吹返し】兜の眉庇の左右に添ふて出た耳のやうなもの。

【武騎將軍】 武官のこと。

【吹鬚】 突き出た鬚の稱。

【葺き馴れし】 節句には蓬蒿蒲など一束ねにして屋根に置くを葺くと云ふ、例年の通り葺き馴れしとの事。
(女殺の上)

【吹貫】 吹流しのこと、旗の類。

【葺残し】 板庇の屋根を葺き残して月の漏るゝに任せ、板びさし、やさし、葺さしと、しを重ねる。(天神記の四)

【落の姑】 落の臺の立つたのを云ふ。

【吹鬚】 鬚の毛が風に吹かれること。

【不輕菩薩】 常不輕菩薩の略、此菩薩は常に僧俗を見れば、直に禮拜し讚嘆して曰く、我、汝等を敬ふて取て輕んぜず、汝等當に菩薩の道を行じて皆佛と成らむと、人々は之れを却て侮辱の意に取り、杖瓦等を以て打擲すると、彼は逃れて又前言を繰返へして止まなかつたと云ふ。

【吹寄藤】 藤を二所づつ押寄せて巻ひたもの。

【不空羅索】 七觀音の一、三面八臂其他諸種類がある、

不空は心願不空の義、羅索は彼此折縛して成就せしめる義、これを本尊に祈禱を修する。

【不具を廢にす】 不具なのを奇貨とすること。(吉岡染の上)

【服紗】 絹などで作った小形の風呂敷の類。

【服紗の衣】 薄絹の着衣。(歌念佛の中)

【帛紗物】 帛紗包みの品物。

【帛紗物】 絹布などで作った風呂敷やうのもの。

【服事】 従ひ仕へること。

【福州の城】 福建省福州府の城。

【福島】 上野國境碓氷峠に近い地。

【福島】 大阪堂島の北、有名な雀鮮屋があつた。(今宮心中の上)

【福壽海無量】 福と壽との徳を得ること大海の量りなきとの法華經普門品の語。(慈眼視衆生福壽海無量)

【福德緣起】 福德を得られる由來記と云ふこと。(博多の上)

【福德の三方論議】 福德の三年目と云ふ諺にかけ、三方から身受けの目出度い論争に行き當ることを云

【ふ。(壽門松の下)】

【奉供の生飯】 散飯とも云ひ、鬼神又は餓鬼に供施する爲め、日常供膳の飯の上部から取りのけた生飯。

【不垢不淨不増不減】 無垢淨不増減、眞如の義。

【覆盆酒】 おらんだいちごの酒。

【含轡】 轡の一種、くゞみ轡のこと、普通のと違つて桶金に水附をつけたもの。

【ふくよかさ】 脹れたること。

【ふくら雀】 雀の子、雀の子は親よりもふくられて居る故名付ける。

【覆輪かける】 更に倍加するの意、俗にしんにうかけると云ふと同義。

【茯苓】 立腹にかける、薬用植物の名。(薩摩歌の上)

【袋子】 胎兒の薄い皮膚で包まれて生れるもの。

【袋鞘】 鎗鞘に袋を被せたもの。

【梟松桂の枝に啼き云々】 白氏文集の凶宅詩から採る、荒殘の廢趾の様を云ふ。「梟鳴ニ松桂枝」、狐隠ニ

蘭菊叢一」。

【袋乳】 袋のやうにふくらんだ乳。

【符契】 割符のこと。

【武家天下を治むる云々】 頼朝が鎌倉に覇府を開いて始めて武家政治の範を垂れたこと。(佐々木の三)

【吹けや松風云々】 「吹けや川風」の流行唄の作り替。

【普賢延命の法】 普賢延命菩薩を本尊とする祈禱法。

【普賢象】 普賢櫻のこと、普賢菩薩の乗れる象に喩へ、鼻(花)から齒(葉)が出ると云ふ意から名付ける。

【分限者の下屋敷】 金持の別荘、往時から岡崎は、京の郊外での靜閑地で、文人詩客の隱宅や、富豪の別荘地になつて居た。(大經師の中)

【普賢力】 普賢菩薩の加護力。

【不巧】 不巧者、察しの悪いこと。

【不巧】 巧者でない、拙いこと。

【扶桑】 日本國中。

【塞がで通す振袖】 名のみ妻で、まだ振袖も脇も詰めぬとの意。(蟬丸の一)

【塞りの此國へ】 八方塞りのお尋ね者故云ふ。

【房前の余り】 房前は藤原不比等の男の名、又、讃州志度浦の別稱、余りは海士にかける。(大織冠の三)

【無沙汰】 不都合、不取締。

【不作余食】 余分の食をしないこと、翻譯名義集に、食四、(一)乞食(二)不_レ作_二余食_一法(三)一座(四)一揃とある。

【巫山の神女雲となり】 楚の襄王が夢中に巫山の神女と契つた故事、その時神女去るに臨んで曰く、妾は巫山の陽、高丘の岨にあり、且に朝雲となり暮に行雨となる云々。

【伏殿の兵】 物見の伏兵、斥候。

【富士鹿の子】 富士の雪の鹿の子斑を云ふ、以下鹿の子盡し。(千匹犬の四)

【父子兄弟の間は善を責めず】 肉身の間には善を責め

求むべきではない、善を強ひれば必ず心が離れ一大不祥事を惹き起すと云ふ意、孟子離婁下編、父子責_レ善賊_レ恩之_レ大者」から出る、頼朝義経兄弟の上を指して云ふたもの。(大磯虎の一)

【富士権現】 富士浅間大権現。

【富士三里】 富士山形の灸穴、上に一點下に二點、疝氣の治方。

【伏したる魚】 隠見して横はる魚。

【伏漬】 重石を付けて水底に沈めること。

【不嫉は守節の善行云々】 嫉妬せぬのは貞節の婦で善行であるが、嫉妬深いのは夫に背く悪行であると、婦人の嫉妬の慎む可き訓戒の語、本編の八重姫が頼朝朝日の前の中を嫉んで大事に至ることを諷して序詞とした。(伊豆日記の一)

【拵繩目の鏡】 白淺黄紺色の筋を、つゞら折に染めた革を細く切つたもの、即ち手綱型の模様で緘した鏡。

【臥惱みの抱きかゝへ】 病氣の介抱。

【富士野】 富士の裾野。

【富士の煙の上もなき】 新古今「富士の根の煙も猶ぞ立昇る上なきものは思ひなりけり」から採る。

【富士の人穴】 富士山麓にある、深き知れずと稱せらるゝ巖穴。

【富士の人穴に入つて云々】 仁田忠常が富士の人穴を探り異境に到つた物語を指す。(會稽山の四)

【節譜】 淨瑠璃節その他語り物の節付けのこと。

【武士は道具を伏編笠】 道具を伏すを伏編笠を被るにかける、道具を伏すとは、鎗を立てないこと、これは廓内では禁制になつて居た、伏編笠は、眉深く前に伏せて被た編笠。

【富士見西行】 後向きの僧が富士山を眺め居る圖。(兼好法師の上)

【伏見坂】 大阪道頓堀芝居町の南裏町の色里伏見坂町を云ふ。

【伏見の雪に凍え云々】 常盤が三人の子を連れて伏見の里にて雪中に難澁した事、「源氏烏帽子折」第二段にも描かれてある。(孕常盤の一)

【伏見堀】 今の大阪西區京町堀のこと。

【不じゃう】 不肖、不運と同義。

【鳧鐘】 小さな釣鐘のこと。

【不祥ながら】 不吉なこと、さがなきことながら。

【不取正覺】 正覺を取らぬこと、即ち成佛せぬ義。

【膚受の愬】 肌膚に直接受けるやうに痛切な愬、愬は訴へのこと、論語の顔淵編所記。

【巫女廟の花】 和漢朗詠集に「巫女廟花紅_レ似_レ紅」の

句がある、巫女廟は巫山の神女を祀つた廟、廟前の花を即ち美人によそへて云ふた。

【不眞意】 眞實でないこと、虚言のこと。

【ふじん城】 婦人城、晋の朱徐の母、軍勢を引受け多くの女を士卒とし籠城したのを、世婦人城と稱したと云ふ故事。

【ふす】 不好き、嫌ひ。(天鼓の一)

【伏猪の床】 刈藻に臥す猪の床、夫木「奥山のふす猪の床やあれぬらむ刈藻もたへぬ雪のしたばは」

【ふすべ】 煙すこと、姑が嫁いぢりを、ふすべると稱する、こゝは繼母が養子をいぢめることに云ふ。

【ふすべられ】 煙べる、俗に「けむたがられる」の義。

【袞隠れ】 夜具の内、かいまきの内のこと。

【風情餘つて云々】 人情にも通じ、所謂文と武を兼ねること。(大磯虎の一)

【補せらる】 職に任せらる。

【浮線綾】 浮き織の綾地。

【不足の腹】 不平不満の切腹。

【札】 祈願などのお札を云ふ。(孕常盤の三)

【舞臺】こゝは清水寺の丘上から掛け出した物見の舞臺。(兼好法師の上)
 【譜代舊蹟】代々の傳習。
 【不退快樂の都】成佛の域に達して更に退失する事のない、絶對快樂の都と云ふ義、極樂淨土。
 【不退地】極樂淨土のこと。
 【不退轉】得たる功德を絶へず永續する意。
 【浮大にして活々と溢る】漢法醫の語、懷妊の徵候。
 【譜代の下女】此家代々に仕へる下女。
 【不退の彼岸】不退轉の涅槃の義、退轉のない佛界、極樂淨土の義。
 【舞蹈】君から賜物などあつて悦びの場合には、御前にて、袖を左右に振つて舞ひ、畏りを申す一種の作法。
 【不道化】道化する場合でないのに道化ること。
 【不道化云々】道化滑稽も程度過ぎれば不道化となる、余りに悪い洒落方だと叱る。(反魂香の中)
 【武道油斷】太平の世に馴れて武術の心得拙いこと。
 【札を打つ】俗に云ふ正札付きのこと、正札を付けぬ

計り。
 【二面この手柏云々】萬葉「奈良山の兒手柏の二面に、かにも角にもねぢけ人の友」による。(雪女の中)
 【二頭】二組と同じ。(吉岡染の中)
 【札が廻つた】出門の證札が新町廓の西の大門口の方へ廻付されたこと。(冥途飛脚の中)
 【ふた神云々】伊弉諾、伊弉册の兩尊のこと。
 【二上山】越中國今石動と富山との間に聳える、浪枕から枕二つにかける。(用文章の三)
 【札買やる錢】木戸札を買ふ錢。
 【二箇半のばらけ髪】ざんぐりと梳き上げた髪を云ふ。それで油も付けぬからばらけた儘の髪。
 【双子山】相州箱根、中央火山の東南端に双峯並んだ山。
 【二筋の煙りとなし】二人の死骸を葬ること。(天神記の三)
 【ふたせ】二瀬、茶屋宿屋などに居た下女兼酌婦と云つた風のもの。
 【二度具足を肩にかけず】此誓約を破つては再び武器

を付けず、即ち武士を捨てるとの誓ひの詞。(鎗權三の上)
 【二つ井戸】今の道頓堀の東部、東堀留町にあつた名水。
 【札付】正札付、擬ひもない正眞物。
 【二つ櫛】太夫天神引舟も櫛を二つ挿いた時代(徳川初期)があつた、その起源は戦國時代遊女が、首實験の首洗ひ役に召された時、一枚の櫛をそれに用ひた云々の傳説がある。
 【二つ道具】國入道具と嫁入道具。
 【二つ遣ひの手妻】山本飛彈掾の手妻人形、一人で二人の人形をつかふ。
 【二つ取】二つの中を一つ擇ぶこと。
 【二つ引兩】紋所の名、輪の中に横線二つ、足利氏の紋所。
 【二つ三つに打折り】矢を折るなり。(鎌田の上)
 【二つ文字】平假名のこの字の稱「徒然草」にある。
 【二葉】幼時。
 【二引が萬人の物笑ひ】一引の千僧供養に對し、二引

が萬僧供養であるべきを此如く洒落て云ふた。(會稽山の五)
 【武塔天神】素盞鳴尊のこと。
 【二重の帯】二重まはりの帯、瘦せた人の形容。
 【二重の錦】重ねの色目、即ち表も裏も同色。
 【二重廻り】普通の女帯、當時の帯は幅狭く一寸五分乃至三寸ほどのもの。(宵庚申の中)
 【二股大根】大黒天の縁の大根と、二股は長持の蓋にかける。(松風村雨の一)
 【二股竹】天王寺南門内にある、縁結びの竹と稱せらる、天王寺七不思議の一つ。
 【二見錢貝】伊勢國二見の名産せにがひ。
 【二道かけて】あちらこちらに分れて、一と筋でないこと。
 【二棟の殿】角屋の如く本家と別に横に棟を突出した御殿作り。
 【二村山】三河の國にある、千載「五月雨二村山のほとゝぎす峯つゞき鳴く聲をきく哉」。
 【普陀落寺】山城國愛宕郡大原。

【補陀落や】 詠歌に「ふだらくや岸うつ波は三熊野の、那智のお山に響く瀧津瀬」補陀落は、海島の義の梵語、觀世音菩薩に因む外境の名地と云ふ。

【ふだらくや云々】 西國三十三所第一番の札所、紀伊國那智村補陀落寺の詠歌。

【二人ともに】 五郎介と其連れ子の金松の二人。(大織冠の三)

【二人目の舞】 お辰には徳兵衛が二度目の舞。(重井筒の上)

【不斷香】 斷間なく立上る香の煙。

【藤】 客の名。(淀鯉の下)

【藤井寺】 河内國南河内郡長野村、西國三十三所五番の札所。

【藤氏の御方】 藤原氏出身の妃と云ふこと。

【浮中沈】 脈の浮くと、尋常なものと、沈むとの三考に由つて病を診斷すること。

【藤江】 播摩國の濱邊の名。

【ふち頭】 縁頭、刀の柄の鍔元にある金具、ふちは御池の縁。(女腹切の上)

【藤が谷】 鎌倉の扇ヶ谷のこと。

【藤痴】 節が太く瘤のやうに張つた藤の蔓。

【藤澤】 鎌倉大磯の間の宿驛。

【藤澤寺】 相模國藤澤の遊行寺のこと。

【藤代】 紀伊の國の浦邊の名、白藤の名木で名高い。

【藤田小平次】 實事立役武道物に名高く、嵐三右衛門と匹敵した名優。

【藤津】 肥前の海濱。

【藤戸】 往時は兒島灣の西、水島灘に通ずる水渡であつたが、今は藤戸村の名が残つて居るばかり。

【藤戸の一流】 藤戸は備前兒島灣の西、高綱の兄の佐々木盛綱が、馬で海を渡つて平家を破つた、其佐々木家一流のこと。

【藤なはめ】 伏繩目のこと、だんだら模様で緋した鍔、指細目」の註參看。

【藤の尾】 近江國三井寺の南大津の西にあたる。

【藤の木柱】 藤などの蔓のまとうた柱。

【藤の棚】 大阪谷町筋和勝院、境内は藤の名所。

【藤の鳥居】 春日二の鳥居の東にある、昔は藤花此鳥

居に咲下つて美觀であつたと云ふ、後醍醐帝御製「立ちよらばつかさくも心せよ、藤の鳥居の花の下蔭」とある。(天智の三)

【藤の花かたげたお山繪云々】 大津畫の内の藤娘、瓢箪で鉢押へる圖も同じ。(反魂香の上)

【藤の森】 伏見墨染の北、深草村にある。

【藤原の伊尹】 藤氏第六の攝政關白、謙徳公。

【藤原葛野麿】 從四位上藤原朝臣葛野麿は、史に據ると、大師等と同船して唐土に渡つた遣唐使の正使である。

【藤原の實方朝臣】 一條天皇朝の歌人、嘗て和歌の事に付き殿上にて藤原行成と争ひ、其冠を奪ひ地に投げた、め罷官された。

【藤原時平公】 關白基經の長子、右近衛大將、左大臣に昇る、學を好み歌に達し、勅により、延喜式及三代實錄を撰む、延喜九年讒かに三十九歳で歿したが、年少氣鋭の俊材であつた、戯曲には常に菅相に對する關係上敵役の大將として描かれて居る。

【藤紫】 なよ／＼しき御髻の形容。(千匹犬の四)

【ふち矢】 扶持矢、助けの矢、こゝのは女房の助言を指す。(鎌田の下)

【不通】 音信不通の略。(冥途飛脚の下)

【二日心】 二日酔の心持。

【二日のよどみ】 双六の骰子の目の無が出ると二回休まされること。

【佛經を削る】 佛の教を破却すること。

【佛經迷悟】 佛の經にある迷悟因果のこと。

【ぶつくさく】 ぶつく／＼ぐ／＼つぶやくこと。

【ぶづくる】 廓詞、謀計にて人をたぶらかすこと。

【佛眼眞言】 佛眼尊を本尊とする眞言の祈禱、佛眼尊は大日如來の化身、身色日輪の淨光の如く輝き、兩眼微笑し、双手を臍に當て、大白蓮中に住すとある。

【佛子】 佛戒を受け出家したもの、總稱。

【佛性】 眞如法性のこと、佛たるの性覺を云ふ。

【佛性當體】 佛性と同體の人間と云ふこと。

【佛舍利】 釋尊の靈骨と稱す。

【佛種】 佛果に到るべき種子。

【佛種は縁より生ず】 佛種は縁より起るとも云ふ、法

華方便品の偈、佛種は佛性のこと。

【佛神水波】 神と佛は水と波との關係の意、本地垂跡神佛一體の見解から云ふたもの。

【ふつゝか】 不細工、不かつこう。

【ぶつゝく】 つぶやく、ぶつゝく云ふ、不平の貞。

【ぶつゝと】 きつと。

【ふつゝ濡らしつ】 雨の降ると、客を振るとにかけ、濡らしつは其反對。(世繼の五)

【佛頂額】 むつとした不平顔。

【ふつとつゝに出逢ふて】 「つゝ」とは美人局の略、夫と馴れ逢ふて姦通し姦夫から金をねだり取る奸策、不圖それに出逢ふ事を云ふ。

【佛日西天に隠れて云々】 佛隠くるゝも佛法は東北の國に輝くとの意。

【佛日西に隠れ云々】 釋尊涅槃に入ること。

【佛法けづる】 佛の法を破却する。

【佛法僧】 啼く聲が佛、法、僧と三寶を唱へるやうに聞こえる鳥の名、高野、松の尾其他深山に棲んで居る。

【佛法と萱屋の雨は出て開け】 外へ出てお説教聞くことを勧める喩、「萱屋」は「藥屋」とも云ふが、萱葺の屋根の雨音は、外へ出て、初めて聞く事が出来るとの義。

【佛法とも音は上させぬ】 ぶつぼうの音を鼓の音にもちる。(聖徳太子の三)

【佛法不思議王對座】 佛法の徳は王侯と同座が出来るとの義。

【ぶつふう】 酒の酔の呼吸。

【ぶつゝり】 ぶつゝり、斷然。

【佛實法寶僧寶】 所謂佛教の三寶を云ふ。

【武帝の漢女を慕ひし煙】 漢の武帝が李夫人の死を痛惜して反魂香を作り焼くと、煙中に夫人の姿が現はれたと云ふ反魂香の故事。

【武帝の鯉】 漢武帝鯉の靈に感じ自ら描いたと云ふ重寶の畫。

【武帝の時昆明池云々】 十訓抄第一に見ゆる武帝と昆明池の鯉の靈との故事、委しくは本文記述の通り。

(隅田川の二)

【筆柿】 頭の尖つた筆形の柿、實に滋味なし。

【不敵なく】 頗る不敵なりとの意。

【筆捨松】 紀伊藤白山にある二株の松を云ふ、此邊風光絶佳、昔畫工金岡が寫さんとして能はず、筆を投ぜし所だと云ふ。

【筆立】 筆始め。

【筆津草】 つくしの異名。

【筆取】 筆者、書記。

【筆ゆひ】 筆の製作工人、ゆひは雇人の古語。

【普天の下云々】 詩經の句、天の普く覆ふ處、地の長く續ける限りは悉く王土なりとの意。

【不動坂】 大阪方面から高野へ登山する道、一心院谷にある、麓より神谷を経て、すぐ此坂がある。

【太らづる】 野太い人かな。

【ぶどうな形】 荒くれない、ぎこつな形を指して云ふ、ぶどうとは歌舞伎道の語、武道方から出たもの。

【不動の尊像縁日】 不動の縁日は毎月三、八、十六、二十八日。

【不動參】 北野稻荷山の南不動寺參詣のこと。

【懷子】 秘藏子、箱入娘など。

【懷で錢よむ】 俯向ひて居る形を云ふ、これも商人らしい比喩である。(天網島の上)

【懷の綿】 懷中に疊み入れてある綿帽子。

【太手糰】 糰の美稱。

【不届】 悪いと知つて悪事をする事、不行届と同じ。

【符都の大明神】 河内國中河内郡木の木村にある。

【太祝詞】 太は美稱。

【太腹】 腹の眞中。

【太ふても形ばつかり】 挿木の形ばかりが大きくて何の用にもならぬと、俗に云ふうどふの太木と同義の諺。

【伏鬼曲りの煎餅】 巻き煎餅の一種。

【蒲團の格子縞】 蒲團の縞の格子から曾根崎新地の格子を呼び起す。(天網島の中)

【蒲團ばり】 蒲團を敷くこと。

【舟遊び】 大阪町家の年中行事、夏季大川其他の諸川へ涼み船を出し、諸種賣物舟などもありて賑ふこと、古くからの慣例。

【府内】豊後國大分郡。

【船入橋】これは固有名ではない、多くの藏屋敷の濱には、荷船の出入の便宜上、川から屋敷内へ流れを引ひた、其上に架けた橋で、此處のは鍋島の藏屋敷に架けられたのを云ふ、船入橋の面影を見たいと思ふ人は、西道頓堀住友倉庫の、川に南面した（深里橋北詰一町西）繩の橋を見ればよい、これは舊加賀藩藏屋敷の船入橋である。（天網島の下）

【舟岡】山城愛宕郡にある、墓地。

【船材】船を造る材料の木。

【船坂町】現時の大阪西區阿波座四番丁。

【船玉神】俗に云ふ船の守り神。

【船のごみによるく】俗諺、船のごみに酔ふ、又泥に酔ふたやうとも云ふ、疲れ果てた形容。

【船の上】伯耆國船上山。

【舟端蹴たて云々】「船辨慶」のもぢり文句「潮を蹴立て悪風を吹かけ……前後を忘るばかりなり」の作り替。（今宮心中の上）

【舟端に刻を付て刀を尋ぬ】呂氏春秋の楚人の江を涉

る者の故事を取る、時勢の推し移りは舟の進むに以て居る、舊法固執の何の益ないことは、恰も劍を舟から落し、舷に其落した所を刻み印をつけて、之れを求めやうとするも、其劍の所在は既に過ぎ去つて居て得られやう筈はないとの比喩。

【船籠】船の御殿。

【ふならく】ぶらりくと勢の無い貞。

【歩に首をさげらるゝ】將棊の語、歩で王が殺される

とのこと。（壽門松の中）

【歩に首を下げる】歩は賤しい一卒、下郎共の手で我が首を斬らせ給へと云ふこと。

【船を出しやらば云々】本歌は「船を出しやれば夜ぶかに出しやれ、ほかけ見ゆればなつかしや」若みどりの巻四「夜ふか舟」に載つて居る、冒頭に此歌を持つて來て密航船の心持を「氣にかゝる」の結句に替へて仄めかして居る。（博多の上）

【船漕げば】居睡る形を譬へて云ふ。

【船の屋形に云々】屋形船で仇な三味線の音がする

と、濱納屋で油引きの白の音が聞こえる。（今宮心中の上）

【船は足入り】船あしが充分に水に入つたこと。

【船は新造の乗心云々】此二上り唄は當時流行歌を、例に由つて轉用したものか、松の落葉に類歌がある

「君はしんぞの乗心、さよよいよゑい、君と我と、我

と君と引寄せてはよるゝさ、男は花の都入り、圖

に乗つた乗つて來たゝ船のや宿の娘は小手招き、

ゑい袖かざして表のくゝりのくるゝの穴から云々」

天王寺屋小菊が客に連れられ船にての野崎参に因

み、船の歌を適用した。（女殺の上）

【船も橋もない處】全く渡りのない處、とても逢はれぬ中の喩。

【不念】無思慮、不行き届き。

【燕廢】荒れはてたこと。

【布袍】布子。

【舞馬闘鷄】馬や鶏を闘戦さすこと。

【不破の關】美濃國不破郡松尾村字藤川の川の岸に、其昔在つたと云ふ日本三關の一つ、關屋の跡は關原

今須の中間にあつた。

【ふはくひやうく】浮き漂ふて轉り走る貞。

【ぶ】茶のこと、女や子供などの用語、色街では、客の來ぬことをお茶を挽く（昔時茶立女時代の制裁から此語起る）とて、茶の語を忌み、今尙ほぶと

呼ぶ。

【負米の歩み】よろゝした足歩を云ふ、仲由字は子路、孝の爲め米を負ふて遠きに致したと云ふ故事に由る。

【武邊】武備、武道一切を指す。

【不返事】返事もろくにせぬこと。

【父母在す時は遠く遊ばず】論語里仁爲美「父母在、不ニ遠遊、遊必有方」親を去ること遠ければ、已れ親を思ふて置かざると同時に、親も亦我を念ふて忘れざること恐れるなりとの意。

【ふみ】文と、踏み（米の足踏）とをもちる。（日本武の三）

【ふみ馬御免】踏むと文とをかける、馬前人無し踏むも蹴るも御免と云つた勢ひ付いた意味をいふ。（丹波

與作の下

【文車】 運搬に便な爲め書棚の下に車輪を付けたもの。
 【踏みさがされ】 さがされは大阪の方言で、踏み散らされること、怒りさがす、あばれさがすなどの、さがすと同一。
 【文月】 七月。
 【文で濡し】 艶書で口説く。
 【ふみに留めて】 米を踏むと、史文に留めるとにかける。(日本武の三)
 【踏むな蒲團に科もない】 「投げた枕に科はない」などの當時の流行唄。(重井筒の中)
 【麓寺】 山の麓に在る寺。
 【武門】 武士の家がら。
 【普門品】 法華經の第二十五品。
 【冬木】 梅は冬の内から咲きそめる故云ふ。
 【不用】 不用心の約。
 【芙蓉殿】 蓮見の御殿の稱。(隅山川の二)
 【不落居な事】 かたのつかぬ事があつての意。(歌念佛

の中

【ふらすこ】 硝子壺。
 【ぶら〜病】 氣鬱病。
 【ふり】 振袖のふりにて、年の若い女の意。(夕霧の中)
 【振賣】 品物の荷を擔ひて聲高に賣り歩行くこと。
 【ふりか〜り】 通りか〜り、ふとした縁のこと。(松風村雨の三)
 【ぶりしやり】 ぶり〜つん〜怒る貞。
 【振袖白商】 幼時の意。
 【振袖なりとつめなりと】 振袖は若い女、詰は年増の女。
 【振松明】 松明を手に〜振り上げ振り廻はす。
 【振手の女郎】 客を振る女郎。
 【振延〜】 羽を振りつゝ連れ立つこと。
 【ふりは〜】 わざ〜、殊更に。
 【ふりばり】 最も下賤な罵倒語、女を極端に罵つた詞、俗に女を罵つて「小便垂れめ」と云ふと同義。
 【降りみ降らずみ】 降つたり降らなんだり、恰も梅雨頃の天候のやうに。

【ぶりよや】 降ると振り好しともちる。(忠信の四)
 【振分髪(の井筒)】 言ひ名付けの井筒姫を指す。(井筒業平の二)
 【布留】 大和國山邊郡にある磯上布留社のこと、十握劍を祀る。
 【古い格】 古手なこと。
 【古い仕掛】 當世に遅れた方法との事、手の中つまむなどの口説き方は、一昔も前のやり方なりとの義。(宵庚申の上)
 【古市】 河内國南河内郡古市、譽田八幡社の所在。
 【古市】 奈良の南、帶解の東の里。
 【ふるかく】 古格、古風、舊式。
 【ふるがけ云々】 思ひ棄てた筈の古い懸け代金が寄つたとの義。(雪女の上)
 【古河野邊の神杉】 大和磯城郡にあり、昔二本の神杉がありし事を云ふ。
 【古栖の雛云々】 三人の遺兒を守り育て、旗上げせよとの意。(烏帽子の二)
 【富樓那】 釋尊十大弟子の一人で、最も雄辯で説法第

一に推された尊者、達辨家の代表的人物。
 【古羽織の裏の町云々】 裏町横町其他の役衆が羽織袴で出頭する形容。(嵯峨の四)
 【振舞ひ】 こゝのは、影響を及ぼすの意。(宵庚申の下)
 【振舞喰ふた計りに】 御馳走になつたおかげで。
 【振舞ふ蜘蛛】 蜘蛛が巣を作る様、蜘蛛の振舞の語から出る、古今「わが背子がくべきよひなり」の歌にある。
 【古身】 古くさいの意を刀身の古きに喩へる。
 【ふれ〜雪】 「ふれ〜小雪」の小唄による。(反魂香の下)
 【風呂】 焜爐のこと。(加増の一)
 【風呂の煙云々】 風呂女、湯女、呂州の姿に似せること。(卯月の上)
 【風呂吹き】 料理法の名稱、大根の輪切をゆで味噌を付けたもの。
 【ぶんから】 菓子など入れる手箱、手文庫。
 【文龜】 後柏原天皇の朝の年號。
 【文和三年】 足利義勝將軍時代の年號なれど、實は元祿十五年のこと。(碁盤太平記)

【豊後梅】 淡紅色重瓣の梅で、もと豊後國大分郡に産した、玉世姫を故郷の豊後梅に譬へて云ふ。(用明天皇の一)

【分國】 各自の領分の國。

【文藏】 獄門庄兵衛など悪役方の俳優佐川文藏の事。

【文質彬彬】 文と質とが適度に相雜はる事、論語に「文質彬彬々然後君子」から取る。

【文史の學】 典籍を云ふ。

【分身し】 一身を十方に分けて馳け廻ること。

【文宣王】 孔子の謚。

【文宣王は陽虎云々】 文宣王は孔子のこと、ある時、陳に行く途次、匡の國を過ぎると、匡人は嘗て陽虎に暴された事があつた爲め、孔子の容貌が陽虎に似て居ると捕へられたと云ふ故事。

【ふんぞう衣】 ふんぞる衣、踏ん反つて衣を着た形容。

【文台】 普通の机の稍低ひもの、歌合せの時、短冊など載せる。

【分立つて】 分家させること。

【分地】 没收された地の幾分を分ち與へられた地。

【踏んちかる】 踏みはちかる。

【文治五年五月】 後鳥羽天皇の朝、義經衣川に殺されたる翌月に當る。(大磯虎の一)

【文治二年】 第八十二代後鳥羽天皇の朝。

【文治二年】 元暦の翌年が文治元年。(佐々木の三)

【文治の昔云々】 謠曲「安宅」を探る。(國性爺の四)

【文杖】 文狭みのこと、杖のやうな形して其先頭に文書を狭むところを設ける。

【ふんどう】 勘當に續けての語呂、分銅は天平秤に用ひる金屬製のおもり。(二枚繪の下)

【分内】 領分内、内部のこと。

【ふんばり】 女を罵倒して云ふ語、糞尿めのこと。

【文福茶釜】 上野國館林茂林寺の僧守鶴とて、狸の化けたと云ふ僧の所持する釜、此釜一度水をさせれば五日は涌出で、常にぶんぶくくと沸ひた、守鶴其本性をあらはした時、此釜の主は毛が生えたとて人々騒いだと、本朝俗誌志にある。

【分別次第にさあんせ】 思ふ存分どうなとせよと自暴自棄の語調。(女腹切の中)

【ぶん任す】 打ち任す、六方詞。

【分量を見さがされ】 内兜を見すかされ、内容を探られる。

【文王の姜里の繩】 周の文王が紂王の爲に姜里の牢舎に囚はれた時、獄中で易の卦辭を繋ひたと云ふ故事。

【文王の圃】 周の文王の圃、説文に圃とは苑に垣あるなり、一に曰く禽獸には圃あり云々、今の動物園のやうなものだと云ふ、それが七十里四方の廣さであったが、それでも民は狭しとしたと云ふ義。



【經上る】 成り上る。
 【屏を乗つて】 屏を乗越えて。(用明天皇の五)
 【平均】 平定と同じ。
 【平ぐわい】 平懐なり、坦懐と同義、胸にわだかまりを持たぬこと、船中なれば無遠慮御免と云ふこと。
 (博多の上)
 【平家無用】 平家物語の曲奏は無用。(千四犬の四)
 【平沙】 廣き沙原。
 【平沙の落雁云々】 漁村夕陽、遠浦歸帆など、これは蒲湘八景の内。
 【瓶子】 徳利形の紋所。
 【瓶子限り】 徳利に酒のあらん限り。
 【秉燭】 燈火を點ずる。
 【平親王將門】 相馬小二郎と稱す、天慶二年叛逆の志を起し、自ら平親王と稱し剽掠を極めたが、同三年、

平の貞盛の爲に射殺された。
 【平城天皇の孫王】 行平が阿保親王の子、平城天皇の王孫に當ることを云ふ。(松風村雨の三)
 【平且】 夜の明け方、寅の刻(午前四時)。
 【平治の合戦】 平治元年十二月、藤原信賴、源義朝と謀り、清盛の熊野參詣を機とし兵を擧げ、藤原通憲を殺したが、遂に清盛等の爲に敗亡した、此時義朝の子頼朝は伊豆に流された。
 【へいち門】 屏中門、屏重門に同じ。
 【幣殿】 參詣人が幣を奉ずる殿。
 【平人】 平民のこと。
 【聘物】 贈呈の品。
 【平禮】 風折の舊稱、總じて烏帽子を折り伏せた所を平禮(ひらめくの義)と云ふた。
 【廟】 こゝは鹽谷判官の墓の敬稱。(葦盤太平記)
 【表相】 表具の表装にもちる。(反魂香の上)
 【飄箆の川流れ】 輕くて浮きくした喻。
 【飄箆町】 新町廓の町の名、新町橋通りを云ふ、新町の總名にも用ひられて居た、寛永年中此廓開發者伏

見の浪人木村亦次郎が太閤から千生飄箆の馬印を頂戴した縁故に由り名付けたとも云ひ、天和年間道頓堀の西にあつた同名町を移したものだとも云ふ、「闇の夜の」と冠せられたは、大阪今宮産の飄箆に、兩くびれめの均等な尾も頭も分らぬものを闇の夜と名付けたに起因する。(流鯉の上)
 【飄箆より駒を出すは張果老】 支那張果老が紙を以て驢馬とし巾箱中から出した故事。
 【べうの湯本】 豊後國の別府の湯本を云ふ、別府にかけて、犬の啼聲「べう」をもちる。(用明天皇の四)
 【俵物】 米穀など凡て俵に入れたものの稱。
 【表裏の沙汰】 表面と裏面と二様に言ふこと、俗に二枚舌として、詐りの意。
 【攀】 鷹の足緒。
 【赤目子】 まぶたを下に引つくり返へし赤目を見せる
 貞、「否」と云ふ意を表はす、「目赤う」の轉。
 【べかつし】 べかりし。
 【壁書】 足利末世戰國時代に、其家々の掟を記したものの、即ち家法家憲の義。

【汨羅云々】 屈原讒に逢ひ汨羅に投死した故事。
 【碧落】 碧空、青空。
 【汨羅に沈む】 楚の同族、伯庸の子の屈原は、讒に遇ひ江南にやられた、懷沙の賦を作り汨羅(湘陰縣の北十里江名)の淵に投じて死んだ、伯夷叔齊と同じく義人の股鑑として引證されて居る。
 【部切】 船の部屋の仕切の板のこと。
 【霹靂】 雷の鳴り渡る強音。
 【可く飲み】 盃を下に置かず飲むことを云ふ、可くの可字は文の上にあつて下に置かない文字ゆゑ名付ける、又、可く盃と云ふものがある、底に細い穴があつて、指で塞ひで酒を受ける、下へは置けぬ盃の製法。
 【平群谷】 大和國平群郡にある。(潤色の中)
 【へこんだか】 失敗したか。
 【舳先が向いた】 船の舳先が追手風に順ふて、好運が向ひて來たの義。
 【臍を隠す】 雷が鳴れば臍を隠せと、小兒等を警める慣習のこと、雷震の時は俯伏せば助かる、仰向く

者は死ぬと云ひ傳へる。

【臍がお茶挽く】「臍で茶を沸かす」とも云ふ、大笑ひを喻へた諺。

【べた／＼した取姿】姿のしどけない様。

【糸瓜でもない】「糸瓜の皮とも思はない」の諺と同義。

【別火】神佛に奉る清火のこと、穢を避けて別に燃り出す故に名付く。

【別教】天台宗化法四教の第三、藏、通、圓の三教と別異なるゆゑ名付くとある、又、空、假、中の觀法を次第各別に修する故、圓教に對して別教と稱する。

【別時の念佛】二七日、三七日、九十日等の期限を定めて、一意念佛すること。

【別所】別業、下屋敷。

【蔑如】侮る。

【別心】二た心。

【別當】その主位の官人。(女殺の下)

【別當】此處のは神主の異名。(女護鳥の三)

【へつり銀】へつるはへぎ取ること、少しづつ取りへ

らした銀との義。

【紅の花の様な小判】小判の色に譬へる。

【への字なり】こゝのは髭の形を指す。(女護鳥の三)

【衣】べ、は着物を云ふ子供のこと。

【部屋に押し】部屋に押並べの義。(五人兄弟の一)

【篋同前】竹べら同前の鈍刀と嘲つた語。

【べらの子のあべかこう】べらは薄つべらな、淺墓なこと、あべかこうは、兩手の指先を脛にかけて赤目をむき、「否」を表はすしるし、即ち淺墓な子供だましが却てあべこべの結果を見たとの意。

【べり立る】しやべり立るの約。

【縁塗】縁塗烏帽子の略、縁を漆で黒く塗つたもの。

【綜】經糸引き延して機にかけること。

【べる】侍る、贗訛。(女護鳥の二)

【べろ／＼柱】脆弱な柱。

【變易の理】世象の移り變つて行く理法。

【變改】話を變へる、破談する。

【變替】違約のこと、紋日毎に客に厄介かける女郎も

あれば、又それを變替へする客もあり、頼まれてい

かつげになる客もある。(女殺の下)

【辨柄綺】和蘭舶來の織物で、地色はいろ／＼あれど

凡てたつ綺のもの、經は絹糸、緯は綿糸にて織る。

【變宮變徵】宮商角徵羽の五音と合せて七聲又は七音と稱す。

【偏屈原】偏屈と屈原にもぢる洒落。(浦島の一)

【卞和が三度足切られ】楚人卞和、荆山で琢かざる玉

(璞玉)を得て厲王に獻じた、王之を玉人に見せたが、

玉にあらず石なりとの鑑定に由り、卞和は左足を切

られた、次代の王武王の時、又之を獻じたが同じく

石との鑑定で、右足を切られた、兩足を斷たれた卞

和は名玉を抱ひて悲しんで居たのを、文王の代にな

つて、稀代の美玉と云ふ事が分明し王家の寶となつ

たとある韓非子の故事、此處では、忍耐の肝要な事

に譬へて居る、三度足切られたとあるは、二度足切

られ、ヤツと三度目に解決したと云ふ省筆である。

【辨慶押隔て打物業にて叶ふまじ】以下「……大聖不

動明王」まで、謠曲「舟辨慶」の文。(西王母の二)

【辨慶遣手】辨慶の七つ道具を揮りまはす程の忙しい

遣手の身上を云ふ、「打物業にて叶ふまじ」は辨慶の

縁から謠曲「船辨慶」の句を採る。(反魂香の中)

【變作】變體。

【辨財天】生玉神社東門外の北にある蓮池の側に祭

る、今は淨瑠璃神社などもある。(生玉の下)

【變成男子御産平安の守】胎内の兒が女子でも男子と

なつて、平産ありたいとの祈りの守。

【變生男子の願を立て】お吉女なれば横死したれ、來

世こそは男子と生れ變らん事の立願。(女殺の下)

【辨眞】義經記其他には、辨慶は熊野の別當辨正の嫡

子とある。

【遍照僧正】俗名良峯宗貞、仁明天皇の殊遇を受け、

帝の崩御の後、哀慕に堪へず佛門に入つて遍照と

改める。

【辨舌に和を入れて】甘言巧舌の意。

【變體の文】形體を變ぜさせる呪文。

【辨當合子の足利梳】合子とは蓋のある漆塗の梳を云

ふ、此處のは下野國足利の産の足利梳で、辨當の合

子の蓋になつて居る。
 【偏突】 遊戯の名稱、漢字の旁だけ見せて、偏を當てさせるもの、偏繼ぎの意。
 【へんてつもない】 何の用にもならぬつまらぬと云ふこと、へんてつは福後(へんとつ)の訛と云ふ。
 【邊土】 片田舎。
 【へんねし】 嫉妬、意地悪るなど云ふ俗語。
 【便々】 愚圖く、無益に時をうつす。
 【便々だらり】 ゆるくぐづく長びくこと。
 【遍明院】 梅の由兵衛長吉殺の劇で名のある野中の觀音のこと。
 【遍禮】 巡禮のこと。

ほ

【布衣】 布製の狩衣、後には無紋の狩衣の稱、無官の者の着衣。
 【布衣跣足】 布衣は無紋の狩衣、跣足は足袋履物等を用ひぬこと。
 【布衣始】 名目抄に「布衣始、太上皇、尊號之後、始令レ着ニ御烏帽子ニ云也」。
 【ほいやり】 優しく柔かの良。
 【朋友信あるの道】 五倫の一、五倫とは、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、明友信ありの五常道。
 【奉加】 本来は、神佛へ寄進する品の中へ、金を加へることなれど、此處のは寄附金の意。(百日曾我の五)。
 【奉加銀】 寄附金。
 【頬冠りして上りませ】 美味のものを食ふと腮をはづすと云ふ諺がある。

【ほうがまち】 頬べたの兩方に突き出た骨、即ち頬の框。
 【頬がまち椽がまち云々】 頬やら椽やら腕やら障子やら、ごつちやごちやの大騒ぎを云ふ。(傾城酒呑の四)。
 【蜂起】 蜂が巢を飛び出る如く群り起り立つこと。
 【ほうけ】 そゝけだつ、亂れること。
 【寶磬】 寶鐘のこと。
 【鳳闕】 禁裡。
 【奉公構ひの改易】 他家へ仕へることを禁じ、そして其家斷絶となる刑のこと。
 【奉公しからせば】 奉公仕慣らせばと同じ。
 【奉公日の出の殿原】 日の出の勢ある頼朝幕下の侍共。(會稽山の四)。
 【寶國】 七寶莊嚴の國、極樂の異名。
 【豊國々師】 聖德太子、馬子等と共に佛道に盡くした人。
 【棒鞘】 刀の鞘の棒のやうに眞直ぐで反りのないもの。

【報謝】 佛祖の徳を感謝して之れに酬ひる淨業を行ふこと。
 【奉書】 上よりの召狀。
 【補助】 手助けすること。
 【棒づくめ】 棒で歴して行くこと。
 【篷窓】 船の窓。
 【酸漿ほどの血の涙】 随分大きな氣拔な紅涙なり、故ある哉此一句、後代久しく人の口に鳴らされた。(宵庚申の下)
 【鬼灯ほる】 鬼灯の首を抜き取ること。
 【北條四郎】 北條氏初代時政のこと。
 【鵬鳥は三年に一度云々】 莊子逍遙游中の文にある想像上の大鳥、翼の徑三千里と云ふ。(佐々木の二)
 【ほうと】 泥を跳ね返へす良。
 【ほうどう】 印度の法道和尚、常に鉢を飛して供を受ける、俗に空鉢仙人と云ふ、ほと賦かへすを受けた語。(井筒業平の二)
 【ほうどぐわを抜かし】 ほうどは殆んど、ぐわは我、殆んど我慢しきれず、我根に盡きたの意である。

【ほうと持扱ひ】 殆んど持て余す。
 【棒に當る】 釣的の棒。(天神記の一)
 【棒に逢はぬ先】 「犬も歩けば棒に當る」の諺を取る。(鎗権三の上)
 【棒ねぢ】 双方棒の両端を持つて捻ぢ合ふ勝負。
 【棒の物打】 棒の下端。
 【朋輩づき】 友達つきあひ。
 【蓬眉】 長き眉毛。
 【ほうく眉】 殿上眉、高眉のこと。
 【棒まかれな】 棒ふりまかれな、棒を喰ふな之意。
 【ほうや〜】 ほうやり、ほんのり。
 【蓬萊】 新年三方台に、海老鬘斗昆布榎橙穂俵など盛つたもの。
 【蓬萊國】 支那傳説にある想像の國、瑞祥に充ちた仙境の意、三神山の一つで渤海にありと云ひ傳へる、蓬萊島とも云ふ。
 【蓬萊國の秋津鳥】 神仙境の日本國と云ふ義。
 【蓬萊の一日】 仙境での一日、此處は龍宮を指して云ふ。(松風村雨の一)

【映面】 泣き顔。
 【映なんこと】 落魄悲境に沈むこと。(虎が磨の下)
 【帆を上げて波のあはぢや云々】 以下は謠曲「高砂」の文、「高砂や此浦舟に帆をあげて、月もろ共に出汐の、波の淡路の鳥影や、遠くなるをの沖すぎで、早住の江に着きにけり」のもぢり。(大織冠の一)
 【外を稼ぐ】 精々他所を探して見よとの義。(世繼の二)
 【ほかつく】 熱してほてる。
 【行器】 食物を容れて他處へ携行する器。
 【放からかす】 捨て、置く、上方語。
 【朗かに】 はれ〜して。
 【北宮勳が勇力】 衛の公族、孟子公孫丑上に、人其肌膚を刺せども撓まず、其目を刺せども眼晴を轉じて逃避せずと云つたほどの剛勇。
 【北京の都】 明太宗が北平に都を遷し北京と稱した、即ち金陵の南京に對したもの。
 【火串】 烽火。
 【北洲の千年】 北洲は須彌四大洲の一、北俱盧洲の

略稱、こゝに生れた者は壽千年を保つとある。
 【墨子が白糸】 周の墨子が練糸を見て、黒色にも黄色にも染まることを悲しんで泣ひたと云ふ、淮南子説林訓の記載。
 【木主】 神主、位牌のこと。
 【北辰南極】 天の南北。
 【乏少】 輕少。
 【木鐸】 舌を木にて作つた鈴、政教を施す時に、之れを振つて人を警しめたもので、即ち政治の標準と云つた義。
 【北斗】 北極に近い七つの星。
 【木魅】 木の精、黒狗に似て人面のもの。
 【北面達】 北面の武士達、院の御所警衛の任にある者。
 【北面の武士】 院中の警衛の武士の稱、院の御所の北面に居する故に名付ける、但し後世源平時代白河院の時に創設されたものにてこれ亦此當時にはなかりし制度。(いろはの三)
 【僕射に矛を逆しにす】 叛逆の意、僕射は宰相の義、矛を逆しにするは反意を示すもの。

【黒子】心中立の一種、入れ黒子。
 【法華經讀む鶯】鶯の啼く音が、法華經と聞こへる故、一名を經讀鳥とも云はれる。
 【保元の春の花、壽永の秋云々】保元壽永の戦亂に平氏亡滅の事を書いた平家の文。
 【保元平治の合戦】保元の亂は、崇徳上皇の舉兵、平治の亂は、藤原信賴、源義朝の反を云ふ。
 【ほこ】弓の丈けを云ふ。
 【反古紙帳】紙子で作った蚊帳、「徒然草」の草稿の反古で製した紙帳との義。(兼好法師の中)
 【反古障子】田舎に見る反古紙で張った障子。
 【埃】實際縮高の金額より余分になる端金を云ふ、例へば九十六圓の勘定に百圓受取り残金は其儘返戻しない時、其四圓を埃と稱へる。
 【菩薩なり】菩薩見るやうな柔和な相。
 【菩薩の六度】佛語、六波羅密のこと、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意、菩薩の修する行をいふ。
 【暮山】夕暮の山々。
 【干し】酒を飲み干すこと。

【欲しいものは買はぬが徳】節險の第一諺語。(博多の中)
 【星兜】兜の鉢に星のやうな細かひ點のあるもの。
 【星切斑】星の點々ある切斑の羽矢、切斑とは、鷹の尾の羽などの、黒と白と段々になつたもの。
 【星様は一人もない】圖星(目的)の人のないことの寓語。(大磯虎の三)
 【星谷】阿波國立江寺の北、桂川の對岸。
 【星月夜の淺井の水】鎌倉極樂寺村にある、昔猪星の影の映つた井と言ひ傳へる。
 【歩障】竹など立て、絹綾などの幕を張つた圍ひ。
 【細疊の平元結】丈長紙を細う疊んで作つた元結。
 【細谷川の丸木橋云々】盛衰記に平通盛の歌「我戀は細谷川の丸木橋、ふみ返へされて濡る、袖かな」踏み返へざるを、文返へざるにもちる。(萬年草の上)
 【細布衣陸奥の云々】古歌に「陸奥のけふの細布ほど狭み、むね合ひがたき戀もするかな」とある、陸奥のけふは狭布の里にかける、幅の狭ひ布を専門に産する地。

【細引綱】囚人の駕籠の上から打ちかける綱、逃走を防ぐための用心。
 【細引冥にして】縊死の覺悟を示す。(松風村雨の四)
 【細目を見張り大口開く】細目の大口と云ふ名ある所以、作者の戯れ。(日本武の五)
 【ぼぞん】本尊の略語。
 【菩提婆娑訶】同じく陀羅尼の句、婆訶を赤くなつた顔にかける。
 【菩提樹】一切諸佛が菩提を成ずる道場に生ずる樹。
 【菩提門、無明門】菩提門は菩提に入る吉事の門、無明門は非菩提の凶事の門。
 【ぼたえ死】甘えふざけて死ぬこと、榮耀が余つて死ぬことなど云ふ。
 【ぼたされぬ】拘束されぬ、保はらぬ。
 【錠】馬の刑具の名、足枷のこと。
 【穂俵】蓬萊の飾りとする米俵の形のもの。
 【ぼたへた顔付】ぼたへるは戯れ騒ぎまはると云ふ大阪詞、眞劍にせず戯談にした顔付のこと。
 【ぼたへる】ふざけること、大阪の方言。

【螢火の光 惡神、蠅聲疫神邪神】區々種々の惡鬼妖神の稱、螢火の如くチラ／＼無數の惡神、五月の蠅の如く群り寄る邪神との義。
 【牡丹が原】此邊の文句は「石橋」に因んで居る。(今國性爺の下)
 【牡丹花下の睡猫云々】花下の睡猫の目的は花ではなく花上の蝶にある、敵は本能寺にありとの諺と同義
 【渤海】西漢の郡名、今の直隸天津府滄州の東南に當る地と云ふ。
 【ぼつかり】すつかり。
 【發起】一念發起から轉じた語、會得した、理解したとの意。
 【ぼつきあげ】悉皆ぼつとく、何も彼もスツカリ打ち込み入れあげること。
 【ぼつく】糸を解く、だらしなく金を費すこと。
 【法華山】播磨國法華山一乗寺、本尊千手觀音、西國二十六番札所。
 【法華寺】大和添上郡佐保村奈良の西北、法華滅罪之寺と稱す、聖武天皇東大寺を造營し内陣に女を入れ

なかつたのに對して、后妃光明皇后が女の爲に天平十三年創建された尼寺、横笛悶死の情話などもある。

【法華儀法】 法華經を讀んで罪狀を懺悔する法。

【法華涅槃】 法華經、涅槃經を指す。

【法華八講】 法華經八卷を八人に分け、八座に講讀供養する法會。

【法華彌陀眼目の異名】 説明は本文に盡くしてゐる。

(蟬丸の五)

【北國立關東立云々】 各牧場の有名なもの揃ひ、立は育ち(駒の)に同じ。

【ほつこしふもない】 捨てゝも置かれずの意、馬士詞。

【ほつこむ】 刀を腰にさす。

【ほつこり】 ほんのり。

【法性寺】 京都東福寺門前、鴨川の東岸にあつた寺、藤原忠通の創建。

【法性隨妄の雲云々】 法性を蔽ふ煩惱妄心の雲の厚いこと。(一心五戒の一)

【法性の理體】 不生不滅無始無終の眞理を指す。

【法性坊】 山城比叡山、法性坊尊意僧正のこと。

【法性無漏】 法性は眞如、無漏は無垢清淨。

【非沙彌多羅】 非沙彌は正しからざる沙彌の義、多羅は人名。

【ほつしり】 うつとり。

【拂子】 白旄の毛を束ね柄を付けた佛具、惡障を拂ふ爲めと云ふ。

【ほつそり】 みすばらし氣に淋し氣な良。

【ほつたてろ】 追つ立てる、さあ行け〜と追立てること。

【ほつて】 發傳、朋尻(鎧の胸の背面の最下部)のこと。

【ほつてもならぬ】 いかな事、逆も〜ならぬと云ふ事。

【北方一徳の水】 五行から觀て北方は水にあたる、一徳は純一、恩澤の意、此あたりの文は水に縁のある語を寄せてゐる。(嵯峨の五)

【ほつほらほ】 ほりや〜とあやかす詞、それ見よなど云ふ意。

【布袋乗】 寛々と乗つた良の形容。

が、後、前妾祇王の跡を逐ふて薙髮し、嵯峨野往生院の庵に世を終へた。(忠信の三)

【佛金色の身上り】 芝居の藝題の名か、不明。(二枚繪の上)

【佛たのんで地獄へ落つる】 意外の結果になる喻。

【佛といつば何者が佛云々】 「徒然草」の最終尾に兼好

自悟發明の事を述べた一文「八つになりし年、父に

問ふて曰く、佛はいかなる物にか候ふらんといふ、

父が曰く、佛には人のなりたるなりと、又問ふ人は

何として佛には成り候ふやらんと、父また、佛の教

によりて成るなりと答ふ、又とふ、教へ候ひける佛

をば何が教へ候ひけると、又答ふ、それも又先の佛

の教へによりて成り給ふなりと、又とふ、其教へは

じめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける

と云ふ時、父空よりや降りけん、土よりや湧きけん

といひて笑ふ、問ひつめられて、え答へずなり侍りつ

と、諸人に語りて興じき。

【佛倒し】 立姿の儘で膝を曲げずに倒れること。

【佛の御母】 大師の母公を指す。

【ほてがくねる】 腹筋がよれる、小癢千萬などの意。

【ほてくろしい事】 あつかましいこと。

【ほてつばら】 腹のふくれて大きいこと、角力取りを

布袋腹など云ふたが馬の太つ腹にも轉用するやうに

なつた、この太つ腹めと云ふ義。

【ほてつばら】 布袋腹、腹のふくれたのを罵る語、馬

方が馬の太つ腹を罵る時などに用ひる、こゝのは苜

藻の妊身を指して云ふ。(娥の二)

【ほでてんがう】 ほでは「ほたへる」てんがうは惡戯、

大阪では主として賭博を指して云ふ。

【ほ手のくねる奴めがある】 腕のねぢけ曲つた野郎で

はあるワイ。

【ほて振の賣人】 振り賣の小商人と罵つた語、ほて振

は棒手振。(孕常盤の二)

【ほでぼし】 腕節(うでぼし)の詛。

【ほてれん】 腹の膨れる形容。

【ほとをり醒めぬ】 ほとほり醒めぬこと、即ち余焰尙

ほ止まず、氣勢の余熱を指す。

【佛御前】 京に居た名高ひ白拍子、清盛の妾となつた

【佛の顔も云々】「佛の顔も三度撫れば腹立つる」との古諺がある、此處には溫和な親の心を佛の顔に喻へて云ふ。(冥途飛脚の上)

【佛の木寺】伊豫國北宇和郡成妙村、佛木寺。(四十二番札所)

【佛の像を踏む】是れ畫踏として、耶蘇信者を禁ずる爲め、耶蘇聖母等の像を畫き諸人に踏ましめ其宗徒か否かを検査した慣例である、それを茲には反對に轉用し、觀世音の繪像を踏まし、四郎の邪教に入れしめようとする。(島原蛙合戦の三)

【佛の手】佛手柑のこと、實は人の手のやうな形、肉白く香氣強い。

【佛も元は云々】悉多太子が躑躅駒に乗つて王宮を出で舍人車匿と別れを惜んだ故事。

【佛も元は凡夫にて】佛も生れながらの佛でなく、凡夫の修行した結果であるとの俚諺、六祖壇經「凡夫即佛、煩惱即菩提」とあるに據る。

【佛も我も十九才】釋迦が檀特山に志して王宮を出たのは十九才の時、花山帝の出家も十九才。(枕言葉の)

【時鳥いかゞ】「徒然草」に「女のものいひかけたる返事とりあへず、よき程にする男は、ありがたきものぞとて、龜山院の時、しれたる女房ども、若き男たちの參らるゝごとに「時鳥や、きゝ給へる」と問ひ試みられるに某の大納言とかや「かざならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり、堀川の内大臣殿は「岩倉にて聞いて候ひしやらむ」と仰せられけるを、これは難なし、數ならぬ身、むづかしなど定めあはれけり。(つれづれの二)

【程につきつゝ】身分相應との義、以上の句も「徒然草」の「みかどの御位は、いとまかしこし、竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやむごとなき、一人のみありさまは更なり、たゞ人も舍人など賜るときは、ゆゝしと見ゆ、その子、うまごまでは、はふれにたれど、なほ、なまめかし、それより下つ方は、程につけつゝ時に遭ひしたり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめどいと口惜し」より取る。(つれづれの二)

【程に付け】程々に加増する、適當に所領を付け加へる。(五人男の四)

【ほとびて】水に潤ふて脹ること。

【ほと〜】靜かに戸を叩く音の形容。

【程もなく誰れも後れぬ世なれども】この歌は、後撰和歌集の伊勢の詠で、只其下の句「止るは行くを悲しとぞ見る」を「止れば行くを先立つと見る」と變へて居る。(西玉母の四)

【徳長】裏白のこと、上方語。

【結毒】梅毒が全身を侵して脹れ上る病。

【骨は盗むまい】無駄骨は折らせぬ。

【ほの〜と明石の浦云々】古今集の柿本人麿の歌と俗に稱せらるゝもの。

【帆柱立】船の帆柱のやうに直立する貞。

【帆柱持ち合はさず】女身の事ゆゑ、洒落れて云はせた作者の戯れ。(雪女の中)

【懐】ほゝとは懐中のこと、子供に言ふ詞。

【ほゝ薬】含み薬。

【ほゝげたの餛飩の粉】顔の白粉を惡評した言。

【ほゝの内】胸のうち。

【頬は面】どちらにしても同じ事と云ふ喻。

【ほゝんぼん】鼓の音色。

【譽なき身の譽には】世の名聞を忘れた身の名聞には斯うした山居が結構であるとの意。(川中島の四)

【褒手もない六方詞】獨り自慢を嘲る喻、歌舞伎役者が誰れも褒めぬに、くど〜と六方詞を喋舌ること、六方詞は伊達を飾る奴言葉で、當時男伊達の一種變體な口吻。(一心五戒の一)

【海鞘】老海鼠のこと。

【ほや〜】心嬉しく燃え立つやうな思ひ。

【洞床】床の一方前面を洞のやうに塗つた茶席の床。

【堀井彌五郎】堀部彌兵衛のことか。(碁盤太平記)

【堀井彌惣】(堀部彌兵衛)一子彌九郎(安兵衛)。(碁盤太平記)

【堀江】新町の南、阿彌陀池のある地、お島の母の住居があつたらしい。(二枚繪の下)

【堀江漕ぐ云々】難波の堀江、汐汲み舟は融公の風流事、「氣の融大臣」註參看。

【堀川】 大川から北へ、堀川監獄の方への入堀。(天網島の下)

【堀川下立賣】 京都上京の西部、御所の西方に當る。

【堀川の恵比須】 大阪天満堀川恵比須神社、二十二社詣の三番。(卯月の上)

【堀河の内府】 「つれづれ」草中の人物、内府は内大臣。(つれづれの四)

【堀切】 切り開いた堀。(大磯虎の二)

【堀抜】 堀抜道、隧道。

【ほるてら】 かすてらが西班牙ゆゑ、ほるてらが葡萄牙の菓子と云つた位のところ、例の作者の筆拍子で出来たものか。

【ほるなん】 葡萄牙か。

【浮泥】 日本海上三千九百里、南海の熱島國と云はれてゐる。

【鬼神】 死神など云ふ所から思ひ付いた造語であらう、懸の神。

【母衣付】 鎧の背の、母衣を結び付けるところ。

【母衣の山車】 背に負ふた美人や美しい指傘などから

母衣の山車のやうなとの比喩、山車は祇園祭其他祭禮に曳き出す飾り車。(兼好法師の中)

【ほろ、云々】 雉子の啼く時羽打ちする音、ほろと聞こへる、ほろのほると、雪のふるとを結んで亡ぶるとなる。(反魂香の上)

【櫻樓】 ほろの屑綿。

【本悪女】 本役の悪女、真正銘の悪女と云ふこと。

【本阿彌の家造り】 本阿彌は刀劍鑑定の家元の名、真正銘本阿彌の家構へとの義。(雪女の中)

【本院】 新院に對しての稱、太上天皇二方ある時其第一の方を云ふ。

【本有一佛】 最初の根本から一佛であるとの意。

【本有圓成の都】 眞如の淨土。

【本有毗盧の法身】 本來光明遍照の法身と云ふ意、毗盧は毗盧遮那佛の略、即ち大日如來。

【梵音聲】 梵音、梵聲の略、清淨な音聲、即ち如來の音聲、又は經法の聲を云ふ。

【ほんか】 眞實か。

【本歌】 狂歌などに對する本歌即ち和歌を云ふが、こ

ゝのは、流行歌や投節などでなく、本筋の歌と云ふ義。(女夫池の二)

【本高跡下の秋の月云々】 佛徳普く布き及ぼすの意、次の化屬結縁云々と對句、太平記三十六、太神宮院宣中の文を引く。(百合若大臣の三)

【本宮】 紀州熊野本宮。

【本願 往生】 彌陀の本願に由る往生安樂。

【本家還り】 六十一年目に生れ年の子支に還り合ふ故六十一才を本家還りと云ふ。

【本卦師の卦】 師の卦は六十四卦の一つ、八卦の坤を上卦とし坎を下卦とせる卦體、卦の義理は専ら軍の事を斷りたる卦と云ふ。

【本子】 實の子。

【本語】 書物の本文。

【本小室のひんぬき】 純粹な小室節の生粹、小室節は元祿頃盛んに流行したもので、一種の馬子唄であるらしい、笠村翁の釋に、其元歌の「小室出て見よ淺間の山に今朝も思ひの煙立つ」と云ふにて、信州小諸宿より唄ひ出せしものか云々とある、本文の「さ

ても見事な……曲録するまでが小室節の唄になつてゐる。(丹波與作の中)

【梵衆梵輔大梵天少光少淨無量天】 色界十八天の内、「色界」の註參看。

【梵字漢字和字天字】 梵字は前註せし悉曇章にて所謂梵天王の作字、漢字は支那文、和字は日本、天字は篆字篆體文字。

【梵釋二天】 梵天と帝釋天。

【ほんじやり咲て匂ふた云々】 「松の落葉」に「藤内だんじり」三郎の出の文句を、少しく替へたもの。(雪女の中)

【本所】 その各の役所。

【本膳】 正式の膳立にて第一に据へる膳、二の膳三の膳と區別して云ふ。

【本然の智慧】 天然自然の智。

【ほんそう】 奔走、人が大切がること、奔走子など云ふ例もある。

【梵僧】 聖僧のこと。

【本道】 内科のこと、醫道の語。

【本詰牢】本當の牢屋、詰牢は狭小な牢獄。

【梵天】梵天王とて波羅門の造物主宰の名、天の神の意。

【梵天帝釋】梵天は大梵天王とて三界の主で、又色界初禪天の主である、帝釋は印度神話から起つた能天王で、須彌山の頂上、忉利天の天主とある、略言すると梵天は天地を創めた神様、帝釋は人間を守る神様との義。

【本天満町】今の東區伏見町二三丁目邊、今も本文の如く町幅狭く幾分か船場情調の存する處。(女殺の上)

【本土】本國の支那。(天神記の二)

【盆と正月】俗に多忙の事を「盆と正月が一時に來る」と云ふ、「十夜お祓」も同

【先斗町】京鴨川の西岸、三條四條間にある遊女町。

【煩惱あれば菩提あり云々】衆生あれば山姥もなどかは無からざるべきの文は、「山姥」の名高い句、迷ひもあれば覺りもあり、佛もあれば迷ひの衆生もある、まして迷ひの山姥もなくてはこの意。(山姥の四)

【煩惱の犬追物】煩惱の犬とかける、犬追物のやうに互ひに煩惱の埒をぐる／＼轉回するの義。

【煩惱の繩】心身を惱亂さす惑の繩。

【本繩】公けに罪人を縛るに用ひる繩の法式。

【ぼんのくぼ】頸の眞中のくぼみを云ふ、但し此處の意は昔はぼんのくぼで運不運を知ると云ふ諺によつて、運の悪いと云ふ意。(丹波與作の中)

【本の樽より生樽云々】中味より外の味、名よりも實酒よりも金との意。

【本佛堅固の阿字】根本佛(分佛の對稱)即ち淨土の主佛たる阿彌陀如來の阿の字。(義經追善の四)

【ぼんぼり】丸綿の薄ふ透ひた綿帽子の一種。

【ぼんぼり綿】婦人の被る綿帽子の一種。

【梵網經】正しくは、梵網經盧遮那佛說菩提心地戒品と云ふ、大乘律と四十八輕戒とを説いたもの、所謂戒律のことを書いた經文。

【本町筋の軒深く】近年まで本町筋のみは非常に軒が深かつた、それで大阪の方言で、おでこを稱して本町通と云ふた、其軒先の深い理由は、表で荷作りす

る(雨天でも)便宜の爲めであつたと云ふ。(卯月の上)

【本町橋】嘘や冗談でない本當と、本町橋とをかける、東横堀川の本町通りに架する橋、此東詰には昔は奉行所牢屋敷などあり、今は商品陳列所、懷徳堂などがある。

【本問孫四郎】相州の人、重氏と稱する、初め尊氏に仕へ、後義貞に屬し、有名な射術の名手、又太郎は此名を威しに借用する。(女楠の四)

【盆も正月も一時】俄に繁忙な出來事が輻輳することの喩。

【本來空】佛語、世象の凡ては假ごとで、空しくはかない物であること。

【本來空の人間、空に二つの味なし】萬物皆空、味ひにも二つはないとの義、空は食ふにかける。

【本來不色】水は本來、無色透明なる事と佛説の萬有は假空にして色蘊なしと云ふ教とを掛けていふ。(つれづれの五)

【本來無東西云々】本來空の義。

【奔瀾】大海の形容。

ま

【毎時作是念爲我令云々】 菩提を願ふ念誦の詞。
 【賣僧坊主】 僧を罵る語、商賣的な坊主めと云ふこと。
 【枚包】 一枚づつ包むこと。(大經師の上)
 【毎夜々々の死覺悟】 せかれて逢はれぬ身の、若し逢へば其日を直ちに情死の日と定めれば、毎夜死ぬる覺悟で彷徨して居るを云ふ。(天網鳥の上)
 【参りつけねど】 参り慣はねど、滅多に來りしことなけれど。
 【参る身より】 何々様参る、自分よりとある書狀の上書。(梶狩の二)
 【盲龜も浮木に逢ふ】 涅槃經の句に、一眼の龜も浮木の孔に出逢ふと云ふ義、即ち遇ひ難きことなれど又運よく出逢ふ事のあることを云ふ。
 【儲の君】 皇太子の古語。
 【設けの嫁君】 接待すべき嫁君のこと。

【妄語綺語】 虚妄の言を吐く事と、眞實に背いて巧みに言ひ飾る語、何れも佛教の十惡の内。
 【申し下す】 願ひ下げること。(壽門松の下)
 【孟母が仁】 孟子の母が、子を教へ導いた仁慈を指す。(女補の四)
 【申聞せんずれ共】 申し聞かすべき管なれども義。(女渡鳥の二)
 【孟施舍】 孟子公孫丑上に見ゆる義勇の士、孟は姓、舍は名。
 【申し捨て】 肩け捨てにして。
 【孟子と云ひし人の母云々】 孟母が愛子の學業を激勵する爲め、刀を以て機を斷つた故事。(一心五戒の四)
 【申し作し】 作り言。
 【蒙頌】 蒙賁とも云ひ尾長猿の一種、鼠など捕へることと狸猫に勝るとある。
 【申すであんすであんす】 申すで御座りまするで御座りますと云つた、鬻り氣味の詞。(天智の二)
 【孟宗郭巨】 何れも支那二十四孝中の孝子。「雪の内に竹の子」の註參看。

【まうちぎみ】 前つ君即ち公卿などの、天子の御前に侍する臣の總稱、雲上人の古語。
 【毛寶と龜】 支那の浦島太郎、白龜を助けた毛寶が、戦に敗れ江に投じたが、昔日助けた龜のために救はれたと云う故事がある。
 【まうく】 牛の鳴き聲に洒落かける。
 【眞芋】 間男の隠語。
 【間を渡し】 穴をあけず、間に合はすこと。
 【摩訶衍發心云々】 摩訶衍とは大乘の義、摩訶衍發心とは發菩提心、同發性とは佛性を開發する意、或は發性は法性の誤りとも云ふ、同眞如とは大乘教に説く眞如の妙理を云ふ。(釋迦の五)
 【雜】 店の間と落間との間の格子戸。
 【まかせて桶に】 「まかせておける」の當世流行六方詞と其儘桶に入れる事とをかける。(反魂香の中)
 【まかなふ】 取扱ふ。
 【紛はぬ花】 續拾遺「夕日影さすかと思えて雲間より紛はぬ花の色ぞ近づく」から出る。
 【摩訶般若波羅密】 經文の名、大般若經の第二分を別

に譯したる三十卷。
 【紛ひ道】 迷ひ路。
 【まかぶら】 まぶた。
 【摩訶芬陀利花】 白蓮、花中最優秀の妙色。
 【まがくしい】 誠しやかにとの意。
 【摩訶曼陀羅華】 白色の大蓮華。
 【まがらかす】 紛らかすの訛。
 【まがり】 赤螺などで作つた盃。
 【蒔繪の弓】 弓に蒔繪を施したもの、銀管の矢などと共に、當代の公卿や武官の愛用したもの。
 【巻絹】 絹の巻いたもの。
 【巻舌】 現在の下卑た意味の巻舌とは違ふ、馬鹿丁寧に詞を廻はす義。
 【まきぞへ】 巻き添へとは、他人の罪に連座するを云ふが、此處のは、入れ質に不足があれば其「足しまへ」と云ふ意味。(反魂香の中)
 【横の島】 宇治橋の西北十丁、昔は島であつたと云ふ、布さらしの名所。
 【横の戸】 袖を巻くを、横の戸にかけた、横の戸は横

の木の板戸。

【纏向】大和國三輪山の東北の山、良材を出す。

【まぎら】紛らかし。

【巻藁】射術練習に用ひる藁を束ねて作った標的。

【幕がかゝる】湯を買切つたしるしに幕をかける習俗

【幕串】幕を張るに用ひる棒杭。

【秣】馬糧。

【まくし出す】捲り出すの訛、追ひ出すこと。

【枕をたゝむ夢たゝむ云々】船中用旅行用の懐中のた

ゝみ枕から、邯鄲夢の枕、飛張房が縮地の靈杖の、

千里を胸中にたゝむと云ふにかけて、二人の長旅を

諷ふたもの。(國性爺の四)

【枕を割る】枕を砕くとも云ひ、思案にくれることを

云ふ。

【枕がへしの曲枕】木枕を澤山重さねて置き、両手で

受けつ投げつする曲藝を云ふ。

【枕付の供物】死人へ供ふる食物の類、之れを食する

と、勢力付くとの言ひ傳へがある。

【枕のお伽】夜の對手、一夜妻。

【枕の文匣】枕もとの手箱。

【枕の宮とあがまへて】枕を高ふして寝る事の出来る

天恩に感泣してとの義、「あがまへ」は、あがめるの

轉訛。

【枕の森】枕上にある森のこと。(小栗の四)

【枕箱】箱枕五つ宛を重ねて入れた箱のこと。

【枕引】兩人對ひ合ひ股を付き、枕の兩端を持ち引き

合ふ遊戯。

【枕屏風】枕元に立てる低い小形の屏風。

【まくり出す】追ひまくり出すの略。

【魔軍席の如く捲く】佛の修行を妨げんとした惡魔軍

を、通力にて席捲したと云ふ菩提樹下の故事。(釋迦

の二)

【負け海云々】勝海の海の縁語。(聖徳太子の二)

【まけ出せ】投げ出せ。

【曲げては】曲げるとは、質入れすること、質と七は

通ず、七の字の縦劃の曲れるより、名付けた隠語。

【誠を以て宿りとす】正直の頭に神宿ると云ふ諺の

義。

【誠に淺ましい哉】以下「不退快樂の都に到らん」ま

での長文が辻談議の文句。(蟬丸の五)

【誠の玉】龍女の誠の戀を龍の鬚の玉と見立て、思ひ

の玉、奇縁の玉、玉手箱とつゞける。(松風村雨の二)

【孫彦】曾孫、ひいまで。

【孫庇】普通の庇の外に、更に添へた庇。

【眞菰草】水草、はながつみのこと。

【正しかれ】何事もなかれ、凶事なかれの義。

【正なう】卑怯にも。

【正盛】平維衡の直流、正衡の子、忠盛の親に當る。

【まさり草】優るにかける、菊の異名(世繼の三)

【ましくし】ましくしやのこと、まじろぐ良。

【まじはりはかるの職】宮中の政を参り議るにて、参

議のことを云ふ。

【魔障】正道に障りをする惡魔。

【まじやう】ま正直に、眞面目に。

【眞性者】正直者のこと。

【増やろ】増賃やろの意。

【ましょ】猿をましょとも云ふ、ましらの約。

【眼目頭】目のまはりを云ふ。

【掛落】鼠を捕へるため餌を仕掛けた掛のこと。(壽門

松の中)

【十寸鏡團扇】十寸鏡の形した圓ひ團扇。

【掛掛切り】掛掛は八十八の賀、それと、掛を横に置

り切ることゝにもちる。(西王母の二)

【升形】城の廓の、狭い升の形をした箇所。

【ますげの傘】眞菅笠、菅笠で傘でないから傘の骨と

は當らず。

【ますと云ふ】居ますと云ふ。

【眞澄の鏡】磨ぎの澄み渡つた鏡。

【ませ】籬、竹や木で作つた低いまがき。

【交ます】ませ返へる、混雜すること。

【眞袖】兩方の袖のこと。

【まだふみも見ぬ】踏むと文とにかける、小式部内侍

の歌「大江山いくのゝ道の遠ければ、またふみも見ず

天の橋立」から出る。(松風村雨の二)

【杈】樹枝のまたになつたもの。

【まだ〜】まだるいこと。

【又用無心】この他に又頼む用事があるとの義。
 【まだら竹】斑竹、黄白色に黒斑のある竹。
 【まだるい】鈍し、緩し、遅しの俗語。
 【待たるゝとも待つ身になるな】人を待つことの待ち遅しいことを云ふ諺。
 【町がかり】田の境目のこと。
 【太夫達】まへつぎみとも云ふ、天子の御前に仕へる臣の總稱、雲上人の古語。
 【町作り】一と町作ること、即ち別に一劃をしつらへること。(世織の五)
 【町の名古屋の胸高帯】町で名古屋は、町では見られないの縁語、名古屋織の帯を胸高に結んだ姿の黒人らしいを云ふ。
 【町年寄】大阪各町に各一人づつ町年寄が置かれ、其町内の公事雑務を掌る。
 【町の風とは一位】町家の風とは一段上位とのこと。
 【町乗物】町人の乗る駕籠、貴人から見ても云ふ。
 【待針】縫ひ止めのしるしに刺して置く針。
 【待ちぼうけ】待ち呆け、待ち損。

【町廻りの状取り】市中の得意を廻つて委託書状を集める手代。
 【摩頂】頭を撫する。
 【松】松明の略。
 【松】太夫を云ふ、松の異名は、秦の始皇帝が松下の雨宿りの故事から出ると云ふ。
 【まつかい様】眞つ換へ様なり、正反對のこと。
 【眞向有う】正しく斯うあらう。
 【松が岡】相州鎌倉圓覺寺の向ひ側、松岡山東慶寺のこと。
 【松が崎云々】山城愛宕郡修學院村松が崎で、七月十六日の夜、相集り題目に節をつけて踊る風習がある。
 【松が崎より云々】洛北愛宕郡松ヶ崎山は、北に山を負ひ東南に開けて居る故、春初櫻花の満開が最も早いと云はれて居る、即ち松が崎を第一とし、次に二の瀬とかける。(五人男の三)
 【まつかせ】「ラツと任せ」と同じ。
 【松風も云々】諺曲「松風」を指す。(吉岡染の上)
 【松皮】松皮菱の略梅川の紋どころ。(冥途飛脚の下)

【松が鼻】牧方の西南の村、淀川に臨む。
 【松川の奥とゞきの淵】伊豆の國の地名。
 【松川の淵云々】伊豆國松川とゞきの淵に、頼朝の子を柴漬にした事。(虎が磨の上)
 【まつかへさま】正反對のこと。
 【睫毛に集をくふ術】妖術魔術に長じたる事の義。
 【睫毛の如く】秘事は睫といふ諺、「諺草」に「睫は目の側にあれば見えざる如く、世に秘傳といふ事を聞かば易き事ながら習はざれば知り得ずといふ意なり。(つれづれの四)
 【睫讀まる】阿呆扱ひにされること、睫は自分の身にありながら見えない故に云ふ。
 【待つこともなき柴の戸】名譽富貴は勿論、淨土往生すら期待する事もなくとの意。
 【末期の水】臨終の人に與へる最後の水、死水のこと。
 【貧しき家には故人疎く】本朝文粹、橋在列の詩に「家貧親知少、身賤故人疎」とある、曾我の貧居に故舊知親も寄り付かぬことの意。(會稽山の一)
 【松下御寮】時頼の母は名高い賢女松下禪尼、其嫁御寮と云ふこと。(最明寺殿の下)

【末書】註釋書を云ふ。
 【まつ直が聞きたい】眞實の話が聞きたい。
 【末世の美人】末代かけて第一の美人。
 【まづそれより】先づそなたより。
 【松竹の】松は近松、竹は竹本の隠語。(天智の四)(虎ヶ磨の下)
 【松竹の】吉例の通り近松と竹本竹田にかける。(雪女の下の)
 【松竹の齡も盡きず】松は近松、竹は新座主竹田出雲と竹本とを含まず。(用明天皇の五)
 【待乳山云々】以下の地名は「道行」の巡路ではなく、文飾の都合で各國に飛び廻つて居る、例へば待乳山(紀州)黒髮山(下野)勝間田池(美作)三芳野(大和)の如し。(千匹犬の四)
 【先づ東海道十五國】以下、日本國名盡しに佛教味を加へたもの。(いろはの一)
 【松とし聞かば云々】行平の詠歌、古今「立わかれないなばの山の峯におふる、まつとして聞かば今歸り來

ん、これは史實によると、因幡守の任終つて歸洛の際に詠んだもの。

【松と棕櫚との連理の森】 曾根崎の森に、松と棕櫚との連理相生の奇木があつたことは、享保四年板大阪圖にある、「曾根崎心中」解説參看。(二枚繪の下)

【松に時雨】 松に時雨は色かへぬの意。

【松にも花を春日山】 藤の花が松にからんで咲くと、花を貸すにかける。

【松の尾】 葛野郡、嵐山の南、京から西南二里、雪、月の名所、松尾神社あり。

【松の門立云々】 女郎が門に立つて客を待つを「門立」と云ふのを、此處には上品に轉用して居る。(反魂香の上)

【松の中】 太夫の中。

【松の藤波】 松の枝に波打つやうに靡きかゝつた藤の花。

【松の實】 松露。

【松の雪暖氣なる云々】 源氏末摘花にある句。

【松葉煙草】 待宵にかける、本邦で名高い煙草葉の一

種、磐城國松川葉の煙草を云ふ。(山姥の二)

【松は萬代云々】 松は近松、竹は竹田、竹本をもぢつた例の手法。(娥の五)

【松囃し】 松囃子は正月の儀式の一つ、足利時代に始り、今は京都本願寺にも遺つて居ると云ふ、鼓又は笛で囃し立てた拍子もの。

【松葉山】 美濃國にある。

【松葉山】 尾張國にある。

【松原】 今の京、五條通の北、即ち昔の五條通。

【松むしり】 形小、全身灰色の鳥。

【松前】 北海道渡島國の館の別名。

【松本】 近江逢坂山下の海濱。

【松本の里】 信濃國の一邑。

【松山】 伊豫の都邑、舊稱勝山。

【松山】 末の松山のこと、陸前國宮城郡の海濱にある山、古今「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ、末の松山浪こさじとは」。

【松屋町】 大阪天神橋筋の末吉橋筋以南の町名。

【待つ夜の鐘、別れの鳥】 待宵の待従が、近衛帝の皇妃

多子の君に、待宵と後朝と何れが苦しきかと問はれた時「待宵に更け行く鐘の聲きけば、あかぬ別れの鶏

はものかは」と答へたと云ふ故事から出る、外に、

物かはの藏人と、應答の異説もある。

【松浦川】 肥前國松浦山下を流る。

【松浦佐用姫】 欽明帝の朝、大伴佐提彦、高麗征伐に出征するを、妻佐用姫が別れを悲しみ、松浦の山で衣巾

を振つて歎ひたが、其一念が石となつたと云ふ傳説。

【末利夫人】 舍衛城主波斯匿王の夫人、迦毗羅衛の長者摩訶那摩の養女。

【松若緑梅時節】 松は太夫、若緑は禿、梅は天神。(壽門の松の上)

【まてばしる】 櫛の一種、實は食用。

【まどしきさ】 まどろしきさ。

【窓の内雪の光】 螢雪の修行を云ふ。

【窓の梅の北面云々】 朗詠集「池凍東頭風度解、窓梅

北面雪封寒」の句による。

【窓の格】 窓の横木。

【的場】 弓術の稽古場。

【まどひ】 罾、陣所の標としたもの。

【經】 竿頭に飾りを着け、下に馬簾を垂れたもの、本部所在の標。(吉岡染の中)

【經奉行】 防火に關する奉行人。

【惑者】 半端者、疵者。

【まどふ】 辨償、上方訛り。

【眞魚板】 魚を料理するに用ひる臺板。

【間なく隙なく心なく】 雪は間斷なく思ひやりもなくドン／＼降ること。(烏帽子の二)

【まなご】 眞砂の轉、古語。

【眼の内は八角】 俗に怒る時は、八角の目をむくと云ふが、角立つた眼色の形容。

【眼はさ鉢】 さ鉢は血鉢、皿のやうな巨眼に喩へる。

【眞字】 漢字の音を借つて和語に當て用ひたもの。

【眞魚箸】 魚の料理する際使ふ箸。

【學んで知るは智にあらず云々】 人間天性の美德の偉大な力を説く。(小栗の二)

【間に合筵】 間に合はせの急製筵、後先の繩も括つて

ないこと。

【摩尼山】 須彌山中の一峯。
 【まねき】 烏帽子の頂、三角形のひれ。
 【眞野】 近江國坂本の北、堅田の南にある。
 【眞野の長者】 眞野は豊前國の地名から取る。
 【廻される】 愚弄される、まぜ返へされる。
 【廻し】 こゝは金の融通、商ひのことを云ふ。(壽門松の上)
 【廻し者云々】 間諜と、禪との錯誤。(歌念佛の上)
 【馬膚】 鞍の輪の名所。
 【まばゆからぬ】 差しがらぬこと。
 【廻らさ】 廻らなんだら。
 【廻金】 融通金。
 【廻りの強い花車】 金の油で滑動する花の車、花車(揚屋女)にかけて云ふ。
 【廻り様がさうでない】 執り廻しがそれと反対で情がないこと。(會稽山の三)
 【間目】 曆の八專の間目から轉じて、休み日の意に用ひる。
 【まひごみ沙】 堤坊などから風に吹かれ落ち込んだ土

砂。
 【ま一つ二つ】 以下は手毬唄。(大經師の上)
 【まひく】 舞舞、扇拍子で舞ふもの、幸若舞の類。
 【まぶ】 礮山の坑を云ふ。
 【舞ふ勢】 舞手の群。
 【情夫こそ沙の満子】 情夫にも潮のさし引きがある。(反魂香の上)
 【舞ふたり】 内の整理や節季の拂ひや、又商賣をせねばならず、立つたり舞うたり、多忙などの義。(女殺の上)
 【まぶつて】 守つての訛。
 【まぶる】 守る、注目され、見詰められる。
 【前書きの話】 本文の前に書き添へるまでの話、ほんの用心だけの話。
 【前髪】 童のこと。
 【前髪さかり】 若衆盛りを云ふ。
 【前髪どの】 丁稚のこと、頭の前髪が特徴ゆゑに呼ぶ。
 【前句附】 下二句を題として出し置き、上三句を付けさせるもの、これが轉化して笠附となつたもの、但

し此等は徳川時代に於ける流行で、無論延喜朝のことではない。
 【前歴折り云々】 禮拜する貞。(五人兄弟の一)
 【前相撲】 幕の内より以下の相撲の稱。
 【前垂鑑】 遣手は赤前垂と巾着と鑑とを腰に提げて居たゆゑに云ふ。
 【前垂質に置かう】 仲居の杉は、大事の看板の前垂を質代にしゃうとの義。(女腹切の中)
 【前垂のなごり】 餅搗の時、前垂して白どりする故、それでお宮の前垂を連想する。(反魂香の中)
 【前垂奉公】 町家の下女奉公。
 【前びろに】 豫め。
 【前ほろ】 轡鼻禪の前の方。
 【前輪】 鞍の馬頭に向ふた方の稱。
 【前渡り】 前面を來往すること。
 【まぼり】 守りの古語、見つめる。
 【まゝごと】 子供の遊戯、御飯ごと、まゝはうま(旨)の略で子供が飯を呼ぶ言葉。
 【まゝよと流す】 氣に懸けずにあきらめる。

【蝮蛇の針】 蝮蛇は、商に大毒ある蛇の一種、その毒牙の針と云ふこと。
 【まめ】 まめくし、まめやか、壯健の義。
 【豆板】 小玉銀、豆銀、粒銀とも云ふ。
 【豆打つ】 節分に鬼に豆打つ。
 【豆を煮て豆の豆箕を燃く云々】 兄弟不和の喻を云ふ、「煮レ豆燃レ箕、箕在ニ釜底一然豆在ニ釜中一泣、本是同根生云々」
 【まめしげ】 まめやか、忠實、業平をまめ男と云ふに因む。(井筒業平の二)
 【まめ鳥】 まめまはし鳥のこと、豆を啣むと、嘴で旋轉するより名付ける、口まめ鳥は、口まめ即饒舌にかける。(會稽山の二)
 【まもの緒】 眞中の緒。
 【守經】 身の守りに懐中する經卷。
 【守目】 守護の役、目付け人。
 【守目】 神佛守護の靈驗のこと。

【守り目も盡きる】守護の功験も盡き果てる。
 【摩耶が城】攝津國摩耶山の城、赤松圓心の據守した所。
 【摩耶ヶ嶽】攝津國にある、山上に初利天上寺がある、本尊佛は摩耶夫人傳來のもの云ふ。
 【摩耶夫人】印度拘利城主善覺王の女、淨飯王に嫁し釋尊を産み、七日にして崩じた云ふ。
 【摩耶夫人經】摩耶夫人は、印度淨飯王の後、釋迦の母。
 【眉を木炭に】眉に木炭の墨を入れて美しくする、化粧法の一。
 【眉ぐもり】眉にくまあること、薄眉毛。
 【眉鑷】眉毛をぬくに使用する毛ぬき。
 【眉毛濡せ】狐狸に欺されぬ呪ひに眉毛に唾液つける風習を云ふ。
 【眉毛の塵】物の数とも思はぬ喩。
 【眉繁り】眉毛蓬々と生ひのびた良。
 【眉垂るゝ】眉を剃ること。
 【眉に火の付く】焦眉の急、眉に火の付く計りの危急

なこと。
 【眉根掻き鼻火紐解け云々】萬葉「眉根掻き鼻火紐解け待八方何時毛將見跡戀來吾乎」戀人に逢ふ前兆の意。
 【眉の下降る時雨】落涙のこと。
 【眉の八彩】聖人の眉を云ふ、「堯眉八彩、舜目重瞳」などである。
 【眉輪の翁】正史の眉輪王は大草香皇子の子で、安康天皇を弑した人。(浦島の二)
 【迷ひ行けども松山に】「…眼も當てられぬ風情」までは、一中節の「枕久狂亂道行」に見ゆる文字である、無論近松の作で、これを文彌節で語らせて居る岡本文彌の唱へはじめた柔かな哀婉な調子を特色としたもの、金平まがひの豪壯な道具屋節の後へ、悲しげな泣くが如く訴ふるが如き文彌節を配して居る。(天網島の上)
 【鞠垣の六綱】鞠の遊びの時、鞠の外れ出ぬやうに張る綱。
 【鞠子川】相模國、湯本の邊を流る。
 【摩利支尊天】帝釋天の眷屬にて日天に附隨し、其前

驅となつて巡行し、護國護民の職分を盡くす、神通迅速にて其形も認められぬ程だと云はれ、日光の神格化されたものだとして稱せらる、古來日本武士道の守本尊となつてゐる。
 【鞠の曲】鞠けりの曲藝輕業。
 【丸】城の廓内の稱なれど、これは彼處此處の要所と云ふ義に用ひて居る。(千匹犬の四)
 【丸い芋桶に角の蓋】びつたりと合はぬ、ちぐはぐの響。
 【丸枷】圓形のかせのやうなもの。
 【丸龜】讚岐國名邑、金比羅神社へ三里の地。
 【丸ぐけ】圓くゝけて、中に綿を入れた細帯。
 【丸ぐち】全く、スツキリ、其形其儘のこと。
 【丸腰】佩刀のない素腰のこと。
 【丸太】比丘尼の坊主頭を罵つた語。
 【丸太船】丸木船。
 【丸太船】比丘尼船の洒落。
 【楹檮】實は木爪に似て圓く、砂糖漬とする。
 【丸綿】綿帽子の一種。

【丸綿帽子】綿帽子の一種。
 【まれの夜】稀に逢ふ夜。
 【客人ざね】ざねは特に其主を重んずる意を表すため、ある語の下に添へる接尾詞。
 【まろがせ】塊、かたまり。
 【萬葉假名】漢字の音訓などを借りて國音を表はした假名、萬葉集に用ひてから、平假名片假名に對して云ふ。
 【萬葉集】大伴家持の撰に係る我邦最古の歌集、二十卷。
 【まんがち】先きへ出しぬくこと、自分勝手。
 【まんがなほる】仕合はせが直る、まんは番にて、廻り合はせの義。
 【萬戸】唐の太宗皇帝の勅使として來朝せる身丈八尺に余る朱面大軀の勇將と稱せらるゝ萬戸將軍雲宗のこと、こゝは舞曲「たいしよくわん」の文による。(女護島の三)
 【萬戸が珠】萬戸將軍が面向不背の珠を龍宮の龍女に奪ひ取られた故事「大職冠」に註あり。

【万古この由聞くよりも云々】 舞曲「たいしよくわん」の文。(女護島の三)

【萬歳傾城】 萬歳のお極り文句の「誠に目出度ふ候ひける」を、侍に足蹴にされた傾城ゆゑ「侍ける」と罵倒したので、以下の伊左衛門の詞に明白である。(夕霧の上)

【萬歳樂】 普通は舞樂の平調曲の一種、陪煬帝、太樂令白明達に命じて作らせたものと傳へる。

【曼陀羅供】 五秘密の曼陀羅を中心として修する法會。

【曼陀羅華】 天妙華、適意華、白華とも云ふ、美妙な色、異様な香を持つた花。

【曼茶羅寺】 讃岐國仲多度郡吉原村、(七十二番札所)。

【饅頭肌】 ふつくりと柔かな肉付の肌。

【饅頭菓子】 芝居前の水茶屋で、茶に饅頭菓子の類を賣つて居た。(二枚繪の上)

【萬燈院】 大阪の天王寺内にある紙子堂のこと。

【萬燈院】 仁王門の西手、道長の萬燈會を修した處。

【政所の別當】 鎌倉幕府の政所、檢非違使の長官。

【萬日】 萬日供養、長い日數供養すること。

【萬年草】 高野山奥の院に多く生ずる苔の一種、旅人の生死安否を占ふに、この草を鹽水に浸すと、葉開けば其人無事、凋む時は凶事との俗説がある。

【萬年曆】 永代曆のこと。

【萬年町】 今の南區谷町六丁目空堀の邊の舊町名。

【萬能一連物】 萬能一心にもぢる、萬能足りて一心足らずと云うこと、即ち萬藝に通ずれど德行治まらずの義、萬能は先の平たい鋤のこと、一連は一對。(水朝日の上)

【萬はい日】 曆日の稱、萬倍日、一粒萬倍の日、この日物の種を蒔き、財寶をかす等によしと云ふ。

【萬病回】 萬病に功能があると云ふ丸藥の名。

【まんま】 まんまと、うまくと。

【まん誠】 ま正直。

【まん待ちや】 先づ待てよと云ふ兒童語。

み

【身揚り】 遊女自身に揚代を自辨して、其日を自由に休むこと。

【見合ひ次第】 見付けしだい。(淀鯉の上)

【御生】 山城國加茂神社の稱。

【御生野】 山城加茂の野。

【みあれの森】 加茂御阿禮山の森。

【身一分】 一身の面目。

【實入】 實収入のこと、女郎なぞより正味ぢやと云ふ意。(淀鯉の上)

【身請の衆云々】 身請けされ廓を出るに付ての手續きを説明したもので、第一に置屋の主人の承認を得、廓の宿老(年寄役)の認許を受けた後、月行事(樓主毎月交替にて勤むる月番のこと)から大門を出る證札を貰ふて、初めて廓外に出ると云ふ順序。(冥途飛脚の中)

【身請の幫間】 身請の取り持ち。

【御内衆】 みより、親族。

【巳午】 方角にて、東南に當る。

【巳午】 見ぬ間の地口合。(壽門松の上)

【三浦】 相模國の豪族。(世繼の一)

【御影】 頼朝の靈像。(最明寺殿の上)

【御影】 こゝのは面影の意に用ひられる。(反魂香の下)

【御影堂】 京都五條橋の西、扇屋で名高い所。

【見えいろ】 見へないか、九州訛。(博多の上)

【身をうつ】 身を滅す。

【身を賣る品云々】 刀屋は刀身を賣る、女郎も身を賣る。(女腹切の上)

【身を知らず】 身の程を知らず。

【身を知る雨】 來べき人が雨の爲に來なくなつたを、待つ人の心には、雨が我が身の幸不幸を支配するやうに思はれて云ふた詞である、即ち身の上を知る雨の義であつたが、轉じて涙の異名となつて居る。

【身を捨つる藪】 「子を捨つる藪はあれど身を捨る藪

はなし」との諺の、例の反語。

【身を縮む】 恥かしそうに肩をすくめる良。

【湊標】 水の深淺を知る爲めの木標で、現に大阪市の

記章にも用ひられて居る、古歌にも多く用ひられて、

難波津の枕詞のやうになつて居る。

【身を冷す】 寒心、ひや／＼思ふ。

【身を持って】 身持をよくして。

【實がいれば仰向く】 喉元過ぐれば暑さ忘るゝと同

義。

【御垣が原】 禁裏御垣のほとり。

【御垣の里】 城廓に近い里と云ふこと。(日本武の二)

【御垣守云々】 詞花「御垣守り衛士のたく火の夜はも

え、ひるは消えつゝ物をこそ思へ」、御垣守は禁裏の

門の垣を守る衛士。

【御影石】 花崗石、昔は攝津御影から多く堀り出して

有名なもの。

【三笠山とて飴賣】 飴屋の傘の縁。(大織冠の四)

【味方の矢種】 敵の矢が疵も付かずに味方の物とな

る、所謂糧を敵に求むるもの。

【身勝者】 身勝手、自分さへよければよいといふ自分

勝手の人。

【三日月骨】 三日月形をした骨。(馬相)

【瓶の原】 木津の東北一里、昔瓶を埋めたに、それに

川水流れ込んで湧き立つたとか云ふ、新古今に「み

かの原わきて流るゝ泉川、いづみきとてか戀しかる

らん」。

【三河に染めし杜若】 業平東下りの途次に寄つた三河

八つ橋杜若の名所。

【御溝水】 皇居の御垣を廻らす溝。

【御薪木】 御籠木の義、正月十五日に百司百官が宮中

に奉る薪の稱、「百敷の司のみかま木に民の煙も賑ひ

にけり」の古歌から採る。

【御狩車の五つ緒】 御車籠の緒、仁義禮智信の五常の

道にかたどりたれば云ふ。

【三段】 三つに分つこと。

【三木とつらねし云々】 「武隈の松は二木を都人いか

どと問はゞみ木と答へん」と詠んだ橋季通の歌のこ

と。(反魂香の上)

【三杵】 穀物餅など、杵で搗ひたもの三品との意、極

めて輕微な供へ物で事足るとの神慮である。(天智の

五)

【右の手の三脈】 古來支那傳來の吉凶判断三脈術のこ

と、右手の指にて頸動脈を觸知し、更に左手にて右

手の脈を同時に押へ、吉凶を判じる法で、三脈同時

に打てば無事息災の兆だと云ふ。

【打勝り】 目立つて勝れること。

【右左振と詰云々】 右は振袖の儘の娘風、左は詰袖の

女房ぶり。(歌念佛の中)

【右や左の云々】 雙の腹這ひの妙な形から「右や左の

且那樣」と云ふ乞食の聲色を使はしたものらしい。

(日本武の四)

【みぎり】 其在る場所を云ふ、賢王のみぎりとは賢王

の在る所、龍王のみぎりとは龍王の在る場所。

【砌】 階下又は簷下の石たゞみ。

【三草河原】 播州加東郡。

【御首】 首の尊稱。

【三國の町】 三國は越前の遊里、町は遊女の名。

【三熊野本地の三尊】 熊野權現は垂跡ゆゑ本地の佛は

別にある、即ち、熊野本宮は本地阿彌陀、新宮は本

地薬師、那智は本地觀音である。

【見苦しき沙汰云々】 心中の場合、女が死んで男が生

き残つても、其男は刑により殺されたことを指す。

(重井筒の下)

【御教書】 將軍家、關白などから下さる公けの文書の

稱。

【見けつかれ】 見やがれ、見おれ、の大阪詞、明石の

田舎男が粹がつて、却つて訛りを暴露したことは、

本文の通り。(二枚繪の上)

【未決定】 未だ到らないこと。

【三毛の唐猫】 猫の毛色の上種で、白毛に黒と褐色と

の斑の混じたもの。

【眉間尺】 支那の名劍匠干將の子、身長一丈五尺、五

百人力、額三尺、眉の間一尺あつたと云ふ、父の仇を

報ずるとて、口に劍を啣みて死し、其首を、敵の楚

王が實験の時、忽ち含める劍を楚王の面に吹きかけ

たと云ふ故事。

【眉間尺 三巴】 支那名劍匠千將の子の眉間尺のこと
は、既に前項に註した、其眉間尺は父の敵楚王に報
ひん爲め、我が頭を刎て、知己甌山人に渡す、甌之れ
を王に奉る、王之れを煮たが爛れず、甌、王の頭を
切つて自刎する、この三頭湯の中に喰ひ合ひ、三巴
になつて争ふたと云ふ故事。

【獼猴が帝釋天を嘲る】 痴者が賢者の心を覺らないで
嘲る譬。

【見越が嶽】 相州駿州の國境の山。
【見越入道】 身長の馬鹿に背高い頸の長い大坊主で金
棒など杖にした妖怪、こゝは辨慶を指す。(孕常盤の
一)

【水籠り】 水中に隠れて明かに見へぬあたりを云ふ。
【見殺したる者】 見送りし者、先に死なした者。
【御先】 先驅、先きを拂ふこと。

【津寺津照寺】 土佐國安喜郡室津浦の津寺、津照寺は
其別名(二十五番札所)。
【御さき被】 御潔拂(みそぎばらひ)のこと。
【鵝】 形意に似た鵞の一種。

【水鏡江】 水さびの浮べる江水。

【みさび江の底の云々】 水鏡江のことにて、水鏡の浮
いてある江を云ふ、胸の中はいかに響に悶え狂ふと
も深き思を他人に知らず事ではないとの意、「新續
古今集」に乗せたる兼好の歌。

【御侍御笠】 古今集東歌「みさむらひ御笠と申せ宮城
野の木の下露は雨にまされり」から出る。(蟬丸の
三)

【身さんばいよし】 身三昧の訛、身體の動作三昧に輕
快なと云ふ意。

【短き芦の津の國】 新古今「津の國の長らふべくもあ
らぬかな短き芦の世にこそありけれ」による。

【みじかし】 氣短かしの略。
【短かし】 短慮なり、氣が短かし。
【見じと云ふ人こそ云々】 菅家後集に「山里の折かけ
垣の梅の花いかなる人の見じといふらん」による。

【三島】 伊豆國君澤郡、三島神社の所在。
【三島】 伊豫越智郡宮浦村光明寺所在、三島の別宮(五
十五番札所)。

【三島曆】 鎌倉時代の頃伊豆三島神社下社家川合良節
から出した曆、伊豆相模兩國にのみ行はれたもの。

【三島路】 伊豆三島への街道筋。
【三島女郎衆】 伊豆國三島町にある色里の女郎。

【身仕舞】 身仕度、身づくろひすること。
【未生以前】 生れぬ前、こゝではいつの昔の義。(丹波
與作の中)

【みしやりぞ】 誓ひの詞、身はしやりこらべ(懶體)
とならふと儘との意、「身しやり癩病」とも云ふ。

【みしらした】 見知らした、ひどい目に逢はせたとの
義。

【見しらす】 眠ること。
【見知り越し】 物は言ひ交はさぬが顔は見て知つてゐ
る。

【未進】 年貢未納のこと。
【微塵骨敗】 こなみぢん。
【御隨身の侍】 近衛の合人のことを云ふ。
【みすがら】 一本立、身一つ、身柄一本との義。
【身過の種】 生計の元手。

【三筋】 新町の廓の重なる三つの町筋、中央通の飄箆
町、(今の新町通り一丁目二丁目)と、其北の九軒町
即ち佐渡屋町(今の新町北通二丁目西半)及び飄箆
町の南の筋越後町(今の新町南通二丁目)のこと。

【三栖の里】 伏見の西南、みすや針を始めて作り出し
た地。

【三角寺】 伊豫宇摩郡金田村(六十五番札所)。
【みすや針】 京都三條通河原町東、翠簾屋針店の賣出
す名産の針。

【見せをあげつ】 店の床几などたゝみ上げる、戸じま
りの用意。

【見せさし時】 店の戸を鎖す、夕暮時。
【みせしめ】 「令見」の義、懲戒、世に懲らしめの爲
め罰して見せるの意。

【身せせり】 身體をウジ／＼動かし尻ごみなどする
貞。

【見世女郎】 太夫、天神の次にある端女郎の總稱。
【見世の焼物に天神様】 陶器製の天神の水入。
【身狭、棲高、桁短か】 禿の着付けを云ふたもの。(世

繼の五

【みせん山】 彌山、嚴島神社の後に聳える。

【彌仙の嶽】 安藝國嚴島神社の背後の山。

【味噌糟坊主】 坊主を罵る語、味噌すり坊主に同じ、別に註せり。

【御衣木】 佛體を作る原料の木。

【鷓鴣】 の分として鷓鴣を嘲弄す。小鳥の分際で大鳥を嘲ることを云ふ、繪合姫を女性的な鷓鴣に喩へる、

鷓鴣は支那の想像の大鳥で翼の長さ三千里あると云はれて居る、これは宗房自身の譬。(千匹犬の二)

【味噌汁淵をなし魚より驚く云々】 膳部の覆つて亂れ散つた形容、詩經の驚飛んで天に尺り魚淵に躍るの句から採る。(川中島の三)

【溝萩】 七月頃溝に咲く萩に似た草花、盆に佛前に手向ける、見ずにかける。(水朝日の下)

【味噌豆白】 大豆などを搗く白。

【三十字餘り云々】 三十一字の和歌と若狭をもちる。(用文章の三)

【燐酒】 燐酒は何れも奈良の名産。

【みぞろ池】 美曾呂池、山城國鞍安大路、幡枝村の南、

周廻十八町、みぞろは泥濘(みどろ)の轉訛かとも云ふ、御菩薩(みぞろ)とするは昔行基上人が、此池の面に正身の彌勒菩薩を拜したと云ふ傳説に由る。

【御臺所】 政子を指す。(會稽山の二)

【御嶽】 吉野山の一名金が御嶽。

【彌陀十劫正覺】 彌陀佛まだ法藏菩薩の時、四十八願を起して衆生を濟度しやうとした、其願成就して今から十劫の昔に佛と成つたことを云ふ。

【見たて】 見送る。

【見た手】 覺へのある書風との義。

【見立てる】 品評される、所謂棚おろしされること。

【彌陀の利劍】 利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除と云ふ語がある、彌陀の利劍は何物をも斷つ事が出来ると云ふ。

【身だまんじり云々】 自分は夜もすがら、まどろまれずとの義。(博多の上)

【みたらし川】 下加茂神社、東清水の井から湧き出る小川。

【亂れ】 「狸々」の小書にて、舞が亂の舞になる、斯道の八かましもの、此處に云ふのは酒酔で足並の亂れる事を洒落て云ふ。(淀鯉の上)

【亂れ小柳云々】 船唄。(浦島の四)

【道ある君】 道徳秀れたる君。

【道こそなけれ思ひ入る云々】 千載「世中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる」による。

【道芝の露の値】 道中の費用の義、露は金錢の別稱。

【道通り】 通行の人。

【途に棄てたるを拾はず云々】 道不レ拾レ遣の句意で、田夫も樂しく暮らすと云ふ太平の世の喩。

【道に背きて道に當る】 不忠が忠となり、不孝が却て孝となるやうな場合を云ふ、理外の理の意。

【道の記】 道中日記、旅行案内記の類。

【陸奥育の荒駒】 陸奥の牧育ちの悍馬、陸奥は有名な牧地。

【道の道たる御政法】 嚴正な政道を云ふ。(世繼の五)

【道果】 歩む行程、道のはかどり。

【みち〜】 みし〜、みつちり、つく〜。

【道もせに】 本來は道も狭にであるが、いつか道の面の義に訛用されて來た、こゝは後の意で用ひてゐる。

(丹波與作の下)

【道分けの石】 道標の石、俗に云ふ立て石。

【微塵怪もない】 少しも異りもない。

【微塵に茄子眞桑瓜】 これは、微塵に成す、眞向判にかけたり、以下百性なればとて、畑もの盡して描ひて居る、西瓜の戦は水火、水の粟は泡と云つた如し。(兼好法師の中)

【水揚げ】 遊女が初めて客に接する事を云ふ、これは商人が初荷を船から船揚げ即ち水揚げして、客に勧めること云ふ事柄から、轉用された廓詞。

【水揚分の口開き云々】 初出の女郎を第一着に呼ぶこと、水揚の事は別に註せり。(吉岡染の中)

【水入らず】 水の入れやうもない親密な間柄。

【三つ鱗】 相模入道高時の紋所。(千匹犬の三)

【三鱗】 三角形が三つ、上が一つ下が二つ、そして全體が又三角形になつた紋所の名、北條氏の家紋。

【水を替るが如く】 とつかけひつかけ間斷なく運び出す

す險、水門に因む。(吉岡染の中)

【水を切つたる如く】 斬り方の水際立つた形容。

【水をくれる】 こゝは水責のこと。(反魂香の中)

【水を取れ】 こゝは末期の水を取れの意。(虎が磨の中)

【水尾の袖】 丹波國桑田郡水尾大明神の祀れる山。

【水をく】 末期の水を取つて貰いたいとの意。(夕霧の下)

【三つ鉄輪】 鼎の足のやうに三人向ひ合はせを云ふ。

【水機關】 水力を利用したからくり細工。

【水際】 命の際にかける、花道の用語。

【みつぐ】 援助、應援すること。

【三櫛】 梳櫛、鬢櫛、水櫛の三種。

【水櫛】 齒の荒ひもの、水に浸して用ひる櫛。

【三つ具足】 三物具足の謂、佛前などの花瓶燭臺香爐を一揃へととして云ふ語。

【水汲み】 飲用水を川端に下りて汲み上げる人夫等。

【水車云々】 つれづれ草に「龜山殿の御池に大井川の

(今宮心中の上)

水たまたらねば云々」

水をまかせられんとて大井の土民に仰せて水車を作

らせられけり。(つれづれの五)

【水車横車云々】 以下棒の術の曲名づくし。(雪女の

下)

【貢のため】 給養、仕送りして助けるため。

【水子】 生れたまゝの赤子。

【水懸鳥】 かはせびとも云ひ深山魚狗の異名とも云ふ

が、不明。

【密嚴究竟の境】 約言すると、清淨圓滿の境、無上至

極の淨土と云ふ義。

【密嚴華藏】 密嚴淨土華藏界を云ふ、何れも極樂淨土

の義。

【みづし】 水仕事、下女のこと。

【水仕の荒仕事】 荒くれた水仕事。

【御厨子の鉄刀】 御佛の加護に倚るの意。

【水鳥】 備中の南方海上、二つの小島を云ふ。

【三瀬川絶えぬ涙云々】 以下「……連ね給ひし松ヶ枝」

まで、諸曲の「松風」の文による。(松風村雨の三)

【水たまたらねば云々】 國花萬葉記に「兎に角に頼みし

桶の底ぬけて水たまらねば月も宿らず」を探る。

【三つ地五つ地】 小鼓を打つ手の名目。

【菊石面】 大阪でみつちや、東京ではあばた面。

【水茶屋】 こゝは道頓堀芝居前の茶店を指す。(二枚繪

の中)

【承控】 手綱を付ける轡のわな。

【三つづつ十と三つの里】 三十三番觀音の札所と、大

阪の別名三津の里とをかける。(曾根崎心中)

【水鐵砲】 唧筒のやうに水を弾き出す玩具の稱。

【三津寺正八幡】 大阪島の内木綿屋橋東にある、二十

二社詣の十番。

【水と火との相性】 水と火は相尅にて凶。

【三つ巴太鼓の御門】 三人の額を三巴に喩へ、巴御前

の名と太鼓の巴の紋とにかけ、太鼓から御門を連想

し、御門は御紋に、短句の内に二重三重の縁語をか

らませてゐる。(會稽山の一)

【水菜】 京都名物、殊に東寺近在のを第一とする、流

水の中に圃を作つて裁へて居る。

【水なき井戸は梯子の入物】 廢物利用節儉法の輕妙な

比喩。(博多の上)

【水に近き樓台は先づ月を得る云々】 蘇麟呈ニ范文正

公一詩に「向レ陽花木易レ爲レ春。近レ水樓台先得レ月」

から探る。

【三つの鱗形】 北條氏の紋所。

【三つの緒】 三味線のこと。

【水尾】 山城葛野郡水尾村、清和天皇御陵のある地。

【三津の大岸】 難波津の三津の濱、難波のこと。

【三の鐵輪】 三つの足ある鐵製の具、五徳なり、此れ

を頭に載せ三本の蠟燭を立てる、其火が燃へ居るを

云ふ。(蟬丸の一)

【三つの車】 佛教では羊車鹿車牛車の三車の稱、法華

經譬喩品にある、この三車が變じて一の大白牛車と

なり火宅を救ふと云ふ喩。

【水の月とる猿澤】 猿が水の月を捉へると云ふ故事

の、する甲斐もない心持の縁用。(天智の三)

【水の流れと云々】 「水の流れと人の身の行衛は分ら

ぬ」との諺。

【みつの難波の里】 三津は難波の古名、里とは遊里の

こと、即ち新町を指す、直下に見つと云ふは新町を揚げた詞で、朱雀三谷も何のその、眼下に見おろす難波一の遊里と云つた意。(淀鯉の上)

【三津の濱】 高津、敷津、難波津を云ふとあるが、要するに難波の濱邊。

【三つの春】 年、月、日の三つの初春。

【みつの御寶】 唐土渡來の三寶と、満つる意にかける。

【水は石が鑽にあらずして云々】 枚葉が吳王を諫める書中の文で、微弱な力も時間を積むと莫大な力となることを喩へたもの「泰山之霤穿石、彈極之縋斷、餘、水非三石之鑽、一索非三木之鋸、云々」。彈極は使ひ盡くすこと、縋は釣瓶繩、餘は井桁。

【瑞齒萌】 老人の齒ぬけて、又新に小さい齒の生ずるのを言ふた古語、後撰「年ふれば我黒髪も白川のみつばぐむまで老いにけるかな」。

【水は濕】 同聲相應じ同氣相求む、水は濕に流れ雲は龍に従ひ云々とある易經乾卦の文言から出る。

【水鉢】 手水鉢。
【水彈】 水鐵砲。

【水離れせぬ云々】 親の手元を去らぬ、即ち箱入りの意、姫お龜の縁語。(卯月の上)

【密法】 顯教に對する密教の教法、此教法は大日如來より傳へられ、日本では主として空海に由つて傳來されたもの、高野山は其學林たり又道場であつた。

【三つ葉四つ葉】 葉は端、端は間の義、幾棟もく重疊する形容。

【水引】 水引幕、劇場の棧敷の上に張る。

【水蔭】 鬼蓮のこと、逝きて返へらぬ水に喩へる。

(宵庚申の下)

【三つ伏】 これも矢の長さの計數、東に満たぬ端敷を、指一本の幅を、一伏として測る。

【水船】 水を湛へた槽。

【水舟石】 水をたくはふる石槽。

【三星の紋】 唐鋤星、三つの星が集り並んで唐鋤の形をなしたものの、これに一文字を添へたのが渡邊綱の紋所。

【瑞穂の國】 稻の穂の饒かな豊饒な國、日本の美稱。

【水間の里】 泉州水間の觀音とて有名な水間寺のある

村、此地にお夏清十郎愛染棒やその心中話、お夏の

子孫の家など云ふものが傳はつて居る、無論後人の假作に係るもの、本編解説参照。(歌念佛の上)

【水向が爲には】 こゝには神下しの願ひ主、問ひ手のことと云ふ。(三世相の三)

【三つ目がかり】 碁盤の三つ目に母指をかけること。

【水も飲まれぬ】 此處のは一服する暇もないこと、息つきに一盃の水を飲む暇もないほど忙しいとの義、大阪の方言。

【水牢】 年貢未納者の罰刑で、牢の下に水を湛えりよ名付ける。

【三つわぐむ】 「瑞齒萌む」を、三の數字に寄せたもの、年老ひて齒脱け、更に小齒の生へ出すを云ふ、別に註せり。

【三つ輪組む】 三つ輪は老女の結ふ髪の名、髻の端を三つに縮めるもの、後撰集「年ふれば我黒髪も白河のみつわぐむ迄老ひにけるかな」による。

【御手を開き云々】 既戸皇子二才の時、握れる手を開き給ふと、舍利を持つて居られたと云ふ故事による。

【見ともなし】 俗に見つともないの義、外聞わるいこと。

【緑の衣翠き袴】 緑毛翠羽を云ふ、鸚鵡の別稱を緑衣使者などとも呼ぶ。

【緑の竹簀の如く】 詩經の「綠竹如簀」による。

【緑の林白波】 林と波とを盗人にかける、緑林も白浪も盜賊の異名。

【水口】 田に水をせき入れる口。

【水口泥鰌】 水口の名物。

【實なし栗】 から栗。

【水無瀬川】 天王山麓山崎の南を流れた古川(攝津國島上郡)、又、水の流れが絶へたやうに見へるを水無瀬川と稱する意をも含んで居る。

【水無月夏神樂】 六月は祭り月で、廓は紋日月、京にまさる賑ひを云ふ。

【湊川】 攝津國兵庫の北、丹生山田東小都西小都から發源、湊川石井村から海に入る、正成討死の地、但し現在の湊川とは位置に相違がある。(女楠の一)

【御名に顯はる云々】 景行は、大いなる道の義なれば

言ふ。(日本武の一)
 【皆にしゃつた】 全くゼロにした、全然無くしてしま
 うた。
 【皆迄も云ふな】 悉く云はずとも既に知つてゐると云
 ふこと。
 【南か堀江】 南は島の内、堀江は阿彌陀池の東、何れ
 も色里。
 【南谷】 高野山壇場、金剛峯寺から東南の谷、谷とは
 云へ實は平地、高野山内には十谷がある、南谷は其
 一。
 【南の兄御】 島の内を南と稱する、六軒町重井筒屋の
 主人徳兵衛の兄を指す。(重井筒の上)
 【南の茶屋】 島の内の遊里を南と稱した、その色茶屋。
 【南の風呂の浴衣】 南とは島の内、風呂の浴衣とは風
 呂屋の垢摺女、又は呂州(風呂女の粹詞)とて湯女の
 異名、但し此等は純粹の湯女ではなく、此當時は風
 呂屋と云ふも湯屋でなく、何風呂と呼ぶ名計り残つ
 て居て、實は準遊女屋である、故に湯女と云ふも皆
 一種の遊女である、小春は南の湯女の浴衣から今此

北の新天地へ懸衣を替へたのである。(天網島の上)
 【南の御堂】 南船場、今の北久太郎町四丁目と北久寶
 寺町四丁目との間にある、東本願寺の別院、難波御
 堂のこと。
 【南東の門前の牛頭天王】 大阪天王寺南門前、同東
 門前に牛頭天王の社がある、二十二社詣の十四、十
 五番。(卯月の上)
 【源の順】 字は具齊、和漢の學に長じ、詩文和歌
 に達す、王朝時代屈指の學者、後撰和歌集を撰み、
 萬葉集に訓點を附し、和名類聚鈔の著がある。
 【源は潤れて埋れて云々】 源氏は平氏に壓せられて
 四散滅亡の悲運に陥れる比喻。(孕常盤の二)
 【源義朝】 源爲義の長子、武に達し智に長じた驍將、
 頼朝義經等の父。
 【源義政】 足利八代將軍義政。
 【身に受けて】 眞に受けて。
 【身に金が入る】 刀で斬られる夢を見ると身に金が入
 ると悦ぶ夢判じ。
 【身に構ふ】 身を構ふて化粧や身づくろひすること。

(小栗の四)
 【身に詰みて】 自身に経験して。
 【身になして】 親身の友とする、心だよりにする。
 【身には止め】 拙者にすることは止めよ。
 【身には細口には綿の響をはめ云々】 能樂「自然居士」
 の詞、人買共が兒女を折檻する條。(傾城酒呑の四)
 【身にも及ばぬ戀をさへ云々、是を見るたびに云々、捨
 ても置かれず云々】 以上凡て「松風」の詞、舞臺の方
 から洩れて来る。(傾城酒呑の四)
 【三布の下紐】 一幅の布を三枚合せた幅の下紐。
 【峯の松風琴の音に云々】 拾遺集の「琴の音に峯の松
 風通ふらし何れのをより調べそめけむ」の歌詞をと
 る。(孕常盤の四)
 【峰の薬師】 淨瑠璃節の最初の語り物「十二段」に見
 へる淨瑠璃姫は、峯の薬師の申し子になつて居る。
 【箕】 米の糠などを去る農具。
 【身の熱さ】 身の辛さ苦しさ。
 【身の入りまひ】 身入り、收入の義、身上は上々上田
 ともぢる。(宵庚申の中)

【身の入れ立て】 自前、自費のこと。
 【身の疵】 跛のこと。(吉岡染の上)
 【箕毛】 鶯の頸に生へた長い箕のやうな羽を云ふが、
 此處には箕毛のやうに矢を多く射立てられた形容に
 用ひる。(千四犬の五)
 【身の鑢刀】 己が身から出た鏢。
 【巳の上刻】 今の午前十時。
 【身の正直な勝手して云々】 自分が正直ゆゑ人も正直
 と思ひ云々。(歌念佛の中)
 【箕手】 手を左右に開いて張つた形。
 【身の手本町】 本町にかける、以下、本町以南、南船
 場の町盡しを順々に描ひて居る。(今宮心中の下)
 【身の蜂拂ひ傘ね】 「疵持つ足」の諺と同義。
 【身のひし】 非事か、折角好意でした事が身の難儀と
 なる事、身の菱と云ふ説もある。
 【身の程を白髭】 知らずにかける、「白髭」は能の曲
 名。(傾城酒呑の四)
 【箕虫】 木の古葉を巻き、其中に入つて棲息する虫。
 【箕虫】 木の古葉を身に巻ひて其中に棲む虫、突然ヒ

ヨコリと顔を現はしたから、袋虫のやうな奴と云つた譯。(天神記の三)

【袋面】攝津國豊島郡、瀧に紅葉に名あり。

【御法の水云々】佛の功德で、極樂土に浮み上がると云ふ心中讃歎の結句。(重井筒の下)

【身は】私。

【實生】實から生れたこと、(接木宿根等に對して)。

【身はかげろふのうき命云々】蜉蝣は朝生れて夕に死ぬ、兄弟の命も夕を限りとの意。(百日曾我の三)

【身は丸ながら】全身全體のこと。

【三原】代々三原正家を名乗る備後國三原の刀鍛冶の稱。

【三原重太夫】敵役々者として聞こえてゐる。(今宮心中の上)

【御原野】三原野、信濃國。

【身開き】自身の潔白を言ひ開き證明すること。

【壬生】京都市外、綾小路の西端、壬生寺は毎年陰曆三月十四日から二十四日まで行はれる壬生狂言にて名高い、此狂言は當寺中興の祖圓覺上人の創始した

一種無言の猿樂。

【身二つ】子を産みをとすこと。

【三重の帯】戀に瘦せて二重の帯を三重にすること。

【御牧】山城國淀の東南十丁の地、昔時天皇の御馬を放飼した處。

【見まつて】見て、そしてそれを取纏めること。

【見まふた事】見當違ひの事。

【耳打つ】耳打ちする、即ち内證で耳に入れること。

【耳振】耳の垢を掃除する具。

【蚯蚓といふ虫が世界の土を云々】いらぬ心痛、取越苦勞の譬。(釋迦の一)

【耳そぐ鼻そぐ云々】高麗橋で晒され、鼻をそがれた數人の密輸商人の事を暗にほめかす。(博多の中)

【みづ】針の耳。

【耳塚】京都大佛殿門前にある、豊公征韓役に清正行長が斬り取つた敵の耳を埋めた處と言ひ傳へる。

【木鬼の留つた様】獄門臺に上げられた形容。

【耳無山】大和國十市郡北八木村の東、俗稱天神山、後撰「うたのゝは耳なし山か呼子鳥よぶ聲にさへこ

たへざるらむ」。

【耳は戀する眼は呪む云々】ひねた青春の處女が、戀心に燃える様を、伽羅の芳香の焚き切れずに、灰に埋もれて居るのに喩へる。

【三室】宇治の東方、御室戸院のある處。

【御室山】大和國龍田川の兩岸、神南備村の後の山、古歌に多く詠まる。

【三室山】三室戸山、宇治黄檗山の南の山。

【御廟の橋】高野山奥の院大師廟の前の小橋、玉川に架す、橋板三十七枚は金剛界の三十七尊にかたどる、罪障深い者は渡られないと言ひ傳へる。

【みめではない】見目は人の顔つききりやう等の義もあるが、こゝのは面目、譽れと云つた意、即ち人間が結構な計りが譽れではないとのこと。(天網鳥の中)

【みめは次ぎ】容良は二の町でもの義。

【御妻悪る】悪性な貴人の妻との義。

【御裳濯の流れ】皇系。

【宮】天満天神の社。(天網鳥の中)

【冥加錢】神佛の爲にする寄附、施與金。

【名字】六字の名號。

【名字の敵】家名の敵。

【冥道供】密教の供養法の一、閻魔王を本尊とす。【明日より吉野の山にて云々】芝居の觸れ口上に擬して言ふ。(雪女の下)

【冥罰】神佛が改心させるために惡人に下す罰。

【命婦】稻荷の神の使者の狐を命婦と呼んでゐる。

【明遍坊】明遍上人のこと、藤原信西の季子、奈良にて修行、法然に就き念佛の義を受け、後高野に入る。

【名聞は焦熱の爪木】爪木は爪折りて焚物にする木の枝にて、即ち薪のこと、名聞の熱は人間罪惡の基をなすもの故、丁度焦熱の焚き付け木の如しと云ふこと。

【冥理】冥利、神佛の冥加と利益と。

【明王】三寶、國土、人民を擁護する天の神々の稱。

【宮川町、繩手】何れも京四條に近い遊里。

【宮城野の糸萩】宮城野は陸前仙臺の東の野、昔は萩の名所。

【脈を見て五臓を知る】脈に由つて五體全身の病が知れるとの諺。
 【脈を見ぬ病ひに聞及びの療治】無鐵砲な判断、當て推量と云ふ喻。
 【脈のあがつた死に病】脈搏も絶へて終ふた九死の病人。
 【都入り】入洛のこと。
 【都造り】御所を造營すること。
 【都詰】將菜の語、盤の中央の目で、敵の王を詰めるのを云ふ。
 【都鳥】水鳥、鴨の類と云ふ。
 【都七口】都の出口。
 【都の方垂れて】都の方向に低くなる。(一心五戒の)
 【都の辰巳】京の東南、宇治方面を指す。(蟬丸の五)
 【都の富士】比叡山の別稱、伊勢物語の歌による。
 【都へ歸る山】以下謠曲「山姥」山巡りの文に擬しての山巡りの一節。(女腹切の中)
 【宮崎】日向國佐土原の南。

【宮進め】大宮仕へに精勤する。
 【宮立】宮殿のこと。
 【宮路正しき云々】宮に詣る道筋、此文以下謠曲「采女」による。(天智の三)
 【宮路山】三河國寶飯郡、紅葉の名所、玉葉集「嵐こそ吹來ざりけり宮路山、まだもみち葉の散らで残れる」。
 【宮津】丹後國與謝郡の城下。
 【造】御臣の義、國造、伴造などある、こゝは國造にて其地方の部を統轄する職。
 【見やつたの】それ見たことか。
 【みやの前大根】天満宮の前町(天神橋筋)の青物市場の大根、「これ見や」にかける。(二枚繪の中)
 【宮腹々にまします】妾たちの所生を云ふ。
 【深山の如く】大山の如く。
 【御湯御神樂】神をいさめの諸作法。
 【三好下駄】天満の菊屋館などと同様、當時有名な下駄屋の廣告であらう。(博多の中)
 【みよし野】武藏國入間郡みよの里。

【未來生々來々世々】未來來世永劫の義。
 【未來成佛】あの世で佛となること。
 【みるくい】海松食貝、殻の口に海松の多く生ずる貝。
 【見る茶】海松茶、海松色即ち茶褐色、見るにかけると黒。
 【海松房】海松の枝の緑りの房やかなこと、美しい黒髪形容。
 【海松房の黒髪】海松の枝の緑色濃やかに、ふさふさとした美髪。
 【見る目喚ぐ鼻】地獄閻魔の廳の傍にある善惡二頭の稱、此二つの首、よく娑婆世界を視透す通力がある。
 【見る目も切】切なくて目も當てられぬ。
 【彌勒の世】釋尊の後を補ふ爲め、後世に出現して衆生を導くと云はるゝ佛、釋迦入滅後五十六億七千萬年の後の事とあるを、首級都合五十六級七千萬歳彌勒の世と續けた。(女護鳥の一)
 【三輪が崎】大和三輪山の南麓初瀬川の流。
 【見渡せば松の葉白き石橋山】謠曲「二人靜」の文の吉野山を石橋山に變へたもの。(冷泉節の上)
 【三輪違ひ】輪が三つ重なり合ふた紋所に擬して云

【三輪の素麵】素麵は三輪の名産。
 【三輪の茶屋】大和國磯城郡、三輪大明神の在る地、現時此地の竹田屋旅館に梅川忠兵衛の隠れ座敷隠れ柱、蘇鐵など珍な遺跡があつて、所謂三輪の茶屋の舊跡だと言つて居る、これも淨曲に由つて生れた名所の一つである。(冥途飛脚の下)
 【三輪の山いかに待ちみん云々】古今集戀歌、伊勢女の歌。
 【浪江の流れ源澄める云々】君徳上に清ければ下萬民其恩に潤ふと云ふ喻。
 【眠藏】家の奥の寢室。
 【民俗の世話】傳説風聞。

む

【六日だれ云々】 以下産兒に係る行事。(嵯峨の四)

【無息力】 無茶力、阿呆力。

【むいき者】 無意氣者、無茶者。

【無雲天】 色界十八天の第十、雲の上の無雲の處にある天ゆゑ名付ける。

【無何有の里】 空想卿のこと、何物もなく何事もない世界、萬葉「心をしむかうのさとおきたらば藐孤射の山をみまぐちかけむ」。

【昔男】 在原業平のこと、「二十重ねて云々」も、共に「伊勢物語」から出て居る。

【昔の京】 往古の難波の都を云ふ。

【昔の京の八重櫻】 「古への奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな」の歌から九重(遊女の名)を引き出す、薰、小紫、小藤の四妓を四天王に擬して居る。(淀鯉の下)

【昔の京は難波の京】 仁徳天皇難波の皇居を云ふ。

【昔の情云々】 行平の上を云ふ。(松風村雨の三)

【昔は巖窟の洞に云々】 蘇武が窖中に幽せられた故事。

【昔々昔は昔】 昔と云ふも昔ながらの昔でない、今日と云ふも後代から見れば昔である、今古史蹟の一消一長も達観すれば、一如であるとの意、昔々は業平の昔男になぞらへて冠させたものである。(井筒業平の一)

【蜈蚣に唾液】 蜈蚣は唾を恐れる、敵藥の譬。

【百足の代り】 百人ぶりも働く喻。

【行際】 騎馬用の腰から股脚に垂れた毛皮製のもの。

【周期】 一月又は一年目の回忌。

【迎鬼】 鬼ごとの遊戯の一種。

【向ひ通るは清十郎ぢやないか】 當時の流行唄、随分廣く行き渡つた文句。(歌念佛の下)

【迎ひの駕籠】 遊女の送り迎ひに駕籠を用ひることは、近年迄南地にも残つて居た、曾根崎にも夜更、風雨の夜などの迎ひの駕籠は久しい習慣であつた。

【迎ひ湯】 次回に再び来て浴する湯のこと。

【向ふ風に帆を上ぐる】 順風に逆ふは無謀の勇と云ふ義。

【向疵】 面部に受けた刀疵。

【向ふ猪には矢も立す】 「向ふ笑顔に矢立たず」と同義の諺、穩かに出る者には亂暴も出来ないの意。

【向ふの二階】 橋を北に渡つて顧みた堂島新地を指す。(曾根崎心中)

【無氣】 無視、無駄。

【無垢】 表裏等凡て同一色で作る衣服。

【むく犬】 彪毛の長い肥大な犬のこと、色町のむく犬ゆゑ金品などを剝く犬と云ふ謎である。(千匹犬の二)

【むく起きく】 むつくり床を起きること。

【むくつけ奴】 醜ひ怖氣な顔した奴共。

【向原】 大和國高市郡に屬す、蘇我稻目の自邸があつて、後に寺院とし向原寺と稱した、これ我國最古の寺院である。

【むくく〜の娘達】 生々しい生娘たち。

【木蘭地】 黄椽色、黒く赤みを帯びた色。

【むくりこくり】 むくりは蒙古、こくりは高勾麗即ち高麗の義、後宇多帝の朝、蒙古襲來(高勾麗が其卒先者)の時、其勢を、むくりこくりと云つた、後には子供等の泣くを止めるに、此詞で威したもので、恐ろしい外國の鬼とでも云つた意味の詞。

【むくりこくり】 別に註せり、玆のは、むくり取る、むしり取るとの意。(二枚繪の上)

【木鑿子も研き入りては云々】 木鑿子の黒さも研けば輝く、まして禿は研けばいよ〜美しく立派な太夫の品が備はるとの義。(壽門松の上)

【むくろ腹】 むか腹の訛、忽ちにかんしゃく立て怒ること。

【無氣】 無關心なこと。

【むげない】 あんまりな、無情な、一概な。

【むげく】 むざく。

【無間の鐘】 佐夜の中山(遠州佐野郡)の無間の鐘を撞くと、未來は無間地獄に陥るが、然かし現世では無量無盡の財寶を得て大長者の境遇に榮ると云ふ傳説

がある、無間とは苦痛の間歇がない地獄ゆゑ、名付ける。

【無間の釜】 無間地獄の釜。

【無作】 無作爲の略、分別造作のない自然事。

【無想有想】 無心有心、佛行を云ふ、金剛經「一切衆生之類、若二有想一若二無想一、若下非二有想一非中無想上」。

【むさうらしげ】 むさうは無慙の音便、むごらしうの義。

【鼯鼠】 深山に棲む蝙蝠の如き肉翅ある獸、常に樹梢を飛んで渡る。

【武藏鏡】 古昔武藏國から作り出した鏡の名、其制は後世のものゝやうに、鏡の端へさすがを作付けにする故、歌にはさすがにかけてよむ。

【武藏鏡と問はねば恨む】 伊勢物語の「武藏鏡さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさし」を採つたもの。

【武藏を始め】 武藏坊辨慶を始めとし。(忠信の一)

【武藏野】 武藏國、東京の在る地の舊稱、「行末は空は一つにむさし野の草の原より出る月影」の歌意を採る。

【武藏野】 大盃の名、このみ(野見)つくせぬ」から出た名稱。

【武藏國の果云々】 伊勢物語「むかし男、武藏の國までまどひありきけり」による、以下凡て伊勢物語業平に因んだ文。(鳥原蛙合戦の五)

【武藏の七黨】 丹治、私市、兒玉、猪股、西野、横山、村山の七黨。

【武藏野の月】 「若縁」のてる月の文句、武藏野は大盃の名。(女殺の上)

【むさぼり付く】 むしやぶり付くの訛。

【虫明の瀬戸云々】 備前片上瀬にある、續古今「影うつす袖は浮寝の我れからに、月ぞ藻にすむ虫明の瀬戸」による。(浦島の四)

【虫籠】 虫籠窓の格子の稱、虫籠のやうな組格子。

【絡】 狸の屬。

【無始の罪障】 無限過去の罪業。

【無始の煩惱】 無始以來の煩惱、無始とは佛道で云ふ一切の法に始めのないことを指す。

【虫早き】 痲癩の虫の鋭敏なこと、氣早な性癖。

【無生恩】 入涅槃の恩。

【無常がおこる】 心淋しうなること、しやれ詞の一つ。

【無上神靈神道加持】 無上は此上もない最上々の、神の御魂、神の道の御祈禱であるとのこと。

【無常の燒草】 こゝは梅田墓地を指す。(卯月の下)

【無常の分】 無常の野分なり。

【武者繪】 戦争や勇士を描いた繪。

【武者走り】 船の洞壁の縁から少し下つて、船張の横木から其木にねだを渡して張つた、廣さ三尺ほどの板縁。

【むしやら聲】 しわがれ聲。

【武者草鞋】 戦地用の草鞋。

【筵庇】 日蔽ひの爲め軒先に筵を張ること。

【蒸す】 包圍して攻め籠む。

【握飯】 飯を握り堅めて辨當などにするもの。

【結びの盃】 縁を結びの盃。

【結び松、櫻欄の相生】 結び松は岩代の結び松との義ではなく、涙の糸を受け、相生の櫻欄を呼び出す爲で、相生の櫻欄の木は實際曾根崎の森にあつた、「二枚草紙」の道行にも記されてある。(曾根崎心中)

【結びの神】 高皇産靈、神皇産靈など造化の神を、後に結ぶと云ふ縁語により、男女の縁を結ぶ事を掌る神とはなる。

【結ぶの神無月】 結ぶの神も無い月、十月の異稱。

【無成敗】 字の通りなれば、成敗なしにて、却て反對の意に取れるが、これは無道の成敗、非道な處置と云ふ意である、淨曲獨得の省語法か。

【むぞうが者】 可憐な者、蠻訛。(女護島の二)

【無足】 無駄、無益。

【六十路の露云々】 方丈記に「茲に六十の露消えがたに及びて更に末葉の宿りを結べることあり」の文を採る。(龜谷の三)

【無地】 無意地。

【鞭を合せ】 鞭を打ち鏡を打つて駈ける貞。

【むづ折れ】 もろく折れる。

【むつかしく】 煩はし、厭はし、きたなげなこと。
 【睦語は云々】 以下説經の文句。(歌念佛の下)
 【六つ武藏】 十六武藏とも云ふ遊戯、親石一個、子石十六個とでさす、辨慶の七つ道具から、六つ武藏と續けた。(冷泉節の下)
 【無點】 捨假名や返り點のない漢文。
 【無得心】 心得ぬ所業、譯の分らぬ心。
 【胸がい】 胸ぐら。
 【鞅際】 鞅は馬の胸にかけける組紐、鞅際は馬の胸際のこと。
 【棟を負ふの柱】 以下の南畝の農夫、機上の工女など、皆「阿房宮賦」から取る、建築の宏壯な比喻「使下三負レ棟之柱一多ニ於南畝之農夫一。架レ梁之椽多中於機上之工女上。釘頭磷々多ニ於在レ度之粟粒一云々」。
 【胸さがしく】 胸騒がしく。
 【空しくば】 空しければの約。(天神記の四)
 【胸高】 帯を殆んど胸の邊まで高く締めること。
 【胸づくし】 胸ぐら。
 【むなづはらしく】 胸を窄(つぼ)らせること。

【無にならん】 無功に終る。
 【無二無三】 唯一のこと。
 【無人城】 人無き城、無人島と云ふが如し。
 【宗】 重立つた者。
 【刀背打】 懲らしめの爲め刀の背で打つこと。
 【宗徒】 宗と頼む、重立てるの意、徒は假借の字。
 【むねになし】 長刀の背を向ける。
 【胸の岩戸云々】 常暗の夜も、岩戸が開けて初めて輝渡つたやうに皇子の改悟により明るくなつた人々の心持を喻へて云ふたもの。(日本武の三)
 【胸の焔は夜に三度云々】 以下の文は「傾城淺間が嶽」で有名になつた句。(西王母の四)
 【胸の守りにかける】 胸に銘して忘れぬとの義。
 【胸の蓮華】 良心の義。
 【無念無想】 こゝの意は無思慮のこと。(百合若大臣の四)
 【無の見】 斷見のこと、常見に對する佛語、因果の理を知らぬ邪見を云ふ。
 【無の字】 こゝのは無間地獄の無の字を指す。(女護鳥)

の四

【むの字ながら】 むやくしながらの略語。
 【六哥七哥】 六幅七幅。
 【無方難思】 通達自在不可測の義。
 【無煩天、無熱天】 色界十八天の内、「色界」の註參看。
 【無佛世界】 釋迦去り彌勒未だ出でざる間の世を云ふ。
 【むべ山風】 むべは實に、まことに、古今「吹くからに秋の草木のしほるれば、むべ山風を嵐といふらむ」による。
 【無明の酒】 無明は迷闇の義の佛語、酒は人の心を迷はす故に云ふ。
 【無名門】 別に名稱のない門。
 【無紋の色】 紋なしの淺黄の上下に編笠持つたは葬ひの姿。(反魂香の中)
 【むやくし顔】 むやくは無益なり、無愛想な顔のこと。
 【無益の長物】 寧ろ無い方がまし位の不用品を云ふ。
 【むやくや】 むしゃくしゃと同義。

【村上彦四郎義光】 信濃國の人、彦四郎と稱す、大塔宮に従ひ吉野山に行く途中、土人の奪ふた錦旗を奪ひ還し、後自ら宮の身代りとなつて討死した忠勇武烈の士。
 【むら消】 斑消、雪がむら／＼に消へた良。
 【濃濃の旗】 斑に濃く染めた色旗。
 【むらさき】 鯛を云ふ女房詞。
 【紫鹿子にふる年の云々】 ふるは鹿の子斑らに降ると經るとにかけ、芥子は消し、極彩色の越後は繪にかけける。(壽門松の上)
 【紫盃】 紫貝(飯櫃貝)の盃。
 【紫野】 山城國愛宕郡大德寺のある邊を呼ぶ、萬葉「あかねさす紫野ゆきしめのゆき野守は見ずや妹が袖ふる」から採る。
 【紫の冠】 大化制度中、七色十三階の冠位の紫色は第三位に居る、即ち第一織冠、第二繡冠、第三紫冠。
 【紫の雲云々】 攝津紫雲山中山寺の御山を指す。(佐々木の三)

【紫の一本ゆゑのゆかり】古今「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」から我が愛人のゆかりを指して云ふ。(世繼の三)

【紫の由縁】紫の朱を奪ふと云ふ諺から、棟の紫色と唐桐の朱色とを比べて云ふた。(天智の三)

【紫の由縁求めて杜若云々】伊勢物語にある、業平が三河八つ橋杜若の故事。(冷泉節の下)

【紫は色の司】吾妻太夫の藤屋の藤の縁から、紫は色の司と稱へる。(壽門松の上)

【村雨と聞しも】夜中には雨と聞ひたが、朝起きて見れば松風の音より外には何物もなかつたと云ふ、夢らしい心地を匂はせたもので、松風と云ひ村雨と云ふも、其人とは無關係である。(松風村雨の三)

【村雨の露も云々】寂蓮法師の霧の歌を夕霧に應用した、「村雨の露もまだ千ぬ榎の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮」。(三世相の三)

【村千鳥の直垂】千鳥の群がれる模様の直垂、十郎は千鳥、五郎は蝶の模様と云ふことに極められて居る。

【無量阿僧祇劫】無量、無數、永劫の義。

【むりやうの繻子】むりやうは五糸綬のこと、極上々の唐繻子を云ふ。

【室】播州室津のこと。

【むろ】土佐國安喜郡室津の浦。

【むろ】無漏と、播州室の津とをもちる。(佐々木の三)

【むろ】室鯨の略、伊豆の名物、室の鯨のこと。

【室】一名河柳、いぶきに似た木。

【無漏道】煩惱を解脱した世界。

【室の戸】庵室の戸。

【室の八鳥】昔時、除夜に家の籠をさらふて、翌年の吉凶を占ふこと、散木「さらひする室のやしまのこと、ひに身のなりはてむ程を知るかな」。

【室町に殿作り】室町御殿、花の御所とも云ふ、今の室町今出川の北に當る。(女夫池の一)

【無漏無生の法界】涅槃寂滅の界を云ふ、即ち悟る時は一切空、迷ふ故に三界(欲界、色界、無色界)を輪回す云々の意。

【室山】播磨國室津の背後の山。



【明月地に盛ちず云々】日月未だ光りを失はず、一旦雲がかゝつて暗くなつても、時節が来れば舊態に還ると云ふ喩。

【鳴弦】魔怪などを攘ふ爲め弓弦を引き鳴らすこと。

【名所屏風】諸國の名所を四季に寄せて描かせた長田家秘藏の屏風。(鎌田の下)

【目板】板の継目に打ち付けた板。

【酔酩と】泥酔した良、前後も分らずなること。

【明德を炳かに】「大學」の三綱領の内、明三明德、新民を云ふ、生民は國民のこと。(最明寺殿の上)

【明德佛性】賢明な清淨な徳性。

【冥途の鳥】時鳥の異名。

【名方】良ひ處方。

【名物のお家の道具】家果代の名寶、暗に巷説の黄金の鶏を云ふ。(淀鯉の上)

【明命】天から享けた明かな命運、天命。

【命々鳥の争】此鳥は一身二頭にて常に兩頭相争ふより、兄弟同胞の鬭争に譬へられる。

【命門を云ふ】命門は漢方醫の語で、女子の陰部の、月經の出る門。

【めいよな】面妖な、奇妙な。

【めいる】氣が沈むこと。

【迷虛八萬の頂】須彌山の八萬由旬の絶頂を云ふ、親の恩の高大な事の譬。(鎌田の上)

【明王の田獵】賢主の狩りすること。

【明王は一人の爲に云々】賢君は私情のために公法を曲げない。

【迷惑する駒】與二兵衛を指す。(壽門松の中)

【妙覺】佛果のこと。

【妙正勤】勤行のこと。

【妙莊嚴】過去の世に出た國王の名。

【妙心】佛道の信心者。

【女夫鳥】勝二郎吾妻の二人を指す。(淀鯉の上)

【妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五】觀音經普門

品の冒頭の文字、本曲の主人公景清は清水親音の信者ゆゑ、先づ此語を巻首に置いたものと見へる。(出世景清の一)

【妙女違はぬ】 たへなる經文の示された通り。

【妙樂大師】 支那常州、天台宗の湛然の稱、大著多し、又畫を善くし、蝴蝶の畫に巧手であつた。

【目をさす】 平面から少し高く持ち上つた筋目。

【目をせう】 目をせよる、細やかな商ひすること。

【女夫池】 天満神社の北、當時遊び女の居た地。

【女夫こつてり】 夫婦痴話つき。

【夫婦塚】 こゝのは女郎花塚のこと、山城國八幡の南

にある、小野頼風を慕ふて來た京女が、里人に騙され頼風を怨んで放生水に投身して死んだ、その山吹

重ねの衣を捨てた處に、女郎花が生じた、頼風斯くと聞ひて又身を投げて死んだと云ふ舊跡、故に女郎

花塚とも夫婦塚とも呼んでゐる。

【目を抜れた】 隙に乗じられたと云ふ義。

【目をまはす】 賽の目にかけること、博奕の語。

【目がかり】 目に付くこと。

【女敵】 姦通せし姦夫に向つて言ふ語、即ち妻を奪はれし爲の敵との意。

【目が行く】 目が見えなくなる。

【めかり利かす】 氣を利かすこと、これは淨瑠璃道の

通語、めりかり利かすの約で、めり(減り)は音の

下り(乙)のこと、かり(加り)は音の上がり(甲)を

云ふ、音聲の甲乙上下の調子を旨く取つて氣を利かせと云ふ義。

【海布刈の明神】 豊前國企救部にある、毎年除夜に海

布刈の神事ある故名高い。

【目かれせず】 目を離さず、古語。

【目利を知らぬ南京の君】 忠俊黒白の見分けもつかぬ

かぼちやの君と囁いたので、「君の榮華ぞ例なき」と

續けたは、今年やかぼちやの當り年と云ふ意であら

う。(國性爺の一)

【目釘】 刀身の抜けぬやうに止めた釘。

【目腐金】 物惜みする人の所持金を稱する。

【目腐金】 こゝのは、汚れた金との義。(百日曾我の

五)

【めぐしひたし】 めぐしは愛すること、ひたしは潤す

こと。

【目薬師】 目醫者のこと。

【目を張る】 一時に目、口を閉ぢ結ぶ、氣絶の態。

(女護鳥の四)

【目口かはき】 目口渴きにて、目も口もヂツとして居

られぬ、いら／＼した形容を云ふ。

【盲打】 向ふ見ずに打つてかゝること。

【盲突き】 向ふ見ずに突く。

【めくら船】 舳艫共に櫓を具へた軍船、逆櫓船のこと。

【盲目蛇に怖ぢず】 其物の恐ろしさを知らずに其物を

恐れぬことの喩、無鐵砲、向ふ見ずの意。

【めぐろ】 鮪、まぐろの訛。

【目ごと】 網の目毎なり、網の目ほどの多くの人の涙

の種になつたと云ふこと。(天網鳥の下)

【めさいの】 召し給へ。

【目ざし籠】 小さい籠。

【めざしなす】 童男童女の額の毛が眼をさすやうに垂

れたのを云ふ。

【召されつちや】 致すべし、又とき、おんじやるなど、

國侍の訛り詞。(丹波與作の上)

【めされ様】 「なされやう」に同じ。

【召し下し】 下し給はつた着衣。

【めした】 買ひ調へた。

【召次】 執次ぎの役をつとめる下官。

【飯は赤まじり】 赤米はひねて赤味を帯びたもの、其

赤米の古米臭ひを混ぜて焚く、大名には破格な粗食。

(宵庚申の上)

【目代】 後見、監督、もくだいのこと。

【鉢】 鉢の一尺ほどのもの。

【目塞笠】 編目の細い深い蘭笠、人目を忍ぶために被

る。

【馬道】 板を敷ひて廊下とした道、場合によつては直

ぐ馬を引入れることの出來るところから名付けたと

云ふ、後には單に長廊下の稱ともなつた。

【目高】 眼識の高い我れと云ふ義。

【めた／＼】 減多／＼、めちや／＼に。

【目だれ顔】 見苦しいと云ふ俗語。

【めつかう】 まつかう(眞向)の訛。

【めつきやく】 此あたり客づくしの文、その字音の余勢でめつきやくと云ふた、めつきやくは滅却(身上の)の地口。(女殺の下)

【めつきり】 動き出す形容。

【滅罪の偶】 罪業消滅の經文。

【めつ日もつ日】 滅日没日、消滅隠没する日の出来ることを云ふ。

【滅多無心】 滅多無性と同じ、考へなしに滅茶(に)すること。

【めつぼうふだいの玉】 萬戸將軍の面向不背の珠にもちつて、譜代奉公する氣隨者のお玉の洒落。(弘徽殿の三)

【目面も明かぬ】 大多忙の形容。

【めで】 愛で、好意を以て……の義。

【目でしめ棄て】 美人などが見返つてヂツと見ただけで見棄て、行くこと、目で締め付けて見棄て、行くこと云つた、遊女などの思はせぶり。(忠信の三)

【目出鯛も釣て云々】 西宮戎神の鯛釣りとかける。(松

風村雨の四)

【娶る時は必ず父母に申す】 禮記内則編中の語。

【めなご】 女の子の轉。

【女なし夫なし】 男には女房なく、女には夫がない、即ち不義の中ではないと云ふこと。(川中島の一)

【女波男波】 巴と朝比奈に比す。(會稽山の一)

【目になつて】 目附けになつての義。

【目にもたまらぬ我涙】 平家の「歸り來むことは堅田に引く綱の目にもたまらぬ我涙かな」大納言時忠の歌による。(善光寺の四)

【目ねぶる】 知らぬ風、見て見ぬふり。

【目の鞘外しの下鑑】 目の鞘は匣にて、目のいかれる貞を云ふ、下鑑は刀の鐔の下に貫ひた金具。(雪女の中)

【目の鞘外す】 目を八方に配つて監視すること。

【目の重瞳】 二つ瞳のある目、聖人の相、眉の八彩の語についで、即ち「堯眉八彩、舜目重瞳」と稱する。

【乳人左衛門督清貫】 乳人は文章博士三善清行のこと。

【目の前ばかり背中を知らぬ】 一面を知つて他の一面を顧ぬ喩。

【目はじき】 目ばたきして合圖すること。

【目は痺】 斜めに見かすこと。

【目張】 魚の名、赤魚に似て目の大きな張り出したもの。

【目引き袖引き】 目で知らせ袖を引いて知らせ合ふこと、「目引き鼻引き」とも云ふ。

【馬部】 左右馬寮の下衆。

【胸】 目で仕方する。

【目も腐れ】 誓ひの詞、目も腐るとまよ、我が言に違ひはない。

【目元にしほがこぼれる】 糸竹初心集の伊勢踊の文句「あのきみさまあは、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれ、こぼれかゝる」を採る。

【目もなく】 無性に、むやみやたらに。

【目安あげる】 訴訟すること、訴訟の文書の箇條書即ち目安に書いて差し出すより稱する。

【面友】 表面だけの交りの友(心女の對語)。

【面向不背の玉】 何れから見ても同面の名玉、唐朝寶物、但し此玉は南都興福寺の本尊釋迦の眉間に收められた水晶の名玉で、唐土又は龍宮から渡來したと云ふ、嘉暦二年の火災に焼亡したと傳へる。

【面が脱ぎ度い】 悪名の面が脱ぎたいとの意、辱かしさに「面を被る」と云ふ諺を、轉化活用したもの。

【眠藏】 禪家にて寢所を云ふが、轉じて一般に寢室とか納戸の稱となる。

【牝鶏が時を作る】 夫より妻の権利が強いことの喩、書經の牧誓に「牝鶏無レ晨、牝雞之晨、惟家之累云々」とある、陰陽轉倒、家道衰への基だと言はれる。

【雌鳥羽】 雌鳥が左翼で右翼を抱く姿から取つて、その如くに物の重なり合ふ形容とする。

【めんない千鳥】 目無しどち(どちは友どちなどのどち)から轉化した語とも云ひ、「面無稚兒捕」の義とも説く、子供の遊戯目かくしのこと、茲には忠兵衛の目を手拭で隠くすを云ふ。(冥途飛脚の下)

【面箱】 能面を容れた箱。

【緋鬘たる黄鳥丘隅にとどまる】 緋鬘(鳥の鳴く聲)

と鳴く黄鳥(鶯の類)も多く丘隅(峯の木の茂れる處)に止つて、身の安居を定める、況んや人をやとの意。(詩經の詩にて大學に引用)

【面々】入子鉢の鉢のいろ〱面々と、「汝自身」と云ふ意とをかけたなり、大阪詞にて、汝自身のことをめんめと云ふ、めんめんは其轉訛語。(女殺の上)

【面々自害】心中死でなく、各自の自害であると云ふこと。(潤色の中)

【面々の身】自分自身と云ふこと。

【面も笠も脱がせる】苦を脱いで身を樂にさせる義。

【めんよな】面妖な、奇怪な。

も

【茂庵】淀屋辰五郎の父岡本三良右衛門、後剃髪して古安のこと。(淀鯉の上)

【もう逢ふことは優曇華】千載の一遇で、こんな機會はもう再び無いとの意。

【もうこ様】強勇の御藏之介を揆き付けた勢を、ありや女后様ぢやない猛虎様ぢやと洒落る。(浦島の二)

【もうぜいの雑兵】猛勢と亡者とをもちつて云ふ。(弘徽殿の二)

【もう無い】もう命がないの略。(反魂香の中)

【朦霧】胸の鬱屈、苦悶。(女夫池の三)

【もう〱と】心持のぼんやり朦朧とすること。

【もうる】英領以前の印度帝國。

【最上】羽前國山形の舊稱。

【もがり舟】藻刈舟と騙りとをかける。(百日曾我の二)

【木曜星】九曜星の内、歳星、人主の象也とある。

【木食させ】火食を廢して、木の實ばかりを食はせる。

【木修理の番匠】宮城の修理造替は木工寮と修理職との掌るところ、其匠人(大工)を云ふ。

【木工の頭】朝廷に於ける大工棟梁の官名。

【木馬】木製の馬、拷問の責道具の一つ。

【木蘭地】織色の經の黒く緯の黄色なもの。

【蒙古】支那の地名、支那本部の北に位する地。

【目蓮】釋尊門下十大弟子の一人、神通第一と云ふ。

【目蓮尊者の愁嘆】佛十大弟子の一人、神通第一と稱せられ、殊に孝養深く、墜地獄の母を悲しんだ故事を云ふ。

其案内者をもさ引と云ひ田舎染みしをもつさりなど云ふ通語まで行はれるやうになつた。(女殺の上)

【文字余り文字足らず】歌の字余り字足らず、くどく云ふことに喩える、詠歌の前の名の縁語。(關八州繫馬の三)

【門司が關】文字にかけたり、今の門司市、向ひは早瀬の瀬戸を隔て長門の下關に對して居る。

【振子燈籠】振子張のもの。

【文字謎】内に意味を隠した文字にて謎を作つたもの。

【文字人丸】文字にて人丸の像を畫ひたもの。(兼好法師の上)

【もじひらなか】もじは一文字にて一筋一本と云ふこと、ひらは一片、なかは半錢にて、何れも微妙な物の喩。

【藻汐草】かき集めると云ふ意から、文を綴ることに云ふ。(會稽山の三)

【藻鹽草】こゝのは草稿のこと、海鹽を探るには藻をかき集めるより、文を書き集めることにも代用され

た。(兼好法師の中)

【もじやくじや】うるさい事、むしやくしやの訛。

【鴟の草潜】鴟の草を潜るやうにいろく草原を分ける事。

【百舌の撞木を云々】百舌の止り木を手に取ると、百舌の長い尾が垂れるのを尾長鳥にかける。(娥の一)

【もそつと】まちつとに同じ。

【黙す】こゝのは拒むの意。(大原問答の二)

【持たでなん】子などは持ちたくないものだ……との義。(つれづれの三)

【甕】酒の容器、古語。

【もだく】もだ付く、悶へる、煩悶。

【持ち】米の買ひ方の通語。(女殺の中)

【餅い】餅のこと。

【餅飯殿】奈良興福寺附近の町名。

【持口】守り口。

【もちごもり】胎兒を腹に持った儘死ぬことを云ふ、大阪方言。

【餅搗き】新町廓の餅搗は毎年十二月十九日に極つて

居た、無論年中行事の一つで大故日である、一説には夕霧の抱主扇屋四郎兵衛が京の鳥原から移つた節、持ち越したのが始めと云ふが、確かではない。(夕霧の上)

【望月の駒】信州望月の牧場の馬は名高く、禁中駒牽の節會に牽く駒である、信濃は義仲の生國ゆゑ其縁に由り望月の駒と云ふた。(淀鯉の上)

【持筒】持料の鐵砲。

【もちつゝじ】紫薨躑のこと。

【持ちてうざれば方圖もない】持ち長ずれば方圖がない、持ち上げて尊敬すれば付け上つて際限がないとの意。

【餅の方】藕の方、とりもちにつく、もち扱ひ兼ねる方との義。

【緞の肩衣】麻糸で目を粗縫ふた布の肩衣、肩衣は上下の上を云ふ、門徒の佛參の小禮服。

【餅の形】ほんのお備へ物に過ぎぬ、看板だけとの意。

【餅花】餅を小さく丸めて花のやうに柳の枝につける、兒女等の遊びの一つ。

【餅は餅屋】各専門家は専門だけに他の及ばぬ所があるとの譬。

【持舟】箱形の器を持つこと。(槍狩の一)

【餅屋のお福】昔は餅屋の看板に、馬の顔へお多福の面を被せたものを出した、顔はお多福でもうまいとの謎である、こゝのは醜婚の意味に用ひる。(反魂香の中)

【もちや〜】ごた〜事、こゝのは情關係を指す。(千匹犬の三)

【銀り琴柱】銀りは袖がらみのこと、人を捕へる時、長竿に鐵針を付けたもので袖を搦んで引き倒すもの。琴柱は琴柱棒、琴柱を逆にした形、さす股の一種。

【もちり羽】曲れるよぢれる鳥の羽。

【木瓜】木瓜の紋は忠兵衛の紋どころ。(冥途飛脚の下)

【木香】香にかける、南蠻國渡來の藥品。

【木瓜鐙】木瓜形の鐙。

【もつけ】思ひ設けぬ、意外のこと。

【勿怪の内】 世に稀有なこと。
 【勿怪やし】 意外なこと、八卦の地口合。
 【物相】 飯を盛り分け量る器。
 【物體】 ものゝしい、尊大な貞。
 【持立て】 へつらひ持ち上げる。
 【尤も果敢なし哀れなり】 扱て懸路は切なる思ぞや」の段切の止めは珍らしく、浮世草子の口吻である、どんな調子で語つたものか？。(蟬丸の一)
 【もてかへす】 持て返へす、上を下へと混雑する状況。
 【持てかやいて】 持て覆へす、上を下へと返へす混雑の様。
 【本荒】 本立のあらく生ひてまばらなこと。
 【もどく】 批難反抗すること。
 【本興善町】 長崎の町名。
 【本重簾】 握から上を二ヶ所に簾を巻き、握の下を滋く巻ひたもの。
 【元綱中綱】 根もとの綱と、中ほどの綱。
 【元手にして】 軍兵の基礎と云ふ意義の所に元手の語を用ふ、元手は資本と云ふ商業上の用語、此種の用

例、隨所にある。
 【元の遣手王】 玉と呼ぶ遣手に子供を托したこと、別記「遊君三世相」にも書いて居る、彼には女の子、これには男の子となつて居るが、夕霧に子のあつたのは事實かも知れない。(夕霧の上)
 【本弭未弭】 弓の管の名稱、本弭は射る時下方になるもの、未弭は同じく上になる方。
 【求塚】 萬葉又大和物語にある、おとめ塚のこと、攝津若屋の女に、二人の男が戀ひ争ひ、遂に三人共生田川に身を投げて死んだ故事、その墓は、若屋の處女の塚を中心にして左右少巨離を隔て二人の男の墓が築かれてある。
 【元もころも無くなる】 元金も利子も共に失ふ、一も取らず二も取らずの義。
 【もとく】 損も益もない原の通りと云ふ俗語。
 【髻糸】 髻を結ぶ細い糸。
 【もとより請狀あらばこそ云々】 以下辨慶の勸進帳にもちる。(百日曾我の二)
 【元より上戸の家の者舌鼓たんく】 美酒に舌鼓を打

つは即ち鼓の師匠にはお家の物であるとの洒落、たんくは舌鼓する形容。(波の鼓の上)
 【もとよりも此島は云々】 謡曲「俊寛」の文による。(女護島の二)
 【古渡り】 昔の舶來品と云ふ意、こわたりとも呼ぶ。
 【裳なし衣】 裳裾の切れた破れ衣。
 【藻に栖む虫】 海藻に棲む虫の一種に、ワレカラと鳴くゆゑ其名をわれからと云ふ、我れから好んで夫婦になつた意に通はせる。(國性爺の二)
 【藻に栖む虫云々】 海の藻中に栖む虫で、われからと鳴く故、われからと稱する、古今「蟹のかる藻にすむ虫の我からと音をこそ鳴かじ世をも恨まじ」。(松風村雨の三)
 【物間】 物と物との間。
 【物言ひ伽】 話し相手やら寝間の伽、即ち妾のこと。
 【物入】 費用のこと。
 【物打】 太刀などの切先三寸のところを云ふ。
 【物を負ひ】 借財する。
 【物思ふ心の闇に迷ふ身云々】 後拾遺集師前内大臣の

歌「物思ふ心の闇しくければ明石の浦もかひなかりけり」に由る。
 【物が言はせて】 何物か言はせる、感通とでも云つたこと。
 【物頭】 槍、弓、鐵砲、旗などの組頭を云ふ。
 【物がなない】 命も何物もないぞとの義。
 【物臭し】 面倒な、邪魔臭し。
 【物さへ入れへば】 金さへ使へば。
 【物師】 世間ずれた掛引の巧妙な人のこと。
 【物仕】 色事師のこと。
 【ものして給はれ】 ある事を實行してくれとの意。
 【物大將】 これぞと云ふ大將たちの義。
 【物作り】 百性のこと。
 【物熟】 地より成り出る物、作物などの豊饒なこと。
 【物には阿んある】 物事には呼吸があるとの義。
 【物は言ふて見ようもの】 諺に「物は云ふて見づく」とある、何事も兎に角言ふて見た上ならでは、成否は豫測されぬと云ふこと。
 【物日】 紋日の義なれど、此處のは「二日拂ひ日」の

【物日】(反魂香の中)
 【物欲し月夜の熊手婆】 慾ぼけ婆を云ふ、物が欲しいの星から月夜、月夜に釜の釜から熊手婆と繋ひだ語。
 【物孟春】 「物もう」に孟春(立春)をかける。(雪女の上)
 【物真似】 一種の見世物で役者、歌鳥其他の聲色を演ずる技を云ふが、又身振狂言の事をも云ふた。
 【物見猛き】 物見高しと同義。
 【物見の松】 美濃國青野原熊坂長範物見の松。
 【揉瓜】 胡瓜など手薄くへいで揉むこと。
 【もみ烏帽子】 揉烏帽子は、軍陣の時、兜の下に着用するもの、柔かに揉んだ烏帽子の義。
 【もみ圃】 紙に事を記し、それを細く捻り、一人づつ抜き取つて占ふもの。
 【揉足袋】 甲胃着ける時に用ひる沓、つらぬき又は毛沓馬上沓とも云ふ。
 【紅葉傘】 雨傘の真中の色目の青いのを稱する。
 【紅葉狩の太刀】 平惟茂が戸隠山の妖鬼を退治した太刀、この脚色では廣文の家が承傳する事になつてゐる。(傾城酒呑の五)

【紅葉袋】 ぬか袋の異名。
 【紅葉踏み分け鳴く鹿の】 古今「奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき」の聲を戀にもぢる。(娥の一)
 【もむない男】 甘くない、不味なことをもむない、と云ふ大阪方言、むもないの通人的轉語、まづい男、劣つた男の義。
 【もめ】 「手もめ」に註した、參看。
 【もめさする】 俗に云ふ「はりこます」酒食などをおごらせること。
 【木輪幅】 幅の狭いことを身の上にかける。(今宮心中の中)
 【百敷】 禁中のこと、百々石敷にて、皇城の堅固なことを言ふた枕詞から轉じた名稱。
 【百入千入】 入は染物を染汁に浸す度数を云ふ、幾度となく染め込むこと。
 【もゝ尻】 尻の落ち着かぬ様、もとは拙劣な騎手の馬上の尻の居わらぬことを云ふたもの。(東山殿の四)

【桃園】 清和天皇の皇孫桃園親王第六宮が即ち源氏の祖六孫王源經基。
 【桃園親王】 六孫王經基のこと。
 【百度戦つて百度勝つ云々】 孫子の「百戦百勝非ニ善之善者」による、戦はずして人の兵を屈するが善之善なる者であるとの意、丸本には戦の戦ならざるものなど、戦と善とを誤つて書いたのがある。(川中島の四)
 【百の媚】 百は数の多いを示す語、最も媚めかしい形容語。
 【桃の酒】 三月三日節句に供へる酒、桃花を瓶子に挿す故に云ふ。
 【百夜の車】 深草の少將の故事。
 【もやくつて】 もやく、いら立つ。
 【もやくり】 もやくりに同じ、ごたつく、ごてつくこと。
 【もやく】 霧のかゝるやうに何やらごた／＼すること。
 【もらかします】 貰ふてもらう、遣はします。

【もらかせ】 貰貸せ、貰ひ取りのこと。
 【漏す水もなし】 水も漏らさぬ親身の中。
 【貰ひ溜】 報謝に貰ふた米錢など。
 【貰ふて往ぬ】 廓の詞、一客に揚げられて居る場合、他の客の方へ中座して往くこと。
 【もりきりおだい】 もりきりは盛切り、おだいとは飯の事を云ふ女の言葉、一膳盛りの飯と云ふことを色付けて云ふ。
 【守口】 今の河内國北河内郡守口町、京街道の一驛、細大根の守口漬で名高い。
 【森宗以】 薬を盛つても盛り相違ゆゑ……森宗以と名付けた葺醫者、これも天草亂の強將森宗意軒の名を借用して居る。(鳥原蛙合戦の二)
 【盛親僧都が白うるり】 「つれ／＼草」に「この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり」とは何ものぞ」と人の問ひければ「さるもの我も知らず、もし、あらましかば、この僧の顔に似てむとぞいひける、」但し此白うるりを松永貞徳の「慰草」には三箇の大事の一箇條として居る、その他、

いろ／＼面倒な解釋を下した註釋書があるが、もと／＼これは出鱈目の詞で今日の「のつべらぼう」と云ふやうな類の何の意味もないものであらう。

【杜戸明神】相模國森戸村出崎にある、守殿とも書く、本文に「生國杜戸の大明神」とあれど、曾我の生國は伊豆である、思ふに作者の誤解らしい。(五人兄弟の一)

【森の如く】大男が動き出て突つ立つた形容。(忠信の一)

【盛久】平家の侍、主馬判官盛久は觀音信仰の功力に由つて、鎌倉由井ヶ濱で斬罪の時、刀手の太刀折れて斬ることが出来なかつたと云ふ、其濱邊の刑罪の場を畫ひたものであらう。(兼好法師の上)

【守屋櫻】昔、天王寺太子堂の北、守屋祠の邊にあつた櫻。

【諸鈴】鈴は足踏の義で、馬に乗る時、足の踏み臺にする、鞍の兩側に垂れた馬具、諸鈴は其兩方の鈴を云ふ。

【諸鈴を合はせ】馬上の兩足を馬腹に打ち當てること

と、即ち疾走する貝。

【師賢卿】花山院藤原師賢のこと。(用文章の一)

【諸子】三寸ばかりの鮓に似た魚、小鰈の連れ子に見立てる。

【諸越が原】相州片瀬川の東岸と云ふ。

【唐の帝にあり云々】唐土の皇室に所藏する云々。

【唐土人の褒め詞】傳説の韓人王仁が仁徳天皇の徳を稱へた「難波津に咲くやこの花冬こもり、今を春べと

咲くやこの花」の歌を指して云ふ。(卯月の上)

【諸白髪】友白髪など云ひ、尉と嫁の久しき契りを云ふたもの、偕老の義。

【諸共にあはれと思へ山櫻云々】金葉集、大峯山にて行幸詠。

【諸白】極上の酒。

【諸刃の劍にて人を切る云々】徒然草にもある、人を毀けんとして自ら傷くの喩。

【諸葉の宮】諸羽の宮、四の宮河原附近にある。

【諸捻り】柄巻糸の名。

【雙眉】朝の前の中尖りの壁の下に少し出たところ。

【膠】どぶろく、濁酒。

【門葉】一門、一統。

【門を過るに我家に入らず】支那の禹が、政治に奔命して外に居ること十三年、家門を過ぐれども敢て入らずと云ふ故事による。

【門を破る樊噲】高祖病と稱して群臣と逢ふことを遠ざけた、樊噲聽かず門を打ち破つて禁中へ突入したと云ふ故事。

【文覺】京都高雄山神護國祚寺の僧、もと遠藤盛遠と稱した院の武者所、源渡の妻袈裟御前に戀し誤て殺したが因となり、佛門に入り文覺と號した。

【もんさく系圖】文作系圖、即ち戲作系圖の義。但し文作とは、即興的に面白味のある文章を作ること、又其文を云ふ。(雪女の中)

【文珠】佛語、阿彌陀如來の左側に侍して智慧を掌る菩薩を稱する、文殊とも書く。

【文珠師利菩薩】文珠菩薩のこと。

【文珠菩薩釋尊の御法を受け云々】法華經提婆達多品に出たる、文珠菩薩が龍宮界へ濟度に赴ひた事。

【文珠菩薩釋尊の御法を受け云々】法華經提婆達多品に出たる、文珠菩薩が龍宮界へ濟度に赴ひた事。

【文珠藥師堂】文珠堂とは天王寺内太子殿の北方三昧堂を云ひ、藥師堂とは境内西北隅にある、往時の惟寺本堂(藥師堂)のこと。

【文選】支那梁の昭明太子の撰、漢魏六朝の間の文と詩を集めたもの。

【門地】家柄系圖のこと、他所とは別格な門地の義。

【問注所】當代の裁判所、訴訟を扱ふ役所。

【もんち〜に出る】門地以外、流儀以外に出る、違つた方面へ出ること。

【紋で覺へし提灯】勝臺の愛染祭りに、人氣商賣の役者藝妓が、自分の紋を付けた提灯を奉納して人氣を願ふ風習のあつたことは、「心中双水の朝日」の中の巻にも描かれて居る。(冥途飛脚の下)

【文徳の一つ木末】文徳天皇の同流。(井筒業平の一)

【主水司】井水、氷室など掌る宮内省の屬官。

【もんば】孟八郎、愚人と云ふ罵詈、支那俗語、碧巖錄にも見へる。(唐船唄の一)

【紋目】別名物目とも云ひ、物日の訛かとも云ふ、家紋の如く一定し居る故紋目と云ふとの説、其他諸説

あれど不確實、新町は頗る紋日多く一年の内百五十日は紋日だと云はれて云る。

【紋日通れて顔隠し】 極つた對手のある客は紋日は高くつくと云うので、わざと顔を隠し今日は一現ですまそうと、ずるく考へて忍びの風で行くの云ふ、遊客の一面の打算的な所が見へて面白い。(天網島の上)

【紋日の長持】 長持は遊女の揚屋入に付けて運ぶもの、殊に紋日には澤山に集積するの意。(夕霧の上)

【紋日は頼まぬ】 紋日の入費は頼まぬ。

【門へ下り】 樽屋町の木戸を外へ降る。

【文盲不仁】 無學無智、そして人道に外れた所業を云ふ。

【もんもう】 本望にかける洒落、文盲を利かす。(加増の四)

【門々不同八萬四云々】 唐の善導大師「禮讚偈」の文、法門八萬四千の多きに及ぶが、阿彌陀佛の名號法は利劍の鋭き如く、一聲の唱名で罪業消滅すとの意。



【やあえい】 餅搗きのかけ聲、やあは杵を上げる時、えいはおろす時の掛け聲。(夕霧の上)

【野遊】 野邊に遊樂すること。

【灸行】 灸をすゑたお賃に茶葉など與へること。

【灸の婆】 灸をすゑる專業の婆、轉じて灸をすゑる人の稱。また、灸をすゑて貰ふ人の姿勢から名付けたともいふ。

【灸箸】 灸治の時、もぐさをはさむ箸。

【刃】 焼刃の音便、焼刃のついた刀劍類の總稱。

【刃の錆】 焼刃の錆、焼刃の錆をいふ。

【刃除の守】 劍難を除けるお守札。

【刃渡し】 出来上つた刀劍を其註文先きへ手渡しすること。

【刃渡し】 出来上つた刀劍を其註文先きへ手渡しすること。

【八色の雲の故郷】 八雲立つ出雲八重垣の歌にもちつて、暗にこの事件のあつた出雲の國をほのめかしてゐる。(鎗權三の下)

【夜陰】 夜分、夜。

【養由】 楚の太夫養由基、有名な射術の名手、藹文類聚に「射を善くする者、楊葉を去ること百歩にして之を射、百發百中す」とある。

【楊雄が甘泉の賦】 楊雄は蜀郡成都の人、博學の士、口吃にして沈思を好んだ、甘泉、河東、校獵、長楊の四賦を奏して名高い。

【養由が矢に啼く猿】 養由基は射術の名手、楚王に白猿があつた、養由始めて弓を調べ矢を矯むるを見て木を擁して號泣したと云ふ故事、淮南子に所載。

【養由は百歩に柳の葉を射る】 支那の養由基が柳の葉を射るに百發百中であつたといふ故事。

【陽炎瞳々】 かげらふのひらめきわたること。

【永延二年の頃云々】 第六十六代一條天皇の即位二年目、この年盜賊の類逮捕せられた記録がある、これを大江山の鬼事件に利用したもの。(傾城酒呑の三)

【永延二年の頃云々】 第六十六代一條天皇の即位二年目、この年盜賊の類逮捕せられた記録がある、これを大江山の鬼事件に利用したもの。(傾城酒呑の三)

【家請】家を借受ける時の請け人、保證人。

【屋内】家内中。

【影向石】神佛が一時本體を應現し給ふた其事跡のしるしの石。

【羊羹】小豆を原料にして作った菓子、もと支那から渡來のもの。

【楊貴妃】唐玄宗帝の妃、名は太眞、絶世の美人として代表的に著名である。

【揚貴妃櫻】八重櫻の一種、花瓣は紅にして端白し、昔、大和奈良の僧玄宗が愛した故この稱があるといふ。

【楊弓】玩具具の弓のこと、二尺八寸程の小さな弓、多くは繼弓にて、座つて射る、昔、兒童等が楊の枝を折つて弓にして遊んだことから起因したともいふ。

【楊香】支那の二十四孝子の一人、少時父を虎に奪はれた時、身に寸鐵なきも一意父を救はんとの一心から虎に組みつき頸を捻した、猛虎は驚いて父を放ち逃げ去つたと云ふ故事。

【陽虎】虎のこと、「虎者陽物百獸之長也」。

【楊枝】齒を掃除するために使ふもの、もとは僧具十八物の一、主として楊柳を材とする、齒木とも云ひ

古來印度の佛家で使用した、眞言宗では灌頂式に、行者に先づ楊枝を與へる式がある。

【養生灸】身の養生のためにする灸。

【楊州の鶴】鶴に乗り楊州に上ると云ふ故事、一身に多くの快樂を兼ね受けやうとするを云ふ、客あり各其志す所を言ふたが、其内の一人曰く腰に十萬貫を纏ひ鶴に騎りて楊州に上らんと、三者の志を一人にして兼ねたと云ふ物語がある、楊州は古來繁華を以て有名な都で、「煙火三月下楊州」など唐詩に詠まれてゐる。(關八州繁馬の四)

【様子ある夫婦】後の文などから推して彦九郎とお種とは一方ならず戀し合ふた中らしい。(波の鼓の上)

【永沈】地獄の異稱、もとは淨土双六の用語で、一度こゝへ墜つると永く出ることの出來ない場所をいふた。

【やうでう】横笛のこと。

【陽明門】大内裏東方の門の一つ。

【瑤瑤莊嚴】聖淨な裝飾の義、瑤瑤は佛像等にさゝぐる裝飾、莊嚴はおごそかに麗しいこと。

【永離三惡道】永久に三惡道を離脱すること、三惡道は其餘下に註した。

【養和元年】安徳天皇朝の年號。(娥の一)

【やえいとな】やは懸け聲、えいとなは腰を卸し座る時の拍子詞。(千匹犬の三)

【矢落】射矢の落ちる、的の下にあたる箇所を稱。

【矢を繼ぐ如し】矢繼早のこと、續けさまに矢を射る如き早さをいふ。

【八百屋お七】江戸本郷八百屋の娘お七は戀人吉三に逢ひたい一念から自分の家に火を放つて殉死した。(卯月の中)

【八百萬屋】京都吉田神社の八百萬神にもちつて八百屋のことをいふ。(枕言葉の三)

【屋形】身分のある人の邸宅の尊稱、館。

【屋形】屋形船のこと、家屋形に模して屋根や戸、障子など設けた船。

【屋形】こゝのは、牛車の車箱の屋根をいふ、車の屋

形。(弘徽殿の五)

【屋形黒】小松内大臣重盛の乗馬の名。

【箱城】箱と城とを兼ねたもの。

【箱の高欄】こゝのは船屋形の勾欄をいふ。(浦島の四)

【家堅め】建築物の柱立の時などに厄難除けのためにする儀式。

【家形紋】家の形を出した紋様。

【やがて〜】やがて又お目にかゝりましたやう、左様ならとの意。

【矢柄】矢の體を云ふ、箒、篋(の)とも稱す、矢竹で作る。

【矢柄責】矢柄を持ち打擲する拷問の一法。

【野子】狐の異名。

【夜歸】夜歸ること、前文の犬の縁語、「柴門聞三犬吠、風雪夜歸人」(賢女手習の一)

【やき】馬の丈に用ひる語、八寸のこと、馬の丈は四尺を定尺とし、それ以上一寸餘を一寸(キ)、二寸余を二寸(キ)と云ふ、八きは即ち八寸のこと。

【八寸】馬の丈の語、「やき」に註する。

【夜氣】夜の空氣。

【八寸余り】馬の背の高さ、四尺を定尺とし、それ以上一寸余を一寸(キ)といひ、八寸余を八寸(ヤキ)と

稱す、即ち四尺八寸の背丈。

【八段】八きさみ、八切れ、八片。

【焼付】鍍金、めつきをすること。

【焼研し】研ぎ立て、研いだばかりの焼双。

【焼鳥に捉緒】注意の上の注意、用心の上の用心、焼

いた鳥にも尙ほ緒をつけて飛ばぬ用心するとの義、捉緒は鷹の脚に結びつける紐。

【焼双】双物の双を火に焼き水に入れて堅くしたものの。また、双の上に見ゆる波紋のやうな模様。

【焼味噌】味噌を炙り焼いたもの。

【焼餅】炙った餅のこと。

【焼物】魚、鳥など炙り焼いた食物。

【焼物師】陶器師のこと。

【矢切】忍び返しも云ひ、又矢間とも云ふ。

【役馬】おかみの御用に召されて出る馬、公儀用の役

馬。

【役儀】役目。

【八種の雷】雷には三種ありと云ひ又八種ありと云

ふ、八種の雷とは、大雷、火雷、土雷、稚雷、黒雷、山雷、野雷、裂雷と、其説明は本文にあり、或は作者の假作ではあるまいか? (天神記の四)

【薬師】薬師瑠璃光如來の略、須彌山の東、淨瑠璃國の教主、衆生の病疫を救はんと誓願、左手に藥壺

を、右手に施無畏印を結んだ形。

【薬次】薬師寺次良左衛門の略語、廓風の粹詞。(兼好法師の上)

【薬師寺次郎左衛門】薬師寺次郎左衛門は、この作や

忠臣蔵には小人に描かれてゐるが史實では浦上則國の臣で忠勇の士である、本編第七卷「兼好法師物見車」の解説參看。(兼好法師の上)

【薬師堂に誓詞】有馬温泉の湯女が有馬にある常喜山

温泉寺の本尊薬師如來に誓ふたと云ふこと。(百合若

の二)

【薬師如來ぞ】薬師如來も照覽あれとの祈誓の詞、春

【厄拂ひ】大晦日、節分などの夜に門に立ち厄難はら

ひの面白い詞を唱へ米錢を乞ふこと、今は主として

節分の夜に限られてゐる。

【八雲立つ】古事記の素盞鳴命のやくもたつの句が、

出づる雲の約である出雲について居るより、出雲

にかけていふ詞となつてゐる。

【八雲立つ出雲八重垣妻籠に云々】「八雲立つ出雲八

重垣妻籠に八重垣つくる其八重垣を」神代紀に見ゆ

る素盞鳴命の神詠、我國三十一文字短歌の最古のも

のと云はれてゐる。

【櫓】船やぐらのこと。(博多の上)

【櫓】こゝのは火燧櫓(コタツヤグラ)のこと、火燧に

用ひる四つ柱のある框のこと。(將基經の三)

【櫓にかける】櫓は相撲四十八手の一つ、櫓にかける

とは、やぐら出し又はやぐら投げのこと。

【櫓幕】櫓に張り渡す幕。

【櫓持出し肩すかし】いづれも相撲の取り手の名稱。

(傾城酒呑の一)

【薬力】薬の功力。

薬は醫者故、薬師如來に誓ふた。(冷泉節の中)

【薬師は東方】薬師如來は須彌の東方瑠璃光淨土の主

なればいふ。(冷泉節の下)

【役者評判】役者の評判など書いた刷り物の讀賣をい

ふ、夏の大阪の橋の上又は市中などを賣り歩いた。

(今宮心中の上)

【役者物まね】役者の身振声色などつかふこと。

【厄神】疫病を傳播させると云ふ疫病神のこと、轉じ

て亂暴猥惡なあばれ者で、最も人に嫌はるゝ者に付

ける二つ名となつてゐる。

【やくたい】やくたいなしの略、たわいもない、らつ

ちもない、しだらなし、たわいなし。

【薬湯】薬品を混和した湯、温泉、薬風呂。

【薬湯を留める】薬湯に他人を入れることを禁ずる、

即ち留め湯にすること。

【約諾】契約して承諾すること。

【厄崇り】厄年に當つた時、その年に凶事あれば、そ

れを厄崇りと稱して恐れた。

【役に立てる】用に立てる、用達する。

【八栗山】 四國八十八ヶ所の八十五番、讃岐國木田郡牟禮村八栗寺の所在。
 【矢車】 矢車の紋所、矢を並べて車の形にしたもの。また、矢を挿して置く臺のことをも云ふ。
 【野火】 野原を焚く火。
 【薬王香】 薬王とは靈藥中の靈藥、それを香の名にして名香の稱としたのであらう。(娥の四)
 【夜光貝】 螺殻の大きな中に眞珠光を持った貝、杯、鈕などに使ふ。
 【夜光の珠】 古昔、支那にて暗中でも靈光を放つといふ名珠。
 【薬王木】 薬王樹、良藥中の良藥、捺女着城因縁經に「有ニ薬王樹一、從レ外照レ内見ニ人腹藏一云々」。
 【薬罐】 銅、眞鍮などで作つた鐵瓶に似たもの、昔は専ら藥を煮るに用ひたが今は主に湯を沸かすに使用する。
 【やくわん】 薬罐頭のこと、坊主の罵倒語。
 【薬罐を起す】 ぶつ／＼と湯の沸き返る如く怒ることの喩。

【薬罐聲】 騒々しいどら聲のこと、俗に石原薬罐ともいふ、小石原の上に薬罐を引きずつて行くやうな音の響きをいふ。
 【やけ】 自暴自棄のこと。
 【焼石に水掛論】 焼石に水との喩と水掛論のもぢり、焼石に何程水をかけても其功のない水掛論、骨を折るのみで徒勞に歸すると云ふ譬。
 【焼釘】 焼けた釘。
 【焼首】 火に焼け爛れた首。
 【焼妻戸】 菅原道眞の靈が比叡山法性坊の妻戸に吐きかけた柘榴が、忽ち焰となつて燃え上つた、其焼け痕が残つてゐる、それを法性坊の焼妻戸と稱してゐる。「さ」の部「柘榴天神」の註參看。
 【焼面火に懲りず】 やけど火に懲りずとも云ふ、曾て失敗したにかゝはらず又同じ事を繰返すことの喩。
 【焼山】 四國八十八ヶ所の十二番、阿波國名西郡下分上山村焼山寺。
 【薬研】 漢法醫の用ひる藥種を押碎く金屬製の器具。くすりおろし。

【薬研鈔】 薬研の車のやうに圓くて周圍の尖つた鈔。
 【薬研腹】 薬研は漢方醫の用ひる俗に藥おろしと云ふ金屬具、その薬研が藥種を碎いて粉末にするやうに、指で腹の子を墮胎さすにかけて云ふ。
 【野狐】 野狐禪、禪學を深く修めずして而も自ら悟り類なのを嘲つて云ふ語。
 【冶工】 鍛冶職、冶金をする職工。
 【八聲】 八聲の鶏の略。
 【や聲】 やつと云ふかけ聲。
 【や聲を上げる】 「や」と云ふかけ聲を上げること。
 【八聲の鳥】 夜の明け方に屢鳴く鶏の聲々を云ふ。
 【やごとなき】 やんごとなき、尊き、凡ならぬ。
 【屋財家財】 一切の家の道具。
 【家探し】 家の中を上を下へと捜しまはること。
 【矢先に立つ石】 強い一念の力は石をも射貫くといふ譬、支那の楚の熊渠子が石を虎と見て矢を射たといふ故事による。
 【矢叫び】 矢を射當てた時、射手の聲を揚げることに、又その聲をいふ。

【優人】 風流雅客、みやびと。
 【矢狭間】 櫓又は塀などに矢を射るために明けた道を云ふ。
 【矢間十太郎】 赤穂義士間重太郎の變名。(碁盤太平記)
 【矢間の庄司】 赤穂義士間喜兵衛の變名。(碁盤太平記)
 【矢籠】 矢を盛り入れる器。
 【野子】 拙者、小生、野生、自己の謙稱。
 【屋敷方】 武家がた、町方など云ふ對稱。
 【養ひ】 巡禮に報謝の意、養ひとなるもの、義。(五人男の四)
 【玄孫】 曾孫の子、鶴の孫ともいふ、「つ」の部「鶴の孫」の註參看。
 【八雲の岡】 山城國にある、紅葉、時雨などの名所。
 【椰の水吞】 椰子の實を二つに割つて作つた水吞。
 【八洲】 大八洲國、八は彌にて多島國の義、日本國の異稱、古語。
 【屋島】 讃岐國屋島の浦は源平合戦の有名な舊蹟、屋

鳥は平宗盛が安徳天皇を奉じて行宮を作つたと云ふ。

【屋島院宣】 元暦元年平宗盛一の谷に敗れ、讃岐國屋島に城を築き、安徳天皇を奉じて之れに據つた時、賜つた院宣を指す。

【矢島の右衛門】 赤穂義士矢頭右衛門七のこと。(碁盤太平記)

【夜叉】 鬼、形醜醜怪暴惡な鬼神、後、佛に歸し諸天の守護神となつたと云ふ。

【野錫】 愚僧、拙僧と云ふと同義、僧自らの謙稱。

【夜食】 昔、一日三食の外、夜に入つて別に食事をしたことを云ふ。また、單に夜間食事をすることにも云ふ。

【夜食が来た】 こゝのは賣春婦が来たといふこと。(娥の四)

【やしよめ】 優女(ヤサメ)の轉、萬歳歌に「やしよめ」京の町のやしよめ」などある。

【鐵】 矢後(やじり)の義、箭にはさんで物を射通す鐵製具、上古は石、獸骨を用ひた。又、射術、矢を射る

伎倆などの義にも用ひる。

【鐵を争ふ】 矢を放つて争ふ、即ち戦争すること。

【家尻切】 家や庫などの背後の壁を切つて入る盜賊。又は女郎などに、人の尻毛までむしり取る狸め狐めと罵る詞にも使はれる。

【やじり切る】 こゝのは男色をいふた洒落。(孕常盤の三)

【鐵白く】 鐵の光ること。

【矢印】 射手の名又は家紋を、沓卷の上又は羽本の下に、漆、焼印、小刀などで記し付け、矢の射手を明白ならしめるもの。

【安居の天神】 大阪天王寺西門筋の西邊阪、清水の南にある、二十二社詣の十二番。(卯月の上)

【安居の天神】 相場の安いのをもぢつて安居天神といける。(油地獄の中)

【安居の宮】 大阪天王寺の西、邊阪にある安居天神。

【安方】 そとの濱に、うたふ(善知鳥)と云ふ鳥がある、濱の砂中に子を隠して生み置くと、獵師が母のうたふの眞似して、「うたふ」と呼ぶと「やすか

た」と答へて這ひ出るを捕へると云ふ傳説がある、それで、子は安方云々の語が起つた。

【安國】 安らかに治まれる國。

【矢疎め】 身體が矢の爲めにすくめられて、動きのつれぬこと。

【やす大事】 易いやうで易からざる大事であるとの義。

【耶輸陀羅女】 印度拘利城主善覺長者の女、釋尊が悉達太子時代の妃。

【安綱】 伯耆國大原刀匠の祖、大同年間の人、名刀鬼丸の作者。(千載集の五)

【やすのぶ】 安信、正信の子、越後の刀匠。(千載集の五)

【八隅】 八方の隅、四方八方。

【休み所】 休み憩ふ場所、住家のことをも云ふ。

【安頼】 播磨國の刀匠、正元年間の人。(千載集の五)

【やすらひ花】 京都紫野の今宮神社にて舊三月十日(今は四月十日)に行ふ祭禮、寂蓮の此祭の作歌中に「紫野の根の國の神の社に花を奉る、其の日は也須良

(ヤスラ)にはてよ、也須良にはてよ」とあるより、やすらひ花の祭の名が起つた、もと鎮花祭(ハナシヅメのマツリ)に擬したものといふ。

【鐵】 金屬を磨き研ぎ、鋸の目を立てなどするに用ひる鋼鐵製具。

【矢摺の籬】 矢摺に巻きつけた籬。

【八瀬】 京都の北、愛宕郡八瀬村、比叡山の西麓にあたる。

【瘦隠し】 駄負ひのこと、馬の尻に覆ひ掛けるもの。

【瘦我】 やせ我慢のこと、まけおしみ。

【夜前】 前夜、昨夜、ゆうべ。

【八十川】 數多の川。

【八十島】 數多の島々を云ふ。

【八十瀬の川】 伊勢國鈴鹿川の別稱。

【八十梟】 たけるは荒びた夷族の稱、多くの勇猛な夷をいふ。

【八十縫の白楯】 書紀神代一書に「供ニ造百八十縫之白楯」を探る、これは楯を以て神幣と爲したもの。(振袖始の一)

【八十の梟】 熊襲の魁師川上梟師をいふ。(五人兄弟の三)

【やだ】 批難、惡癖、欠點。

【夜盜】 夜中盗みをする者、夜の盜賊。

【矢竹心】 彌猛心、いよ／＼猛き心、勇みに勇み立つ心。

【矢立】 矢立硯の略、墨壺筆を入れる筒の付いたもの、携行用硯。

【矢立の杉】 相模國にある八幡宮の神木、昔平權守が夷狄征伐の出陣に上差の箭を放つて杉に立て、首途の吉凶を占つたと傳へる。(五人兄弟の三)

【矢立の杉】 別註の如く相模の國にもあるが、甲斐笹子峠尾張熱田等諸國にある、戦の首途、願望等の吉凶を占ふ心と、山神への手向けの心で、杉の枝に向け一矢を放つことをいふ。

【矢田野】 越前國有乳山の北にある野の名。

【八咫の鏡】 三種の神器の一。

【八衢】 道の八つに分れるちまた、數多に分岐せる道の辻。

【八千代】 測り知られぬ長い年代、永久。

【八束】 矢の長さを測るに一束を一握り指四本の幅の長さとし、八束は其八倍の長さ。

【矢束】 矢の長さ。一束は一握り、指四本の幅の長さを云ふ。

【厄介】 面倒なこと、煩はしいこと、邪魔くさいこと、一説に、厄會の轉にて、則ち厄難が會集するとの義といふ。

【八つ頭】 八つ(午後二時)の上刻。

【八束の劍】 束(つか)の八つある長い劍、一束は拳一握りの長さ。

【八束穂】 八束に余る長く高い稻の穂、豊饒奉平の世の相。

【矢繼早】 矢を引つ續けて射る其技の迅速なこと。

【八つ限】 八つの刻(今の午後二時)を限りといふこと。(會稽山の一)

【屋造り】 家作、建築、家の結構。

【やつくるり】 やつと掛聲して、くるりと投げること。

【奴髭】 鎌ひげ、奴の生やすひげ。

【八つ裂】 寸断に裂くこと。

【やつし書】 字の畫を省略して書くこと、字をくづして書くこと。

【谷七郷】 鎌倉の地、東は山西は海、南北の地谷々に民家を構へる、七郷がある、小坂、小林、葉山、津村、村岡、長尾、矢部。

【やつしは甚左衛門】 やつし役、濡れ事の名人、大和山甚左衛門をいふ。

【八つ時分】 今の午後二時頃。

【やつす】 字形をくづす、省略して書くこと。

【八乳】 乳房が八つあるもの、猫の皮が八乳であるので三味線の皮として最も珍重される。

【やつちや／＼】 景氣付ける掛け聲、芝居などの譽め詞にも用ひる、やんや／＼と同意義。

【八つ橋】 三河國池鯉鮒の北、在原業平東下りの途に詠歌あつて有名な杜若の名所。

【矢坪】 矢でねらひを定める箇所、矢どころ、矢壺。

【八振】 鼻緒の一種。

【八つの隅】 「八隅」に註した。

【八股の蛇】 出雲國高志(神門郡)にあつて暴威を逞ふしたといふ八岐の大蛇、後に素盞鳴尊のために征伐された時、その尾から天叢雲の名劍が現はれたといふ古代の傳へがある。(振袖始の五)

【八またの角】 八つに分れて生えた角。

【八つの】 八ヶ所に的を建て、これを射る、騎射的の一種。

【八ツ目の箭矢】 箭矢の箭に多くの目のあるものを稱する、八ツ目かぶらとも云ふ。

【八目草鞋】 八葉蓮華に象つた乳の八つある草鞋のこと、修行者が重に用ひるもの。

【谷々】 鎌倉の谷七郷の谷々、鎌倉中の意。(千匹犬の四)

【やといど】 雇人(やといびと)に同じ。

【宿を頼んで】 宿坊を頼んで、揚屋の亭主を頼んで。(冥途飛脚の上)

【宿貸さぬ高野聖】 「高野聖に宿貸すな、娘とられて恥かくな」といふ諺がある、高野僧と稱して諸國を荒した惡僧が多かつたから此諺が生れた。

【宿小屋】宿りとする小さな家。

【宿茶】家を借つた人が家主や長家の人々を招いて茶を振舞ひ饗應すること。

【宿出】家を出ること。

【宿遣入】我が家を得て、そこへ這入ること。

【宿札】泊り札とも云ひ、江戸時代には又塚札とも稱し、宿泊者の名を記した札のこと、これを宿屋の前又は其宿驛の前後などに立て置く、幕府年中行事には「宿札は長さ三尺五六寸、幅一尺位にて凡そ一丈五六尺もある竹の先さへ懸ける、此札は其宿驛を通行する諸候の姓名を記したるもの悉く備へあつて、平常は高き柵に載せ燈明造酒など供へ、何月何日何之守其本陣に宿すと通知があると、直ちに其人の宿札を本陣の門前の竿頭に上げた」とある。(松風村雨の三)

【矢通】矢の通るところ、射場で、射手の位置から射場までの間。

【矢留金物】鎧の胸板の金物のこと。

【矢取】射場で、矢を拾ひ集めるかゝりの人。

【宿割】それ〴〵に宿泊者の割付けをすること。

【柳川】筑後國柳川、藩主立花左近少監のこと。(薩摩歌の上)

【柳裏】柳色の裏地のこと、また、それをつけた衣服。

【柳が浦】豊前國企救郡と長門國豊浦郡との間にある濱邊。

【柳腰柳髪】スツキリとした容姿の形容。

【柳櫻】をこきまぜて「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり」の歌からとる。(出世景清の上)

【柳煤竹】風に柳のもぢり、商ひの染色の煤竹色にかける。(重井筒の上)

【柳に燕】梅に鶯、竹に虎の如く、相對的に好配合である喩に用ひる。

【柳の五つ衣】五つ衣の襲ねの色目が柳色であること、柳色とは表白く裏青、又、表裏とも薄青色だとも云はれる。

【柳の枝】正月の餅花をつけるためのもの。(夕霧の上)

【柳の鬘】柳で作つたかづら、葉のついたまゝの柳を

髪飾りとしたもの、古昔、三月節句の儀式に用ひた。

【柳の髪】長く美しい毛髪の稱。

【柳の眉】柳の枝に芽の出るのを眉にたとへる。又、柳條のやうなしなやかな眉の美稱。

【柳葉】鮫の一種、形柳の葉に似た故名付く。

【柳は縁花は紅】眞理の窮るところは自然の外に何物もないから、説明はできぬ、柳は縁、花は紅にて、何故然るかは知り難しとの意。

【柳原】京都上京の町名、もと柳原家の祖の日野中納言の邸があつたところ。

【柳原の法印】柳原は京都上京の地名、名高い法印があつたらしい。(反魂香の中)

【柳町】筑前博多にある遊女町、今は九州大學建設のため移轉された。

【柳本】大和國磯城郡の名邑。

【胡篋】背に負ふ矢を盛り入れた具のこと、製式種類さまざまある。

【梁にかゝれる魚】川瀬にて梁簀にかゝつて捕えられ

る魚のこと、即ち掌中に握られることの意。

【八百八十氏】藤原、源、平、橘等種々多數の氏姓の稱。

【家鳴】家が鳴動すること。

【屋の内】家の中、家族の中。(小栗判官の三)

【磁】やじりと同じ。

【柔風】柔かな風、轉じて風に柳の取り締めのない浮氣風の意にも用ひる。

【矢箱】矢を藏めて置く器。

【矢管】矢の上端、弦を受けるところ。

【矢管の印】梶原氏の紋所、委しくは「矢管の紋」の註參看。

【矢管の紋】左右兩端から中央に集つて、ちやうど矢管の形した紋どころの稱、梶原氏の紋などがそれである。

【矢走】近江國草津の西にある、近江八景の一、矢走の歸帆、矢橋とも書く。

【八幡】山城國男山の東麓にある里、男山八幡宮の所在で名高い。

【野馬臺】 野馬臺とは日本(ヤマト)の漢譯。
 【野馬臺とやらん…糸を引いて文字を導く】 日本の阿部の仲磨が唐土に渡り野馬臺の難詩を蜘蛛の糸の導きによつて讀み得たといふ故事、野馬臺とは「ヤマト」のこと。
 【八幡岩清水】 山城國男山岩清水八幡宮を云ふ、八幡大神を祭る、源氏の武士の氏神として、また朝廷の崇敬特に重いたため全國にて著名の大社として多く戯曲にも上される場合が多い。
 【八幡の馬下り】 山城國男山岩清水八幡宮の臨時祭のこと、毎年三月中旬日を祭日とし、この日天皇神馬御覽の行事がある、舞人等山城歌を歌ひつゝ馬場にて馬を乗り廻すのが見ものであつたと云ふ。
 【八幡六郎】 史によると鹽谷高貞の臣であるが、こゝでは後の「碁盤太平記」に大星由良之助と名を變じ始めて此戯曲が當代の出來事赤穂義士討入事件に關係あることをほのめかす、「兼好法師物見車」の上、中の二巻と「碁盤太平記」との連絡も、たゞ此八幡六郎の大星由良之助によつて結ばれてゐる。(兼好法

師の中)
 【柔術】 素手で組み合ひ戦ふ武術の一種、正保の頃、支那明の歸化人陳元贊が江戸にて其徒に教へたに始まり、大に流行した。
 【やはらか飯頭】 やは／＼した飯頭。
 【夜半樂】 雅樂の名、平調の曲の名、明皇州より京に還る其夜半に章后を誅した、由て夜半樂を作つたと云ふ。
 【彌彦の峯】 越後國西蒲原郡にある、麓に彌彦神社がある。
 【藪】 竹、雜木、雜草の生ひ茂れるところ。又、藪などを捨てる場所、ごみ溜めなどの稱。
 【藪醫】 下手な醫者、藪は「野巫」の義とも云ふ。
 【藪入】 奉公人が公休を貰ふて故里へ歸ること、毎年一月と七月の十六日前後に行はれる、藪林の故里に歸るの義。
 【藪蚊】 普通の蚊より大きく、脚に縞の斑がある、多く藪に住み晝に出て人を刺すこと最も猛烈なもの。
 【藪蚊の餅つき】 蚊の群が柱を立て、上りつ下りつす

る様を俗に餅つきといふ。
 【藪から棒】 突然、不意などの意、藪の中から突として思ひがけない棒がつん出る、その唐突な譬。
 【流鏑馬】 馬上にて馳けながら鏑矢を發して的を射る、騎射の一種、水干に綾蘭笠をつけ、重藤の弓を持つ。
 【やぶしわかざるめぐみのしるし】 古今集の「日の光りやぶしわかかねば石の上、ふりにし里に花も咲きけり」の歌から出る、日光の恵みは藪蔭(やぶし)をも分たず汎く照らすにより、花も咲くとの意。(松風村雨の三)
 【矢機】 機を立て並べたやうに矢の射手が隙間もなく列し居ること、又、其矢が少しの空隙なしに一面に飛んでくること。
 【藪力】 山出し力と同じ、荒くれた力量をいふ。
 【藪に功の者】 藪醫者の中でも功者なものがあるとの義。また野夫の中にも剛の者があるとの義など、他にいろ／＼の説がある。
 【藪に咲く梅】 隠れたる名将賢士などを譬へていふ。

【矢文】 矢柄に文を結び付けて射て送るもの、又はひき目の穴の中に収めるものもある。
 【破れかぶれ】 自暴自棄の良、どんな結果になる共考(なし)になること。
 【破れ車で輪が悪い】 道話的古語、自分がわるい、我(輪)が悪いの洒落。
 【破れ層】 無益な月日を數へるといふ洒落詞。
 【破ればぐわちもなかりけり】 悟つて見れば粹も不粹(ぐわち)もなかりけり。(壽門松の下)
 【八重織】 地を極めて厚く織つた織物。
 【八重垣】 幾重にもかさなつてゐる垣。
 【八重霞】 幾重も重なつて立てこめた霞。
 【八重飛白】 幾つも重なつた飛白。
 【八重霧】 霧深く立てこめること。
 【八重雲九重の虎の關の關】 幾層とある雲天に恐ろしい虎豹の關所があるといふこと。(井筒業平の一)
 【八重櫻】 山櫻の變種、大形重瓣の花を開く、牡丹さし。
 【八重の潮路】 はるかに隔つる海のあなたとの義。

【八重籬】 幾重にも作られた籬のこと。
 【八重律】 いやが上に生ひ茂るむぐらの稱。
 【八重山吹】 八重咲きの山吹。
 【やぼてり柿】 溢染に似た色を云ふ。
 【やぼてん】 野暮天、野暮の絶頂、やぼの極點。
 【野暮の粹】 不粹に見へて却て粹の上乗であるといふこと、粹の野暮の對語。
 【八百屋】 主として野菜類を賣る商店。
 【八百や萬】 八百と云ひ萬と云ひ數の多いことをいふ。(背庚申の下)
 【八百萬】 極めて多數のこと。
 【八百萬神七千餘座】 多數の神々と多數の鎮座所。
 【山青く山白くして雲來去す】 勢盛んな時は招かずとも人群至するといふ喻。
 【山跡の國】 大和の國。
 【山初】 柚人などの山稼ぎに使ふあぶご。
 【山うつぎ】 山空木、木の名、こくさぎの異名。
 【山姥】 深山に棲むといふ妖女。
 【山海の幸換へ】 神代記にある海を掌る火照命と陸を

司る火遠理命の兄弟が互に海の幸と山の幸とを交換した故事。(冷泉節の上)
 【山を抜く】 抜山の勇、山を抜き取る程の勇猛。
 【山蔭中納言】 宮中にて料理一切の作法を掌る家筋。
 【山影の映るか水も云々】 以下、鹿島三島諏訪まで、謠曲白樂天にある、海青樂を舞ふ條の文を其儘に借用。(加増曾我の一)
 【山形】 山のやうな形のもの、中央高く兩端低し。
 【山刀】 鉈に類似の刃もの、獵夫樵夫などの山稼ぎに用ひるもの。
 【山樵】 樵夫のこと。
 【山かつら】 明け方に山の端にかゝる雲のこと、又、ひかげかつらの異名。
 【山川越えて】 遠隔の地から來ること。
 【山家者】 山間僻地で育つた者、都馴れぬ鄙賤の者。
 【山雀】 燕雀類の一種、多く山林中であつて昆虫を食とする、性賢く種々の曲藝など教へ娛樂の種に珍重される。
 【山雀おとし】 山雀の曲藝、門をヒラリと飛び越へる

に譬へる。(吉岡染の上)
 【山鳥】 山に棲む鳥、こは山に居る世捨て僧と云つた意。(釋迦の四)
 【山木が合戦】 源頼朝が兵を伊豆に上げ山木判官と戦ひ、石橋山にて伏木隠れのことがあつた、その戦のことをいふ。
 【山際】 山の端、山のきは。
 【山草】 裏白の異稱。
 【山隈】 山の曲折して蔭になつたところ、又は一隅。
 【山こかし】 山を賣りとばす人、山師。
 【山牛蒡】 草の名、薬用とする。
 【山崎】 山城國にある地名、山崎山は天王山とも云ひ秀吉と光秀と戦ふた舊跡。
 【山崎寺】 山城國山崎天王山の半腹にある寶寺をいふ。
 【山崎見ゆる】 河内國八幡街道から淀川を隔て北西に山崎が見えるとのこと、山崎は山城國に屬する、天王山こと山崎山の所在。(淀鯉の上)
 【山様】 山崎の與次兵衛のことをいふ廓の通語。(壽門

松の上)
 【山猿】 山家住の猿同様の男。
 【山下】 相模國大磯化粧坂につゞく色里。
 【山下宿】 相模國山背にある地名。
 【山科】 山城國宇治郡にある地名、逢坂山の西方。
 【山階寺】 奈良興福寺の異稱、もと山城國山階の里にあつたのを移したもの。
 【山柴】 山から樵り取つた柴、又は其れを負ふ人。
 【山衆】 おやま衆、遊女たち。
 【山出し】 山出しの人足、山から狩出して來た荒くれ男の人足のこと。また、田舎から出て來たまゝの田舎者。
 【山立】 山賊のこと。
 【山田の案山子】 山にある田地に立つたる案山子、見すばらしい孤立した姿にも喻へていふ。
 【山田もらねど世にあきし……】 玄賓僧都の「山田もる僧都の身こそ哀れなれ、秋果てぬれば訪ふ人もなし」から出る。(女護鳥の二)
 【山田矢走】 近江國湖東にある、山田は北に矢走は南

に、此間十丁余、矢走の歸帆は近江八景の一勝。

【山力】 暴力をいふ、山の人が山で来たへた腕力。

【山路の酒の風流】 山路にも酒を用意した風流な旅を

【山頭巾】 山人、獵人の被る頭巾。

【山寺の春の夕を来て見れば】 諸曲「道成寺」の一句

を由良之助が口ずさんだこと。(碁盤太平記)

【耶摩天】 夜摩天、欲界六天中の第三天、光明を常に

放ち、晝夜の別なく只蓮花の開閉にて分つ。

【大和淺黄と唐錦】 大和淺黄とは日本の小むつが薄淺

黄の服装、唐錦とは降參唐人の服装、この二つの對照

をいふたもの。(國性爺の五)

【大和歌】 和歌、我が國固有の歌との意、からうたの

對。 【大和鍛冶】 大和國奈良の鍛冶の稱。

【大和源氏】 大和に在國する清和源氏の一族をいふ、

大和守頼親から出る。

【大和琴】 あづま琴、神樂、雅樂に用ひる六絃の日本

固有の琴ゆゑこの稱がある。

【大和言葉】 日本固有の言葉、主として中古の雅語。

【大和島根】 日本島國のこと。

【大和大工】 大和國の大工、大和は古代建築文化の發

達した關係から大工には名匠が多く出た、上手な大

工の別稱。

【大和橋】 大阪道頓堀川に架せる東端の橋、日本橋の

東にあたる。

【やまとほのめく】 此やまとは竹本大和太夫で政太夫

と對立した名人、この場を出語りで勤めた、その太夫

名を取つて、こゝにほのめかした。(島原蛙合戦の五)

【大和屋】 紙屋治兵衛と紀國屋小春とが逢引きしてゐ

るお茶屋。(天網島の下)

【山中宿】 美濃國不破郡關原にある。(摩靜の三)

【山の井】 山中にある井、山中に水が自ら溜つて井と

なつたもの。

【山の羊饅となる】 意想外のものが經上つて變形する

驚きの譬、意外な變化、又、成上り者の意にも用ひ

る。 【山の羊から饅】 山の羊變じて饅となつたとの諺、物の

【山の邊の秋の月】 歌聖山の邊の赤人にもちる。(千載

集の一)

【山楯】 はぜの木の異名。

【やまはだき、とゝり、らくゑみ、たけはあひみる】

夜摩天は抱き、兜卒天は手をと、樂變化天は笑み

他化自在天は相見るといふ各の戀の品種を簡約して

書いたもの。(五人兄弟の四)

【山蜂】 熊蜂のこと、蜂の最も大きく黒褐色にて毒の

力甚だ猛烈なもの。

【山は鐵城】 山は堅牢不拔な城壘の如しとの義。

【山鳩色】 黄の濃厚な色。

【山彦】 こだま、山や谷などで聲の反響するを云ふ。

【病なしの病金】 身體に病氣はないが、金の欲しいの

が病氣との義。

【病になされた】 氣にかけて居られた、頭痛のやうに

思ひ煩うて居られた。(歌念佛の中)

【病病は少し癒るより起り孝は少艾より劣る】 病は少

し癒ゆる時に油斷する故却て以前より重くなる、孝

行は好色を知るに至つて劣つてくるとの義、少艾と

變化して經上るといふ喻。

【山の羊で足突く】 不注意のため思ひがけない詰らぬ

もので失敗するとの譬、長羊で足突くともいふ。

【山の羊でもかぢつて】 山の羊は腎精によいと云ふ、

それを食ふとは精力を強うする意味。

【山の奥にも鹿ぞ鳴くなる】 俊成郷の「世中よ道こそ

なけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる」を探る。

(女夫池の三)

【山の神】 女房のことを卑しめていふ。

【山の腰、山入、山さがる】 こゝの山とは山の形した

女の局部を洒落ていふ。(穂狩の三)

【山の小顔】 山の額にあたる邊を指していふ。

【山の手奴】 江戸赤坂の山の手奴のこと、赤坂は山手

故いふ、柴がきの節は此山の手奴の踊り歌から出る

といふ。

【山の額】 山の差出たところ。

【山の邊の赤人】 山部赤人、和歌に達す、三十六歌仙

の一人、柿本人丸と並び稱せられ「山柿」の名があ

る。

は容色美好の少女(又、男子)をいふ。
 【山姫】 山を守護し又掌る女神。
 【山吹】 黄金のこと、鑛山で金銀銅錫などを吹き分け
 る、其吹き分けられた代表的のものとの義。
 【山吹】 巴御前と同じく、劣らぬ勇婦烈女にて、同じ
 く木曾義仲の妾。
 【山吹色の重寶】 黄金のこと。
 【山吹の瀬】 山城國宇治にある、融大臣が此處に別業
 を置き、山吹を川岸に植えてより此名高い。
 【山猪】 猪の異名。
 【山踏】 山歩き、山を踏破すること。
 【山邊と思へども一期猿丸云々】 止めやうと思へど、
 一生去るまい云々の意を、山邊赤人、猿丸太夫など
 の歌人になぞらへて歌謠としたもの。(鎗權三の下)
 【山鉾】 山車(ダシ)の一種、上に山形その他種々の飾
 り物をし、鉾や薙刀などを立てならべる、京祇園會
 の山鉾は特に名高い。
 【山又山に山めぐり】 「山姥」の謡曲にある文句をと
 る。(壽門松の上)

【山道】 山の道の形した模様。(薩摩歌の上)
 【山村】 歌舞伎役者の實方、山村歌左衛門。(今宮心中
 の上)
 【山巡り】 諸所の山々を巡り廻ること。
 【山本の里】 上野國群馬郡にある。
 【山も見えぬ胸算用】 早計の喩、結果の分らぬ先きか
 ら、あてにすることの喩。
 【山よせ】 山に近寄せて道など作つたもの。
 【闇討】 不意に闇中に討ち取ること、暗殺、不意討。
 【病付】 病氣にかゝつた最初の日。
 【闇の錦】 夜の錦、こゝのは少しも目にとまらぬとの
 義。(浦島の三)
 【闇の夜の空礫】 眞暗闇のあてもないのに打つつぶ
 て。甚だたよりないこと。
 【闇の夜の礫】 不意に不測にどんな所から、いつ身に
 當つて傷つけるかも知れぬとの意の喩。
 【闇の夜の花】 飾つても其甲斐のないことを喩へる。
 (孕常盤の四)
 【闇はあやなし梅の花】 古今集にある有名な歌、「春の

夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくる
 一」をとる。(一心五戒の一)(吉岡染の中)
 【病みほらけ】 病みほらける、病氣でまうろくする、
 病寤。
 【やみらみつちやの皮袋】 みつちや(あばた)に暗ら
 とかぶせ、目鼻も分らぬ、むちやくちやの意に用ひ
 る、鷹筑波に「月の顔木の下やみらみつちや哉」と
 ある。皮袋も一糸爪(ヘチマ)の皮のだん袋」から出
 て、へちまの皮で縫合せて作つた袋は物も入れられ
 ず、すぐ破れる故、用に立たぬ、捨てよもよいとい
 ふ喩に用ひられる。要するに、むちやくちやに打ち
 やらかしてゐるとの意。
 【病む眼より見る眼】 病氣の本人より傍で見て居る者
 の方が一層心を勞するとの意。
 【やもじ】 夜具のこと。
 【やもめ烏】 配偶を失ふた烏、匹偶のない烏。
 【鰥鶴】 一人つぼつちになつた、みすぼらしい嘉平次
 に喩へていふ。(生玉の上)
 【家焼】 家を焼く、火つけ、放火。

【やゝこ踊】 少女たちの踊、時慶卿記などに見える。
 【彌生山】 彌生頃の山、春の山のこと。
 【矢來】 やらひ、竹又は丸太木の類で粗く結ふた團ひ。
 【野郎帽子】 野郎とは野郎頭の俳優、それが用ひた被
 り物を云ふ、若衆歌舞伎禁ぜられ野郎歌舞伎となつ
 た時、前髪を剃り落された殺風景を隠すため額髪の
 痕を被ふに置手拭を以てしたのが、遂に變移して帽
 子のやうな形式のものになつた、これを一般總稱し
 て野郎帽子と云ふた。
 【雛出す】 追ひ出す。
 【やり】 遣手の略、註は其條下にある。
 【鈴梅】 梅の一品種、花白くやゝ淡紅を帯びたもの。
 【鐘頭】 おとがひの尖つて前へ突き出たのをいふ。
 【やりが迎ひに出る】 遣手が客をお迎ひに出ること、
 武家の行列に鐘持などが迎へに出るのに譬へてい
 ふ。(夕霧の上)
 【鐘鉦】 身が鐘の穂尖のやうな鉦、突いて削るに用ひ
 る。
 【槍下に名を留め】 「槍下の高名」と同義、戰場にて敵

を槍にて突伏せ首をとること、轉じて武勳を現はすことを稱していふ。

【鑓印】 戦陣又は外出の時、其家の名を示すために、鑓の印付の環につける標をいふ。

【槍玉】 槍を手玉にとる、槍の玉ぶちのこと。

【槍玉に上げる】 槍の先で突き上げる、多くの中から撰り出して犠牲にすること。

【遣手】 廊にて遊女の監督をし、また揚屋にて諸事の取持ちをする者。

【やり繩】 行繩、遣繩、牛や馬を進退させるために付ける繩、綱よりは細いもの。

【鎗の権三が古身の鎗】 この實話の女敵生田源次の名を憚つて、昔ありし鎗の権三の巷説に仕立てた故、古身の鎗とほのめかしてゐる。(鎗権三の下)

【鎗の権三は伊達者でござる】 その頃の流行の小唄。(鎗権三の下)

【遣羽子】 二人以上で互に羽根をつき合ふてやりとりする遊び、追羽子。

【遣羽子の詰開き】 一問一答、相互に談を交はすこと

の喩。

【遣放しな根性】 放縱な性質、締りのない性質。

【鑓は振らねども】 鑓持の奴が主人の供をして鑓を振ることの巧妙さを誇つたもの、其振り方が劣ること

をいふ。(夕霧の中)

【鑓襖】 「鎗衾」と同じ、其條に註した。

【鎗衾を作る】 衾の如くに鎗を隙間なく並べ立て、穂先を揃へて突き出すこと。

【遣水】 庭園などに水を引いて流し遣るもの。また庭園に作つた流水。

【遣水の流れを買ふて云々】 質物の流れを買ふこと。(五人兄弟の二)

【鎗屋町】 大阪東區上町の町名。

【遣る粹よりは粹】 粹らしい顔して金を遣る人より、それを貰ふ無粹な丁稚の方が粹であると云ふこと。(重井筒の上)

【遣る瀬遣る方なし】 何とせやうも詮ないこと、施すべき手段のないこと。(女夫池の三)

【やわら】 柔術のこと。

【やんごとなし】 一通りでない、限りなし、よんどころない、また恐れ多いこと、いみじく貴いこと。

【やんちゃ】 子供が我儘をいふこと。

ゆ

【度】米倉のこと。

【油井浦原】何れも駿河から三河への街道宿驛、鹿の子の縁で、結ふ、髪にもちる。(五人兄弟の四)

【ゆい跡】遺跡、こゝのは跡目相續などの意。(伊豆日記の四)

【勇士にあらず】女縁にほだされ味方するは勇士の業でないとの意、作者が破格の文章の一例。(國性爺の三)

【故づける】故ありげな。

【油煙】煙火の煙り煤。

【湯を沸かして水入らず】「湯を沸かして水にする」の諺、折角骨折つて徒勞になる意、水にする縁語から水入らずの親しい親の内とかける、水入らずの註は別にある。(二枚繪の中)

【湯を沸かして水になる】折角湯を沸しながら、捨て

置て水にして仕舞ふと云ふ諺、水泡に歸すると同意義の喩。

【殊】弓かけ、射手が右手にかけて弦をひく、革製の手袋のやうなもの。

【床】床の三十七 四九三十六の縁語、お才の年齢。(鎗權三の上)

【ゆかた】縮布で仕立てた單衣。

【瑜伽の法水】瑜伽とは一切の心境と融合するを云ふ、其清淨な法の水を湛えるに喩へる。

【ゆがみ柱】茶室の室内に張り出して建てられた柱、多くは歪んだ材を用ひる。

【ゆかりの雲】紫の雲。

【行當つて了簡なし】行き詰つて思案に能はぬ。

【行合姉】異父同母を行合兄弟と云ふ、こゝのは異母姉の義に轉用。

【行合兄弟】異父同母の兄弟。

【雪を焚く】少しも燃えぬ聲。

【雪を踏んでは花かと惜む云々】諸曲「二人静」の「花

め熱湯に手を入れて探らしめ、爛れたのを邪とし、そうでないのを正としたと云ふこと。

【悠基主基】大嘗會の二つの祭壇、東を由基、西を主基と云ふ。

【朽丈揃ひし死姿】縊死の姿を云ふ、但しおきき二郎兵衛の稼職柄の縁語。(今宮心中の下)

【ゆきつき】懸想すること。

【雪に霞】白い顔にたばしる涙を喩へる。

【雪の色練】緑の雪白な色を云ふ、天王寺庚申堂七色菓子の一。

【雪の内】竹の子云々 雪中に竹の子を求めて母に供へた孟宗と、貧窮母を養ひ得ないで、妻子を生埋にする爲め堀つた穴から黄金の釜を得た郭巨との故事。

【雪の下】鎌倉の地名。

【ゆきの島】壹岐の國の邊海にある雪の島。

【雪の一筆鴉】雪中黒衣の時頼を見立て、云ふ。

を踏んでは同じく惜む少年の春の夜も静かならでさわがしき云々の句をもぢつたもの、靜御前を返も

【雪折れ竹に本来の面目をさとり】臂を切て祖師西來

意の輪を開き云々。初祖に神光と云ふ僧が来て教を請ふた、祖は唯端座して無言、折しも大雪となり庭

の竹を折つたも神光去らず、祖憐んで、諸佛無上の道は汝如き小智小徳の漫心を以て得べきでない、

神光聞くや、刀を以て左の臂を切りし故、祖は初めて教を垂れ、神光亦悟りを開ひたと云ふ。(傳燈錄に由

る) 此如く和藤内が鳴蛤の争鬪を見て軍法の奥義を發見したに喩ふ。(國性爺の二)

【雪女】北國あたりにて、大雪の日、雪の精が女の形に化して現はれ出るとの傳説がある。

【往來の岡】大和國添上郡にある、續千載「わが袖をけさもほしあへず飛鳥川ゆきよのをかの萩の白露」。

【行様】行平様の略、根から消えたい雪にかける。(松

【湯起請】探湯の起請のこと、上古、正邪を判断した